
お義兄ちゃんと呼ばないでっ！

EAST

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お義兄ちゃんと呼ばないでっ！

【Nコード】

N6259Y

【作者名】

EAST

【あらすじ】

某社の新人賞向けの原稿を期限限定で公開いたします。

主人公露木悠斗は一ヶ月半の懊悩の後、ヒロイン櫻井雛子に告白する。答えはOK！ 喜ぶ悠斗だったが、彼の父の再婚相手というのが……。

月末に削除いたします。よろしければご意見ご感想などいただけますと幸いです。

11月26日 第二稿に全面差し替えを行いました。ストーリー等
は変わっておりませんが、若干表現が変わっているところがありま
す。一度読まれた方ももしお時間があればもう一度読んでみて下さ
い。

プロローグ ― 恋人たちの季節 ― (前書き)

プロローグ部分をお送りします。本日はこの他、第一章の1を公開します。

それではどうぞ！

プロローグ ― 恋人たちの季節 ―

放課後の体育館裏。陽の光の届かない薄暗い空間に、少年と少女が立っていた。少年は詰め襟の、少女はブレザーの制服を着ている。この体育館のある私立仁正学園^{じんせい}の生徒だ。

少年は目を血走らせ、鼻の穴を膨らませ、今にも少女に飛びかかるのではないかというようなオーラを纏っていた。

それに対し、少女の方はふんわりとした髪の毛と、少々地味めではあるが小ぶりな顔につぶらな瞳、桜の花びらを思わせる唇に、少し低いが可愛い形鼻と、一応美少女にカテゴライズされても良い容姿の持ち主だ。若干幼い印象を与える容姿が、逆に保護欲をかき立てる、そんなタイプの少女である。

少年は焦っていた。考えに考え抜いた作戦だったはずだ。だが、どうしてもそれを実行に移せない。いざ少女を目の前にとすると、それまでの自信が音をたてて崩れ去ってしまうのだ。

少女の瞳が自分の目を見つめるとき、少年は自分の煩惱まで見透かされているような、そんな気がしてならなかった。

「あの……先輩？ お話って何なんですか？」

しつとりと湿った唇から、少女の問いかけが紡がれる。当たり前だ。自分の方から下駄箱に手紙を入れて呼び出しておいて、すでに一五分はこの膠着状態が続いているのだ。

少年――露木悠斗^{つゆき ゆうと}は焦っていた。早く事態を打開しなければならぬ。

だが、そんな度胸があれば最初からこんなぐだぐだな展開にはなっていないはずなのだ。入学式るとき、新入生のなかから偶然見つけた一輪の花。それが彼女だ。その花を自分のものになりたい。悠斗はこの一ヶ月半の間、悩みに悩み、そして今に至るのである。

少女――櫻井雛子^{さくらい ひなこ}――が悠斗の顔を下から覗き込んでくる。あまりにも無防備なその表情に、悠斗の心臓は悲鳴を上げていた。これ

以上は無理だと。はやくこの苦しみから解放してくれと。

悠斗はぐつと両手を拳にして白くなるほど握りしめ、歯を食いしばった。固く目をつぶり、一度下を向く。次の瞬間、悠斗は天を仰ぐと、大きく息を吸って、自分の思いの丈を雛子に叩きつけた。

「櫻井雛子さん！ 入学式で見たときからずっと好きでした！ お、お、お、俺と付き合って下さいっ！！ お願いしますッ！！」

悠斗はブンつと音がしそうな勢いで頭を下げた。腰は直角。最敬礼と言うヤツだ。悠斗は再び目を固く閉じ、歯を食いしばって時がたつのに耐えていた。

もしも答えがNOだったら？ いや、自分のような非モテなんかに告白されて、雛子は困っているのではないか？

永遠にも思える数秒間が過ぎた。暑くもないのに顔が熱い。汗がダラダラ出て、悠斗の頬を伝って地面に染みを作る。やはりダメだったかと悠斗が諦めかけたその瞬間、鈴を鳴らすような少女の声が悠斗の頭上から降ってきた。

「先輩…… 顔をあげて下さい……」

その声に、悠斗は怖々といった様子で目を開ける。目の前には雑草が茂った地面と、雛子の可愛い膝小僧が見えていた。雛子は膝と膝をすりあわせるようにもじもじと動かしている。

悠斗は思い切って顔をあげた。今まで頭上にあった雛子の顔が、一気に自分の胸元あたりの高さになってしまう。

「先輩……、なんでわたしなんですか？ もっと可愛い女の子、たくさんいるのに、どうしてわたしなんですか？」

雛子は悠斗の目をじっと見たまま、問いかける。激しくではなく、あくまでも静かに。でも、その言葉には嘘を許さないという確固たる信念が滲んでいた。

悠斗はもう一度大きく息を吸い込むと、自分の思い付くままを言葉にした。それしか悠斗には出来そうになかった。

「俺は……俺は今までずっとモテないし冴えないヤツだった。だから、こんな事いったら櫻井さんが困るかもしれないって、そう思っ

てひと月半も悩みに悩んだ。友達にも相談しないで、一人で部屋で悶々と悩んだんだ。でも、どう気を紛らわそうとしても、どう自分を誤魔化そうとしても、やっぱり俺は櫻井さんが好きなんだ。これは俺の我が儘かもしれない、でも、俺は、櫻井さんにずっとそばにいて欲しいんだ！」

悠斗の言葉が続くにつれ、雛子の瞳が潤みはじめる。目の縁に光るものがたまりはじめ、やがてそれはつつと一筋の線となって頬を伝った。

悠斗は自分がとてつもなく恥ずかしい言葉を連発してしまったことに気付き、頭を抱えてのたうち回りたい気分だった。だが、今言った言葉には微塵の嘘も含まれてはいない。全ては自分の本心だった。

「先輩……ありがとうございます……。ございます。わたし、本当に嬉しいです」

「えっ？」

「わたしも、先輩のこと、ずっと見てました。先輩が校舎裏で仔猫に餌をあげてるのを見てから、ずっと……」

ずっと、見ていた？ 自分の事を？ 悠斗の心臓がどくんと跳ねる。もしかして……。もしかしてこれは……。

「先輩、わたしも先輩が好きです。ずっと一緒にいられたらいいなって、そう思ってた。でも、わたしって地味だし、可愛くないし、取り柄もないし、全然自分に自信がなくて、だから自分からは言えなくて……。呼び出してくれたのが先輩だと分かった時は、心臓が破裂しちゃうんじゃないかって思うほどでした」

訥々と語る雛子の言葉が、静かな旋律となって悠斗の耳に届く。その旋律は悠斗の鼓膜を振動させ、聴覚神経を刺激し、脳に情報を届けている。「この子も自分の事を想ってくれている」と。だが、悠斗には一つだけ許せないことがあった。それは、雛子があまりに卑屈になっていることだ。まあ、それは悠斗も人のことを言えた義理ではないのだが。

「先輩……本当にわたしなんかでいいんですか？」

「櫻井さん、そんなに卑屈になるなよ。そんなこといったら、俺だって今まで散々非モテだのキモイだの言われてきたヤツなんだし。それに、俺の目には櫻井さんが誰よりも可愛く見えるんだ。これは嘘じゃない、本当の事だぞ！」

悠斗はそこまで一気に言うと、ふうつと息をついた。

「俺だって、君を呼び出すだけ呼び出しておいて、こんなに待たせるようなヘタレ男なんだ。幻滅したんじゃないか？ ああ、こんなヘタレだったんだ、って」

「そんなことありませんっ！」

雛子はその身体に似合わない大きな声を出した。自分を卑下する言葉を連発していた悠斗は口をつぐむ。

「先輩は、先輩はヘタレなんかじゃありません。とっても優しいひとです……」

「櫻井さん……」

「わたし、決めました！ わたしは、先輩のそばにいます。ずっとです！」

胸の前でぎゅっと拳を握り、上目遣いに悠斗を見つめる雛子の瞳には、固い決意の色が滲んでいた。

「……わかった。俺もずっとそばにいる。ずっと、ずっとだ」

悠斗がそつと雛子の肩に手を回す。雛子もそれに応じて悠斗の首に腕を回す。二人の顔が次第に近づいて行き、やがて静かに唇が触れあった。ほんの微かに触れるだけの接吻。だが、それは二人にとってなによりも大切な儀式だった。

「先輩……」

「なに？ 櫻井さん」

「雛子って呼んで下さい」

「ん……じゃあ、雛子」

「わたし、先輩みたいなおにいちやんがずっと欲しかったんです。先輩のこと、おにいちやんって呼んでいいですか？」

悠斗は嬉し恥ずかしさに、その場でもんどり打って体育館の壁に頭突きを連打したい衝動に駆られたが、すんでの所で理性がブレーキをかけてくれた。

「お、俺でよければ、いくらでもおにいちゃんって呼んでくれ！」
「嬉しいっ、おにいちゃん！」

僅かに見える空の色は夜の闇が近づいてきていることを示している。だが、二人には時間の経過など些細なことにすぎなかった。

この日、放課後の体育館裏のほんの僅かの空間。それが恋人たちの永遠の愛の誓いの場となった。

プロローグ ― 恋人たちの季節 ― (後書き)

いかがでしたか？ よろしければご意見ご感想などお寄せ下さい。

第一章——恋人が妹！？—— 1（前書き）

第一章の1をお送りします。それではどうぞ！

露木悠斗は、一言で言えば冴えない高校生だった。背はまあまあ高いが、取り立てて顔がいいわけでも、成績がいいわけでもない。クラスの女子連中からは『安全パイ』扱いされているし、友達連中もモテない奴らばかりだ。

だが、その悠斗に彼女が出来た。それも、地味めではあるものの、控えめに言っても可愛らしい新入生だ。悠斗はその事実を噛みしめながら、夕食の支度をするためにキッチンに立っていた。

「おっと、アクはちゃんと捨てないとな。これがあると味が濁るんだ」

悠斗には母がいない。幼い頃、大病を患い、あっけなく死んでしまった。まだ物心つくかつかないかのころだったので、悠斗には母の思い出らしいものはほとんど無い。ただ鮮烈に覚えているのは、暖かくて、柔らかくて、いい匂いがする、ということだった。

「そっぴや、櫻井さ……雛子も、暖かくて、柔らかくて、いい匂いがしたなあ。女の子はみんなあなのか？」

雛子の身体を抱き留めた時の感触が、悠斗の脳裏に蘇る。華奢に見えて良く育った胸や、ほっそりした手脚。髪の毛から香るシャンブーの甘い匂い。どれを取っても悠斗の煩惱を刺激しまくりだった。これ以上ないくらいだらけた表情で妄想世界の住人になっていた悠斗は、鍋が吹きこぼれそうになってやっと我に返った。危ない危ない。

「カレーは大辛。これも親父殿の指示だ。従うしかあるまい」

本当は自分は中辛くらいが好きなのだが、露木家の大黒柱にして絶対権力者である父に逆らうことなど、悠斗には思いもよらないことだった。現に、逆らおうとして児童虐待寸前のお仕置きを何度されたことか。

だが、それ以外は悠斗の父は良き家庭人だった。夏休みや冬休み

には長期休暇を取って、悠斗を遊びに連れ出した。おかげで母がないということに寂しい思いをすることはほとんど無かった。

大卒のカレーラーを鍋に放り込みながら、悠斗は雛子とのこれからのことを思い浮かべる。今日は舞い上がっていて、ケータイの番号やメアドの交換すら忘れていた。明日は土曜日で学校は休み。となると、次に逢えるのは月曜日と言うことになる。

「今度は絶対抜かりなくいくぜ！ きつと今ごろ雛子も寂しい思いをしてるに違いない！ 不甲斐ないおにいちゃんをゆるしておくれ！」

火をとろ火にして煮込む体勢に入ると、悠斗はキッチンを離れ、二階の自室に上がっていった。そこには、写真部の部員から買った雛子の盗撮写真が、フォトフレームに入って机の上に立てられていた。

「やつぱかわいいいな、雛子……。自分の可愛さに気づいてない辺りが余計に可愛いぜ」

悠斗はフォトフレームを胸に抱えると、ベッドにどさりと倒れ込み、ごろごろと転げ回った。

「あああああ~~~~っ！ 雛子を押し倒してあんなことやこんなことをしたい！ 両思いだから許されるよな？ フフン、思い知れ非モテども。俺はすでに貴様らとは違う人種にジョブチェンジしたのだ！ 悔しかったら雛子より可愛い彼女を作ってみろっつんだ！」

メチャクチャである。だが、本人は煩惱にまみれたその愛情に一片の疑いも抱いていなかった。自分が煩惱まみれだということを、十分過ぎるほどに知っていたからだ。

「雛子~~~~っ、ちゅっ」

最後にフォトフレームの写真にキスをする、悠斗はそれを机に戻し、スキップするようにして階段を下りていき、途中で転んで一階まで滑り落ちた。

「いって———！ くそっ、せつかくいい気分だったのに。縁起でもない」

キッチンへと戻り、カレーの煮込み具合を確認。良い感じに仕上がっている。これならカレーにうるさい悠斗の父でも文句は言わないだろう。鍋を数回掻き回して、焦げていないかをチェック。大丈夫。この火加減なら焦げることはない。

その時、玄関の鍵を開ける音が悠斗の鼓膜をふるわせた。時計を見ると、午後八時三〇分。父の帰還である。

「ただいまー。お？ 今日カレーか。いい香りだな！」

悠斗の父、露木悠大^{ゆうだい}は、居間のソファに鞆を放り出すように置くと、ネクタイを緩めた。悠斗の目から見ても、大人の男という感じのする所作で、自分も社会人になつたらあんな風になりたいと密かに思っていた。ただ、社会人になる、ということが一体どういうことなのかは、まだ悠斗には理解出来ないでいたが。

「どれ、ちよつと味見させる。うん、このくらいの辛さが丁度いいんだ。悠斗、また腕を上げたな？」

「市販のルーにちよつと隠し味を入れてるだけだよ。腕もくそもあったもんじゃないさ」

「謙遜しなくてもいい。世の中には市販のカレールーを使ってもカレーを作れないヤツもいる。まあ、それが父さんなんだがな」

はっはっはと大口を開けて笑う悠大。実際、食事といえれば幼い頃は家政婦さんが作ってくれたものばかりだった。職場では部下を何人も抱えてバリバリと仕事をこなす悠大の、唯一苦手とするのが料理だったのだ。

「まあいいよ。風呂先に入る？ 飯の方が先？」

「そうだな、まずは飯だ」

「了解」

炊飯器にはすでに炊きあがったご飯がスタンバイしている。カレー皿を持った悠斗が炊飯器の蓋を開けると、つやつやのご飯が姿を現した。魚沼産のコシヒカリの味を損なわないように、天然水で炊いたご飯だ。それをたっぷりカレー皿に盛る。

続いてしっかりと煮込まれた大辛カレーをご飯の上からかける。

悠大は普段はそれほど大食漢というわけではないが、ことカレーになるとそこらの大食いチャンプ並みに食べるのだ。

「はい、お待たせ」

すでにスーツを脱いで部屋着に着替えた悠大が、ダイニングテーブルの定位置に陣取っていた。だが、すぐにはカレーに手をつけない。露木家では、余程のことがない限り、親子揃って夕食を食べることになっているのだ。悠斗が自分の分のカレーをよそって、自分の席に着く。それを待っていた悠大が、両手を合わせた。悠斗も同じように手を合わせる。

『いただきます』

スプーンでカレーとご飯を掬って、口まで運ぶ。その作業すらもどかしいと言わんばかりに、悠大は食べる。だが、その日の悠大はいつもよりさらに嬉しそうにカレーを頬張っていた。

「ねえ、父さん、もしかしてなにか良いことでもあった？」

「ん？ んー、やっぱり分かるか？ それより、お前の方こそなにかいいことがあったって顔してるぞ？」

「まあ、学校でちょっとね。それより、父さんのいいことってなさ」

「それはちよつと内緒だな。ああそうそう。悠斗、お前日曜日は空いてるか？」

「空いてるけど、なんで？」

「久々に山の森林公園に行こうと思ってな」

「なんだよ、いきなり。それなら何か弁当でも作っていくかな」

「いや、その必要はない」

悠大は満面の笑みで言った。

「とにかく、日曜日は開けておけ。これは父さんからの命令だぞ」

「ハイハイ……」

「ハイは一回だ！」

「はーい」

二日後、日曜日は朝から快晴だった。黄砂も降っていないし、森林浴には格好の天気だ。悠斗は朝七時に起きて朝食の準備をしていた。普通の高校二年生なら「なんで俺が飯なんか作らなきゃいけないだよ」とやさぐれるところだろうが、悠斗はちよつと違う。小生のところに家政婦さんから料理の手ほどきを受けて以来、自分で食事を作ることがたのしくて仕方がないのだ。

今日のメニューはベーコンエッグとトーストとサラダ、それにネルドリップのコーヒー。ベーコンをカリカリに仕上げるのが悠斗流のこだわりポイントだ。食事が出来上がる頃に、悠大が寝室から一階へと降りてくる。

「おはよう、父さん」

「おお、おはよう、悠斗。今日はベーコンエッグか」

「そろそろ起きてくると思って用意してたんだ。今コーヒーを入れるから、座って待ってて」

「ん……。つと、その前に新聞新聞つと」

悠大は外資系の商社に勤めるサラリーマンだ。新聞も一般紙の他に、別に経済専門紙を取っている。経済紙を斜め読みしながら、悠大は世間話でもするかのような気楽さで口を開いた。

「なあ、悠斗。もしもな、父さんが再婚するっていったら、お前はどつする？」

入れ立てのコーヒーを悠大の前に置きながら、悠斗は特に關心もないと言った風に答えた。

「別に、いいんじゃない？」

「なんだ、それだけか？」

悠斗はてきぱきと朝食の準備をしながら父の問いに答える。

「それは父さんが決めることであつて、俺がとやかくいうことじゃない。父さんがそうしたいならそうすればいいよ。……さてよ？」

父さんが再婚したら、義母さんが出来るのか。家事とか楽になりそ

うだな。んで、なんでそんなこと聞くのさ？」

「いや、聞いてみただけだ。特に意味はない」

朝食の支度を終えた悠斗がテーブルに着く。新聞を読んでいた悠大が、それを机の脇に置く。いつも通りの休日の朝食。いつもかわらない日曜日。

少なくとも、悠斗はそのときはそう思っていた。

「さて、そろそろ出発するか！」

時刻は午前九時。森林公園までは徒歩でも行けるが、今日はバスを使うので、バスの時間を考えなければならない。バス停までは歩いて数分だから、確かにもうそろそろ出発しなければならない時間だった。

悠斗はトレーニングシューズに足を突っ込みながら、腕時計を確認する。大丈夫、時間の余裕はある。その日の悠斗の出で立ち、カーゴパンツに黒のプリントTシャツ、上に長袖のシャツを重ねて着ている。どうみてもユニ・ロで全部揃えました感が満点だ。

それに対して悠大の方はチノパンにブランドもののポロシャツ。腕には結構高い腕時計。シンプルだけど締まって見えるコーディネイトだった。父親に対して何とも言えない敗北感を抱きながら、悠斗は靴紐を締める。

「よし、じゃあ行こう。しかし久しぶりだな、悠斗とこうして日曜日に出かけれるのも」

「高校生になって父親と仲良く森林公園へ行くヤツの方が少ないよ」「まあ、そう言うな。今日はちょっとしたサプライズを用意してるんだ」

門扉を開いて家の前の通りに出る。バス通りまではほんの数分。バスもちょうどその頃に来るはずだった。

「そうそう、父さん。俺にもついに彼女が出来たよ」

「ほう！ お前みたいな野暮ったいヤツを好きになつてくれる物好きな女の子もいたのか！」

悠斗は肩をがっくりと落とした。悠大は時々悠斗が自分の遺伝子を受け継いでいるということを忘れていたような発言をする。このときがまさにそれだった。

「まあ、野暮ったいのは確かだけどさ。ついに俺にも春が来たんだよ！ それがまた可愛い子でさ！ 一つ下の新入生なんだ」

「ふむ。つまり新入生なのをいいことに、自分のヘタレぶりを隠し通したんだな？ なるほど、それなら納得出来る」

「ひつでーな」。素直に息子に彼女が出来たことを喜んでくれてもいいじゃないか」

悠大は空を仰ぐと大口を開けてはっはっはと笑った。

「喜んでるさ。だがな、お前はまだ高校生だ。節度をもった付き合い方をするんだぞ？」

そんな話をしていると、森林公園行きのバスがガタゴトと走ってきた。森林公園に向かうバスの路線はもう一路線、街の反対側を循環してくるものがある。このバスは『東部循環系森林公園前行き』という札が出ている。つまりは街の東側から森林公園へと向かうバスだ。お察しの通り、もう一本の路線は『西部循環系』である。

後部のドアからバスに乗り込み、露木親子はドアのすぐ後の席に並んで座った。五月のうららかな陽射しが、悠斗を眠りへと誘う。やがて、悠斗は軽い寝息を立てて浅い眠りへと落ちていった。

「悠斗、悠斗。終点だ。着いたぞ」

遠くから父の呼ぶ声がする。終点だって？ 何の話だ？ 悠斗はまだ目覚めきらない脳みそに無理やり覚醒を命じて目を開いた。一瞬、陽の光で視界が真っ白に染まる。明るさに慣れると、窓の外には森林公園の入り口と、バス停の屋根が見えていた。

「やっと起きたか。ほら、運転手さんの迷惑になる。さっさと降りるぞ」

「う、うん」

悠大は先頭に立ってさっさと二人分の乗車料金を払って降りてしまう。悠斗は慌てて後を追おうとするが、デイパックの肩紐が座席の手すりに絡まって上手く取れない。運転手に平身低頭してバスを降りるまでには結構な時間を要した。

「遅い！　これが女性相手の待ち合わせだったら平謝りしなきゃならんところだな」

「そうは言ってもさ、この肩紐が」

「言い訳は男らしくないな。ふむ、時間は丁度いいか」

悠大は見るからに高級そうでいて、渋いデザインの腕時計で時間を確かめる。一々所作がダンディなのが悔しくて、悠斗は悠大から目を逸らしていた。と、坂の下から一台のバスが上ってくるのがみえる。街の西側を廻ってくるバスだろう。それにしても、なぜ悠大は森林公園に入場しようとしなのだろう。そんなことを考えていると、西部循環のバスは目の前のバス停にゆっくりとその車体を停めた。

乗客が降りてくる。結構な数だ。大体は家族連れだが、悠斗はその中に見知った顔を見つけていた。あれは、あのふわふわの髪は！
「雛子！」

突然自分の名前を呼ばれた雛子は、キョロキョロと周囲を見まわし、悠斗が自分の方へと駆けてくるのを見つけた。

「おにいちゃん！？」

「偶然だなあ。こんな所で雛子に会えるなんて、今日はツイてるな、俺」

「もう、他の人が見てるよ？　恥ずかしいよあ」

「恥ずかしがることないだろ？　俺と雛子の仲じゃないか」

その時、静かで、上品な印象の女性の声が悠斗の耳朵を打った。

「そう……あなたが悠斗くんね。雛子の『おにいちゃん』の」

その声に悠斗が振り返ると、そこには雛子をぐっと大人っぽくしたような美人が立っていた。

服は上品なワンピースにボトムスの重ね着。嫌みでない程度にアクセサリーをつけて、薄化粧をしている。

「もしかして……お母さんですか？ 雛子……さんの」

「そうです。櫻井都子みやこと言います。雛子の母で——」

悠斗はその言葉に続いた悠大の声に凍り付いた。

「——悠斗、お前のお母さんになる女性だ」

第一章 ― 恋人が妹！？ ― 1（後書き）

いかがでしたか？ ご意見ご感想などいただけたら幸いです。

第一章 —— 恋人が妹！？ —— 2（前書き）

第一章の2です。

それではどうぞ！

悠斗は憂鬱だった。何故憂鬱なのかと言えば、答えは簡単。彼女として父親に紹介するはずの雛子が、戸籍上本当の『妹』になってしまったからだ。これからあんなことやこんな事を学校やゲーセンや遊園地や、その、高校生が行ってはいけないホテルとかでするはずだったのに、だ！

「俺は認めないぞ、こんな結婚！俺たちは一昨日恋人同士になったばかりなんだ！それがなんで今日になっていきなり『お前たちは兄妹になるんだ』なんていわれなきゃならないんだ！！」

森林公園の一番高い場所、展望広場のテーブル席に露木家の父子と櫻井家の母子が顔を揃えている。悠大は難しい顔をして腕組みしたまま身じろぎ一つしない。だが、業を煮やしたのか、熱弁をふるう悠斗をじろりと睨み付けると視線で「黙れ」と命じた。

だが、今日の悠斗はそんなことでは止まらない。止まらない。何しろ雛子とのこれからのことが、自分たちの手の届かないところで決まってしまうかねないのだから。雛子は悠斗の反対側の席で、悠大と都子をちらりちらりと交互に見ながら、肩身狭そうに身を縮めている。

「雛子！お前もいつてやれ！俺たちはずっと一緒にいるって誓ったって！これから毎日想い出を積み重ねていくんだって！」

突然話を振られた雛子は、三人の顔を見まわすだけで何も言葉に出来ない。まるでさっきの悠大の言葉が雛子から言葉を奪う呪文だったかのように、黙り込んでいる。

「悠斗、お前、今朝父さんが再婚するっていったらどうするか聞かれて、反対しないって言っただばかりじゃないか。あの言葉は嘘だったということか？」

「うっ、そ、それとこれとは話が別だ！よりによってなんで雛子の母さんなんだ！なんで俺たちが本当に兄妹にならなきゃいけない

いんだ！」

「本当の……兄妹……」

それまで黙り込んでいた雛子が、悠斗のその言葉に反応した。雛子も反対するのだろうか？ 悠斗は固唾を吞んで続く言葉を待った。「おにいちゃんと、本当の兄妹になれるなんて！ わたし、夢みたい！ おにいちゃん、わたしたち、ずっと一緒にいられるよ！」

「違うだろ！ 俺たちは恋人同士であって兄妹じゃない！ それともあの体育館裏での誓いは嘘だったのか？」

「体育館裏で誓ったのは、ずっと一緒にいることと、おにいちゃんって呼んでいいことだよ？」

「だあああああああああああああ！ 違う違う違ううー！！ そうじゃなくて、恋人同士らしいことをしたいとは思わないのか？ 教育上不適切な、あんなことやこんなことや……」

「おにいちゃん、そんなえつちな事考えてたの……？」

雛子が自分の身体をかばうように椅子ごと後じさる。自分の煩惱が駄々漏れのなっていたことに気づいた悠斗は、両手でバシンと一発自分の頬を打って目を覚まし、話を続けた。

「とにかくだ！ 兄妹ということになったら、たとえ血が繋がってなくなっても世間は『恋人』とは見なしてくれなくなる！ 雛子はそれでいいのか？」

「わたし……おにいちゃんと一緒にいられるならそれでもいいかも……」

「決まりだな。この再婚に反対なのは、悠斗、お前だけだ」

悠大の冷徹な声が悠斗を打ちのめす。たった二日前に味わったこの世のものとも思えない喜びが、たった二日後に絶望に取って代わるとは。しかも、味方についてくれるとばかり思っていた雛子は「おにいちゃんと一緒にいられたらそれでいい」と二人の大人の側についた。これが裏切りに思えずになんだというのだろうか。

「というわけで、私と都子さんは今日これから婚姻届を出してくる。当然雛子ちゃんはそのうちの娘だ。法律がどうだろうと、一旦家族とな

った子をどうにかしようなどと考えてみる……」

悠大は普段の良き家庭人としての顔ではなく、絶対的権力者の顔で悠斗に宣言した。

「お前の寿命が相当縮むことは覚悟しておけ。妹に手を出そうなんていう兄貴は鬼畜だ、最低だ、生きるに値しない！」

悠斗を睨み付ける悠大の瞳が、その言葉は本心だと物語っている。都子は小首をかしげて頬に手を当て「あらまあ」といった表情を浮かべている。雛子はもう悠斗と一緒に住めると言う事実だけに頭が行っているようで、まるで相手にならない。

全てから見放された気分で、悠斗はがっくりと肩を落とした。どさりと椅子に腰をおろす。何だか視界が歪んでいる。鼻水も出てきている。ああ、自分は泣いているんだと気づくまで、悠斗にはかなりの時間が必要だった。

「もう、好きにしてくれ。俺が何を言っても、父さんが決めたことは絶対なんだろう？　だったら最初から息子の意見なんか聞くなよ」「うむ、好きにするぞ。実は夕方には都子さんたちの荷物が家に届く。引越し作業を手伝うんだ。分かったな」

悠斗はふらりと席を立った。もうどうにでもなれ。それが悠斗の正直な気持ちだった。このまま家に帰ろう。財布は持ってきてる。バスにも乗れる。今はただ一人になりたい。一人になって、多分泣きたい。だが、悠大はそれを許してはくれなかった。

「なんだ、悠斗。帰るのか？　帰るなら雛子ちゃんを家まで案内してあげなさい」

帰りのバスの中は、悠斗にとって地獄だった。

手の届くところに雛子がいるのに、手を伸ばせば肩を抱けるのに、もうそれは許されない。しかも、雛子はそれを受け入れている。あの体育館裏での誓いはなんだったのか。自分たちは両思いじゃなか

ったのか？ そんな想いが繰り返し悠斗の胸に押し寄せる。

雛子はバスの車窓から見える景色を眺めているだけで、なんも言っではくれなかった。二人になればもしかしたら本心が聞けるかもしれないという悠斗の微かな希望は、床に叩きつけられたガラス製のコップのように打ち砕かれた。

やがて、バスは露木邸の最寄りの停留所に止まる。悠斗は黙って先を歩き、二人分の乗車料金を支払ってバスを降りた。

「……おにいちゃん、怒ってる……？」

何を当たり前のことを、と詰め寄りたいのをぐっとこらえて、悠斗は自宅へと足を向けた。雛子は半歩後をとことんついてくる。

「おにいちゃ……」

「俺は認めないからな」

雛子の呼びかけを、悠斗の押し殺した声が遮った。びっくりと雛子の身体が震える。雛子はすぎるような目で悠斗を見つめる。まるで本当の妹が兄にすぎるかのように。

「俺が欲しかったのは恋人だ。彼女だ。ラヴァーだ！ 妹なんて欲しくなかった！ それなのになんだ！ 雛子だけは俺の側についてくれると思ってたのに……。お前は裏切り者だ！」

悠斗はそれだけ言うつと、もう目の前にあった家の門扉を開いてさっさと中に入ってしまった。ドアを閉じた悠斗は背中でドアにもたれかかりながら、深いため息をついた。もしかしたら、自分は言い過ぎたのかもしれない。でも、さっき言ったことは少なくとも嘘じゃない。自分の側についてくれると信じていた、信じ切っていた雛子が、悠斗と都子の側についたことに、悠斗は大きな衝撃を受けていた。

「つまりは、雛子はただ単に『おにいちゃん』が欲しかったってことか……。ははははっ。笑えないギャグだよな」

悠斗はしばらく玄関で雛子が上がってくるのを待った。だが、数分待って入ってこない、二階の自分の部屋に引き籠もった。

（神も仏もあるものか。結局俺はまたボッチの非モテの非リア充に

逆戻りだ）

自分の部屋のベッドに倒れ込むと、悔しさで涙が滲んできた。高く持ち上げられて、全力で地面に叩きつけられたようなものだ。痛いのは身体じゃなくて心だけだ。

そうしてどのくらい時間が経っただろう。カーテン越しに差し込んでいた陽の光が陰り、ぽつり、ぽつりと天からの滴が屋根を叩く音が響きはじめた。いくらなんでも雨が降り出したら家に入ってくるに違いない。迎えに行くのは、何かに負けたような気がする悠斗だった。

だが、数分経つてもドアが開く音は聞こえてこない。雨音はますます勢いを増していく。悠斗の脳裏に冷たい雨に打たれて震える雛子の姿が浮かんた。

「ええい！　なんで入ってこないんだよ！」

ベッドから跳ね起き、階段を一段飛ばしで駆け下りる。短い廊下を駆け抜け、ドアのノブを握り、捻る。

そこには土砂降りの雨に濡れる雛子の姿があった。サンダルに乱暴に足を突っ込み、道路に飛び出す。悠斗は雛子の両肩を掴み、声の限り叫んだ。

「バカかお前は！　今日からここがお前の家なんだ！　雨が降ってるのに、こんなになず濡れになるまで外にいるなんて、何考えてるんだ！」

「だって、おにいちゃん、認めてくれないから……わたしのこと」

「いいから、こつち来い！　これ以上濡れてると風邪引くぞ！」

「おにいちゃんに嫌われるくらいなら、風邪でもこじらせて死んじやった方がいいもん」

「バカ！　俺は雛子が好きだ！」

伏し目がちだった雛子の表情が、ぱっと明るいものになる。

「ほんとう？」

「ああ、本当だ！　ただし、妹としてじゃないぞ？　男と女としてだ。そこを勘違いって、ちょっと待て！」

ずぶ濡れの雛子が悠斗の首にぶら下がるようにして抱きついていた。近くに、あまりに近くに顔があつて、目を逸らそうにもそらせない。雛子はゆっくりと目を閉じた。

「おにいちゃん……大好き」

「つて、こんなに身体が冷え切つて。雛子、とにかく風呂だ！　すぐ風呂沸かしてやるから入れ！　な！」

「ん……。わかつた」

雨はますます強くなる。いつの間にか、悠斗の服もずぶ濡れになっていた。

「さ、こつちだ」

「うん……」

玄関でずぶ濡れになった靴を脱がせ、廊下を水浸しにしながら、悠斗は雛子を風呂場に案内した。カランを捻つてお湯を出す。こんな時に瞬間湯沸かし器なのは有り難いと悠斗は思う。

お湯の温度が適温になったら、脱衣場に雛子を残し、悠斗はとりあえずの着替えにと自分のスウェットスーツを取りに二階の自室に上がった。クローゼットを開くと樟腦の特有の香りが鼻をつく。

「確かこの辺に……あつた！」

ちよつとサイズが大きいけれど、この際贅沢は言っていられない。すぐに階下に持つていく。浴室からはシャワーを浴びる音が聞こえてくる。今なら大丈夫、事故で覗いてしまうこともない。脱衣場の扉を開いて、洗面台の上に持つてきたスウェットスーツを置く。ふと脱衣かごを見ると、いままさに脱いだばかりの雛子の下着が濡れた服と共に置いてあつた。手に取りたいという煩悩を振り切つて、悠斗は浴室内の雛子に声をかける。

「雛子……雛子。着替え、持つてきたから」

『うん……ありがとう』

ビリと震える。雛子は手当たり次第にそこら辺にあるものを悠斗に向かつて投げはじめた。シャンプー、リンス、入浴剤の瓶、石けん、ボディーソープ等々。

「まて、落ち着け雛子！ これは事故だ！ 俺は決して下心があつて覗いたわけじゃ」

「言い訳は私が聞こうか、悠斗」

氷より冷たく、鉛より重い声が背後から悠斗に投げかけられる。恐る恐る振り返ると、そこには鬼の形相の悠大が腕組みをして仁王立ちしていた。

（ああ、俺の人生もここまでかもしれない……）

「あらあら。廊下がずぶ濡れだったから、もしかしたら雨に降られたのかと思ってただけど、悠斗君、なかなかやるわね」

都子が微妙に話をややこしくしてくれる。今の一言で悠大の怒りゲージがワンランク上がったらしい。

「悠斗……さつさと風呂場から出て行けっ！！」

「ひいっ！！」

情けない悲鳴を上げながら、悠斗は風呂場の扉を飛び出し、悠大の脇を通り抜けてドタドタと階段を上り、自室に引き籠もった。

「まあ、事故だということは分かった。だがな、その原因を作ったのは、悠斗、お前だ」

雛子からの事情聴取を終えた悠大は、自室のベッドで布団にくるまっていた悠斗をたたき起こして正座させた。そしてお説教タイムである。

「着替えを用意してやったのも、まあお前なりの優しさからだろう。だが、最初から雛子ちゃんを妹と認めてうちに上げていれば問題は無かったはずだ。違うか？」

「うう……違います」

「なら、雛子ちゃんを妹と認めるか？」

「それとこれとは話が……」

「同じ話だ」

「ううっ……」

「いいか、お前たち二人は今日から兄妹だ。ただでさえ血の繋がらない年頃の男女が一つ屋根の下に暮らすんだ。世間様の目は厳しいぞ？ 少しでもおかしそぶりを見せようものなら『あの二人は爛れた関係だ』と噂を立てられる。ならばそういう噂を立てられるような隙を見せないように普段から自分たちを律しろ」

「……」

「分かったのか？」

その時、悠大の胸ポケットに入っていた携帯電話が軽快な電子音を奏でた。悠大はまだ説教したりないといった様子だったが、着信名を見てから廊下に出て電話を取った。

「はい、露木です。は、はい。え？ 米国赴任？ は？ 再来週から？ はい、パスポートはありますので、就労ビザがあれば。はい、はい。分かりました行かせていただきます」

どうやら職場からの電話だったようだ。悠大の表情が深刻なものに変わる。

「と、父さん、どうしたの？」

「再来週から、父さんは二年間アメリカの支店に赴任することになった」

廊下で話を聞いていたのだろう、都子も姿を現す。

「せっかく籍を入れてきたのに、離ればなれなんて嫌ですわ」

「うむ。この際だ。一家全員でアメリカに……」

「ちよっと待ってくれよ！」

悠大と都子は、悠斗の言葉に振り返った。何を言うつもりだろう、という表情がありありと見える。悠斗は大きく息を吸うとはっきりと宣言した。

「俺と雛子は、日本を離れない！」

第一章 ― 恋人が妹！？ ― 2（後書き）

いかがでしたか？ よろしければご意見ご感想などお寄せ下さい。

第一章——恋人が妹！？—— 3（前書き）

第一章の3をお送りします。それではどうぞ！

一階のリビングルーム。風呂から上がって悠斗の持ってきたスウェットスーツに着替えた雛子も交えて、四人が『家族』になってから初めての家族会議が行われていた。

「で、悠斗。お前はさっき何と言ったんだったかな？」

冷徹な悠大の声がまるで巨岩のような重さを持って悠斗にのし掛かる。だが、ここで怯んでいるわけにはいかない。悠斗はありったけの勇気を振り絞ってそのプレッシャーをはね除けた。

「俺と雛子は、日本を離れないと言ったんだ。大体、俺が仁正学園に入学するのにどれだけ勉強したと思ってるんだ？ 担任教師からは『絶対無理だ、やめておけ』と言われ、友達からも『高望みはやめろ』と言いつづけられ、そんな中で勝ち取った合格だぞ？ 父さんはそれを紙くずのようにはいはいと捨てろっていうつもりか？ 父さんだって仁正学園への合格は喜んでくれてたじゃないか」

悠大は口を一字に結んだまま、腕組みをしてソファに深く腰を下ろしている。悠大にとって、悠斗がこれほど反発するのは初めての経験だった。もちろん反抗期はあった。だが、「父さんの言うことは絶対だ」という教育方針の下、悠斗の反抗期はさほど長くは続かなかったのだ。

その悠斗が、恐らく初めてと言っていいほど、はっきりと自分の意志を父親に伝えようとしている。鬼のような形相の下で、悠大は正直驚かされていた。自分の息子がここまで自分の意見を主張できるほどに育っていたということに。

「だがな、悠斗。世間様はそうは見てくれないぞ？ 血の繋がらない男女が一つ屋根の下に暮らすと言うことは、そこには……うおっほん、それ、あれだ、色々と不純な事があるのじゃないかと疑われるものだ。確かに進学校の仁正学園に通い続けたいというお前の意見はもつともだ。だがな、それで家族が離ればなれになってもいい

ということはないんじゃないか？」

「俺はこのまま仁正学園に残りたい。雛子！　雛子だってそうだな？」

突然自分に話を振られてあたふたとしていた雛子だったが、落着きを取り戻すと控えめながらはつきりと頷いた。

「うん……。わたし、今の学園に通い続けたい。せつかく難関を突破して入った仁正学園だもの。わたしは卒業まで通いたい」

「まあ、雛子がこんなにはつきり自分の意見を口にするなんて。もしかしたら初めてなんじゃないかしら」

都子が驚きを隠せないと行ったようすで自分の娘を見つめている。「お母さん、わたしも日本に残りたい。アメリカにはついていけない！」

「というわけだ。これが子供たちの共通の意見ってことになる。どうだ、父さん。それとも、やっぱり『親の言うことは絶対だ』と言って受験の努力までふいにするつもりか？」

「ううむ……」

悠大の心は揺れはじめていた。確かにこの二人は恋人同士になりかけた。だが、悠斗の言動を見ていれば、雛子の嫌がることをするとは思えないし、そんな風に育てた覚えもない。雛子は悠斗になっっているし、これは子供と都子を置いて自分だけでアメリカに赴任した方がいいのではないか。

「悠大さん、私はあなたについていきますからね」

「えっ？　しかし、それは……」

「あなたが何を考えていたかはお見通しです。子供たちと私を残して単身赴任しようとしていたでしょう？」

まさにその通りなので、悠大はむうつと言つめいたきり下を向いてしまった。

その時、玄関のチャイムが軽快な音をたて、来客を告げた。

「あ、そろそろ引越し屋さんが来る頃ね。家族会議は一旦中断しましょう。お夕飯の時にでも再開したらどうかしら」

「そうだな。まずは荷物を家に運び込まなきゃならん。悠斗、雛子ちゃん。手伝ってくれ」

「分かった」

「はい！」

こうして悠斗対悠大の親子対決バトルの第一回戦は、引越し屋の登場によって引き分けという形で終わった。引越し屋が荷物を手際よく運び込む間にも、悠斗は夕食のときに行われるであろう第二回戦のことを考えていた。

少なくとも、学園へ通い続けたいという意見は武器にはなった。雛子の意見もそうだ。だが、あと一つ押しが足りない。そう、それは何かが自分には分かっている。だが、それを認めてしまえば、雛子と日本に残る事はできるだろうが、恋人という関係は壊れてしまっただろう。

悠斗はその二律背反を乗り越えなければならぬと心に決めるのだった。

夕食は引越祝いを兼ねて出前の寿司だった。都子はせっかくだから自分が作ると言ったのだが、今日くらいはいいだろうと悠大が注文してしまったのだ。悠斗は寿司が食えるなら引越しも悪くないな、などと内心思いつつ、マグロばかりを狙って食べていた。

食事が終わりにさしかかった頃、悠大がわざとらしく咳払いすると、新しい三人の家族に向かって宣言した。

「それじゃあ、さっきの続きをはじめようか」

悠斗も雛子も表情が真剣なものに変わる。ここで両親を説得出来なければ、仁正学園での学園生活が終わってしまうことを意味している。それは悠斗だけでなく、雛子も望まないものだった。だから、悠斗は悠大に負けるわけにはいかないのだ。

「お前たち二人は日本に残りたい。だが、都子さんも残るのならま

だしも、都子さんは私についてくると言っている。この状況で子供たちだけを日本に残して私たち二人だけでアメリカに渡るわけにはいかない」

「なんでさ！ 俺は家事全般何でも出来るし、生活に不自由はないはずだ！ それに、仁正学園に匹敵するレベルの授業をやってくれる高校なんて、そうそう見つかりはしないぞ？」

「だがな、世間体というものがあっただな……。父さんや都子さんが子供を放り出して二人だけでアメリカに行ったという評判が立てば、それには尾ひれがついて世間様に知れわたる事になる」

「つまりは、俺と雛子の血が繋がっていない事が問題なんだろう？」

悠大は鷹揚に頷いた。

「ならば、その件はもう解決済みだ」

「どういうことだ」

悠斗はぐつと奥歯を噛みしめ、拳を白くなるほどに握りしめ、ソファーから立ち上がった。

「俺は、雛子を妹として認める！ だから、俺は兄として雛子をどんなことがあっても、何からも護ってみせる！ たとえ父さんや都子さんがいなくなつて、俺は雛子を護つてやる！ どうだ、これで問題はないだろう！？」

言い終えた悠斗は、大きく肩で息をしていた。これで全ては変わってしまう。雛子との関係も、これまでの『彼氏と彼女』から『義兄と義妹』に変わってしまう。だが、それでも一緒にいられないよりはいい。仁正学園に、一緒に通えなくなるよりはずっといい。全ては自分が耐えれば済むことなのだと、悠斗はそう思っていた。

「その言葉に、嘘はないか、悠斗」

「ああ、一切ない！」

本当は未練たらたなのだが、悠斗はぐつとそれを飲み込んで、父に返答していた。悠大は腕組みして黙考する。リビングの壁に掛けられたアナログ時計の秒針が時を刻む音がかち、かち、かちと静かな室内に響く。まるで永遠の長さのように感じられる数秒間が過

ぎ、悠大がふうつと息をつき顔をあげた。

「分かった。悠斗を信じよう。悠斗は私の息子だ。その息子が全てをかけて雛子ちゃんを妹として護るというのだから、これを信じなくて何が父親だ」

「悠大さん……」

「都子さん。私たちの子供たちは、思っていた以上に大人になっていたということです。あなたは、私についてきてくれますね？」

都子は花がほころぶような笑顔を浮かべると、静かに、しかし確かに頷いた。

「もちろんですわ。悠大さんが行くところなら、私はどこにでも黙ってついていきます」

「ありがとう。悠斗、飯を食い終わったらちよつと話がある。部屋に居ろ」

「う、うん。分かった」

夕食の後、悠斗が父に言われたとおり自室で待っていると、ドアをノックする音が聞こえた。

「悠斗、いるか？」

「いるよ。どうぞ」

扉を開く音と共に、悠大が姿を現す。いつもはとても大きく見える悠大の身体が、不思議なことに何故かその時の悠斗にはとても小さく見えた。

「父さんな、正直お前があそこまで強硬に反発するとは思っていなかったんだ。いつも父さんの言うことにはちゃんと従ってきたお前だからな。今回の再婚の件も、雛子ちゃんの件も、アメリカ赴任の件も……。全部まとめて驚かされた」

「正直、俺だつて怖かったさ。ぶん殴られるんじゃないかって思ってた。でも、学校のことは本当に譲れなかったんだ。俺は頭が良く

ないから、仁正学園の授業についていくのもやっただけど、このままならそこそこのいい大学だって狙えるかもしれない。でも、今アメリカにいったら、それもふいになっちまう。雛子もそうだよ。やつとの思いで入学した途端に転校なんて、そんなのあんまりだ」

悠大はベッドの端に腰掛け、悠斗はその対面にある机の椅子に腰を下ろす。

「雛子ちゃんのこととは、本当に妹として認めるんだな？」

「さっきも言ったとおりだよ。雛子は俺の妹だ」

「そうか。ならばいいんだ。邪魔をしたな。明日からまた学校だ。寝坊しないように、早めに寝ろ」

それだけ言うと、悠大は静かに部屋を出て行った。トントントンと階段を下りる足音が聞こえる。きつといつものように一杯やってから寝るのだろうと悠斗は思った。

悠斗は、閉じられた扉をじつと見ながら自問していた。俺は本当に雛子を諦められるのか？ あの初めて雛子を新入生の中から見つけ出した時の衝撃。一ヶ月半に渡ってうじうじと悩み続けたこと。そして、二日前の体育館裏での告白と誓い……。

「ダメだよな。俺にはやっぱり諦められない。でも、雛子と日本に残るにはこうするしかないんだ」

ベッドにどさりとつつぶせになる。自然に涙が滲んできてくる。泣きわめいたら、少しは気分が晴れるかもしれない。だが、悠斗は布団で涙を拭くと奥歯を噛みしめてそれ以上涙が溢れてくるのを必死で耐えた。

（こんなことで泣いていたら、雛子を護るなんて出来やしない！）

その時、悠斗の部屋の扉を控えめにノックする音が悠斗の鼓膜をふるわせた。こんな時間にだれだ？ 悠大ならもつと大きな音でノックするだろうし、都子は多分悠大に付き合って下で酒を飲んでい

るだろう。

「おにいちゃん、雛子だよ。入ってもいい？」

雛子の小さな声が扉の向こうから聞こえてきた。一瞬悠斗の心臓

が跳ね上がる。こんな時間に、男の部屋にくるなんて。いやいや、妹なんだから不思議じゃないだろう。でも血は繋がっていないわけ……。一瞬のうちに悠斗の頭の中で様々な思いが交錯する。

「入っちゃ、ダメかな」

雛子の声には、僅かな陰りがあった。悠斗は胸を締め付けられる思いで扉の前の立つと、静かにそれを開いた。そこには、自分の荷物の中から出したのだろう、ピンクのパジャマを着た雛子の姿があった。

「入っていいよ」

「よかったあ。ダメって言われたらどうしようって思っちゃった。ふうん、これがおにいちやんの部屋かあ」

物珍しそうにキョロキョロと周りを見まわす雛子。悠斗はまだ風呂場でのことを謝罪していないことに気づいた。だが、あれは言わない方がいいのだろうか？ 悠斗は迷っていた。謝るべきか、無かったこととして封印してしまうか。そして、彼は決断を下した。

「ひ、雛子。その……風呂場のことだけど……。ごめん！ 本当に覗いたりするつもりじゃなかったんだ！ 倒れる音が聞こえて、慌てて飛び込んでみたら、その……」

雛子は悠斗の言葉が進むごとにじわりじわりと顔を赤くしていた。頭から湯気が出そうなほどに真っ赤になった雛子は、それこそ聞こえるか聞こえないかといった感じの声でぼそぼそと呟いた。

「わ、わたしこそ、ごめんなさい。手当たり次第そこらにあるもの投げてぶつけて……。痛かったでしょ？」

「いや、そんなに大したことはないから！ それより、雛子に恥ずかしい思いさせて……。ほんとうにごめん」

雛子はますます赤くなりながら消え入りそうな声で言った。

「いいよ……」

「えっ？」

「おにいちやんなら、見られてもいいよ。大丈夫だもん。だっておにいちやんだもん」

それだけ言うと、雛子は桜の花びらのような唇をきゅつと結ぶと、下を向いて黙り込んでしまった。悠斗は今雛子が言った言葉を反芻していた。『おにいちゃんになら、見られてもいいもん』『見られてもいいもん』『見られても……』。その途端、悠斗の脳裏に風呂場で見た雛子の肢体が蘇ってきた。ほっそりとした手脚。きゅつと締まった腰、ふつくらとした胸元……。

想い出すにつれ、悠斗の鼻の穴から、真っ赤な液体がつうつと垂れてくる。

「あうっ！ 鼻血が！ ティッシュ……」

雛子がベッドの宮に置いてあった箱入りティッシュを悠斗に手渡す。手で鼻の穴を押さえていた悠斗の右手は鼻血で真っ赤に染まっている。ティッシュを丸めて鼻の穴に突っ込むと、悠斗は机の上にあったウェットティッシュで手を拭いた。

「ごめんな。あんな風に啖呵切ったけど、俺、やっぱり雛子のこと好きだし、女の子だと思って見ちゃってるんだ。でも、おれは『おにいちゃん』だからな！ これからは雛子をどんなことから護ってやる！ 任せておけ！」

鼻血を噴いてティッシュを鼻の穴に詰めて言っても説得力に欠けるといふものだが、それでも雛子には悠斗の言葉が頼もしく響いていた。

「うん。おにいちゃん。わたしもおにいちゃんが大好き。誰よりも好きだよ」

「雛子……」

「それに、血の繋がらない兄妹での禁断の愛って、実はちょっとあこがれてたの。これってまさにそのシチュエーションよね」

悠斗はがくつとその場にくずおれた。禁断の愛。まあ、世間様から見ればそうも見えなくも無いのかもしれないけど、それにあこがれる雛子って、もしかして相当の変わり者なのだろうか？ 悠斗がそんな疑問を抱いていると、耳元で雛子の囁き声がした。

「ね、おにいちゃん。ちょっとだけ目をつぶっててくれないかな」

悠斗は何故だろうと思いつながらも雛子の言うとおりに目を閉じた。次の瞬間、悠斗の脣がなにか柔らかく、暖かなものに触れていた。

「……………」

それは雛子の脣だった。二日前の体育館裏でのキスより、ほんの少し深く、情熱的なキスだった。ほんの僅かではあったが。ゆつくりと脣を離すと、雛子は照れ笑いを浮かべて言った。

「えへへっ。おやすみのキスだよ、おにいちゃん！」

それだけ言うと、雛子は扉を開けて廊下へと出て行き、最後にちらりと部屋の中の悠斗を見やると、軽く手を振って扉を閉じた。悠斗はというと、突然脣を奪われたことに呆然として、しばらく放心状態だった。だが、だんだんと両の拳に力を込めるとそれを天に突き上げてガッツポーズの形にしていた。叫びたい気分だったが、悠斗は理性をフル動員して、どうにかそれだけは免れた。

第一章 ― 恋人が妹！？ ― 3（後書き）

いかがでしたか？よろしければご意見ご感想などお寄せ下さい。

第一章——恋人が妹！？—— 4（前書き）

第一章の4をお送りします。
それではどうぞ！

雛子の『おやすみのキス』の衝撃で、悠斗の中の煩惱パワーはフル回転をはじめていた。だが、悠斗は悠大たちの前で雛子を兄として護ると宣言している。この約束を違えることは出来ない。

「俺は一体どうしたらいいんだ……」

布団の中で悶々と眠れない夜を過ごし、時間はもうすぐ午前四時。目を閉じると風呂場で見た雛子のあられもない姿が目に見え、目覚めて、男としての生理機能が目を覚ます。だが、義妹をオカズにするというラインだけはギリギリの理性で回避し続ける悠斗だった。

「おはよう……」

結局悠斗はその晩一睡も出来なかった。たかだかキスくらいと笑うなかれ。彼女いない歴〃年齢だった悠斗にとって、キスとはあいさつ程度のものではないのだ。それは野生の本能を呼び覚まし、男としての機能をも呼び起こす。

「あら、悠斗君、おはよう。朝食できてるわよ？」

いつもより早く起き出して来たのにもかかわらず、都子はすでに朝食の支度を調べていた。誰かに朝食を用意してもらうなんて、何年ぶりだろうかと感慨にふけっていると、まだ眠そうな雛子が階下に降りてきた。

「んー、おはよう……えっ？ おにいちゃん！？ なんでうちに！？」

「昨日から家族になっただろ、って寝ぼけてるな、これは。ほら、洗面所はこっちだ。顔洗っておいで」

「んー……」

キッチンからは味噌汁の香りが漂ってくる。寝不足の脳にもそれは嗅覚神経を通じて送られていて、悠斗は無性に食欲をかき立てられた。

「悠斗君、先にご飯食べちゃう？」

都子が実に魅力的な提案をしてくる。だが、朝も露木家では親子揃っての食事が基本だった。

「いえ、父さんが降りてくるまで待ちます」

「そう。そういえば、露木家は家族揃っての食事が基本だったわよね」

「櫻井家ではそうじゃなかったんですか？」

「私が仕事で遅くなることが多かったから、ね。雛子だけで先に済ませてもらうことが多かったわ」

悠斗は一人で食事をとる雛子の姿を思い浮かべていた。それはあまりに寂しい光景で、これからはそんな寂しい思いはさせまいと、悠斗は強く決意するのだった。

しばらくすると、悠大が寝室から降りてきた。すでにスラックスにカッターシャツ。首にはネクタイという姿である。あとは上着を着て鞆を持てば通勤出来る格好だ。洗面は二階にもある洗面台で済ませたのだろう。

悠大はいつもそうである。常に隙を見せないのだ。格好だけではなく、悠大は仕事の上でも常に隙を見せない。それ故に会社では部下を何人も率いる立場にいるのだ。

「おはよう、都子さん、悠斗。雛子ちゃんは洗面所かな？ 二階のは私が使っていたのでね」

「さつき寝ぼけながら降りてきたよ。今顔を洗ってるはずだ。はい、新聞」

悠斗は全国紙と経済紙の二部の新聞を悠大に手渡す。いつものように、悠大は経済紙から目を通してはじめた。

「悠大さん、新聞は後にご飯にしましょう。雛子も来ましたし」

「あ……おはよう……ございます」

「ん、おはよう、雛子ちゃん。目は覚めたかい？」

「は、はい！ それはもうバッチリ」

「そうか。じゃあ、露木家の恒例行事。家族揃っての食事という、ダイニングテーブルの悠斗の席の隣が雛子の席になった。悠大の

隣が都子だ。これまで、たった二人で、それでも家族がそろって食事してきたダイニングテーブルが、急に賑やかになったように悠斗は感じていた。

「では、いただきます」

『いただきます』

賑やかになつた食卓を楽しんでいたのは悠斗だけではなく、雛子も、都子も、そして悠大もまた大いに楽しんでいた。

二週間なんていうものは、普通に生活していればあっという間に過ぎていくもので、明日はいよいよ悠大と都子がアメリカに旅立つ日である。ちなみに赴任先はアメリカ西海岸の大都市、シアトル。当分はホテル暮らしをしながら、アパートメントを探すという。

二週間の間に、悠斗の心の中にもある種の余裕のようなものが出来つつあった。煩惱はすっかり保ったままだったが、それを人様にさらけ出さない程度には理性で行動できるようになった、というべきだろうか。だが、そんな彼でも、たとえば雛子の部屋の中から衣擦れの音が聞こえてきたりした日には、理性をぶつちぎって煩惱が大爆発しそうにもなるのだった。

「ん……、ちよつとブラがきつくなつたかも……また大きくなつちやつたのかなあ……。いやだなあ」

扉から漏れ聞こえる雛子のつぶやきに、鼻血を垂らしながら聞き入る義兄の姿。最近ご近所では「露木さんのところの新しい妹さん、お兄さんにもなついてほえましいわね」などと噂されているにもかかわらず、いざ煩惱のスイッチが入るとこれである。やはり悠斗は悠斗ということだろうか。

「はあ、はあ……、ひ、雛子、俺が護つてやるからな」

悠斗は煩惱を何とかして払いのけながら、常備し始めたポケットティッシュを鼻に詰め込む。実に情けない姿ではある。

その時突然扉が開かれ、学園の制服姿の雛子が姿を現した。

「ん？ おにいちゃん、どうしたの？」

「なななな、なんでもない！ ちょっと最近鼻の粘膜が弱くなったみたいでな。鼻をかむと鼻血が出たりするんだよ」

「それより、そろそろ時間じゃない？」

「ああ、もうそんな時間か！？」

悠大と都子は、アメリカに旅立つ前日に、簡単ながら結婚式を挙げることにしていたのだ。

二週間での準備だから、本当に簡単な式しか挙げられないが、これは都子のたつての希望だった。

悠斗も土曜日だというのに学園の詰め襟制服に身を包んでいて、いつでも出発する準備は出来てはいたのだが、雛子の着替えの脳内妄想で時間のことをすっかり忘れ去っていたのだ。

「さ、おにいちゃん。お父さんたちが待ってるよ！」

この二週間で、雛子は悠大を『お父さん』と抵抗なく呼ぶようになっていた。最初は遠慮がちに、でもだんだんと自然に。悠斗も都子のことを『母さん』と呼ぶようになってしばらく経つ。ただ、こちらはまだ照れが混じっているのだが。

一階に降りると、すでに玄関前にタクシーが待つており、両親もいつでも出発が出来る姿だった。

「よし、みんな揃ったな。じゃあ、式場にいこうか」

悠大の一言で全員が動き出す。大きな荷物がいくつかあるのは、式の後はそのまま式場のあるホテルに宿泊するからだ。明日はそこから最寄りの国際空港へと向かい、そこから空路シアトルへと旅立つ。子供たちは空港まで見送ったあとは、そのまま家に帰ることになっていた。

悠大がタクシーの前席に乗り込むと、運転手は静かに車を発進させた。ホテルまでは高速を使えばタクシーで二〇分ほどだ。悠斗は手持ちぶさにシートベルトを指先で弄りながら、今後の事を考えていた。

明日からは、悠大と都子の二人はいない。考えようによってはこれは大チャンスだ。既成事実を作ってしまったという悪魔の囁きが聞こえるような気が、悠斗にはしていた。だが、あくまでも悠斗は兄として雛子を護ると誓ったのだ。だから、雛子が嫌がるようなことは出来はしない。それに何より、いざとなったら多分雛子が許したとしても、度胸がなくてなにも出来ないだろう。そんなヘタレな悠斗だった。

高速を降りしばらく走ると、空港に隣接した大きなホテルが見えてくる。二週間前という非常識なスケジュールを実現出来たのは、悠大の会社がこのホテルの大得意であり、悠大自身もよく利用するからだった。やがて車はホテルの車寄せに滑り込むようにして停車する。

ホテルのフロントで結婚式の予約をしている旨を告げると、受付をしてくれたホテルマンはてきぱきと必要な部署に連絡をした。

「六階がお召し替えのお部屋になります。まずはそちらへどうぞ」ホテルマンの先導でエレベーターに乗る。するとエレベーターが上昇する感覚を感じながら、悠斗たちは六階へと上った。六階には小さな受付があり、そこで新郎新婦と家族の名前を記名する。悠斗たちにとっては初めての経験で、記名するときの手が少しだけ震えていた。

そして、新郎である悠大と、新婦である都子はそれぞれ別室に案内された。悠斗と雛子は廊下に並べてある椅子で待ちぼうけである。「結構着替えにも時間かかるんだろうなあ」

「ん……、そうだろうね。でもどんなドレスなんだろう。早くみたいなあ」

「雛子はやっぱりドレス派か。神前式の結婚式もいいもんだと思うけどな、俺は」

「そうなんだけどね。やっぱりドレスは着てみたいなあ」

悠斗はウエディングドレス姿の雛子を想像してみた。それは想像するだけで抱き上げてお持ち帰りしたくなるほどに愛らしく、美し

い姿だった。妄想だけでこれだけ綺麗なのだから、本人に着せたらどれだけ綺麗か想像もつかない。悠斗は密かにポケットティッシュに手を伸ばし、鼻血の来襲に備えた。

「お待たせしました。ご家族の方はこちらへどうぞ」

ホテルのブライダルスタッフが悠斗たちを呼びに来る。そこには純白のタキシードを着た悠大と、真っ白なウェディングドレス姿の都子が並んで立っていた。思わず二人の口から感嘆の溜息が漏れる。

「お父さん、ダンディ……」

「母さん、すげー綺麗……」

「褒めても何も出ないぞ？ さあ、招待客も揃ったようだし、そろそろ式本番だな」

「はい、悠大さん」

六階の廊下をしばらく歩くと、何やらアンティークなデザインの木の扉がある。そこをブライダルスタッフが開くと、ホテルの六階には小さな中庭のような空間が広がり、その中央に小さなチャペルがあった。

参列者はすでに揃っている。元々急な結婚式だ。極々近い者しか呼んでいない。それでも、参列者たちは盛大な拍手でもって新郎新婦を迎えた。都子の瞳に光るものが見える。

「こら、都子さん。泣くのはまだ早いよ」

「ええ、悠大さん。分かってます」

悠斗と雛子は二人の後に続いてチャペルへと入っていった。

荘厳なパイプオルガンの演奏、聖歌隊による合唱。神父による誓いの儀式と指輪の交換。そして、誓いの口づけ。どれもが悠斗にとって眩しいものであって、同時にもし雛子とこういう関係になれたらと思うものでもあった。雛子は悠斗の隣で黙って静かに涙を流していた。

「雛子？」

「ん……、お母さん、よかったなって」

「そうだな。すっげー幸せそうだ」

「お父さん……前のお父さんね、交通事故でわたしが小学校に上がる前に死んじゃったの。それからずっと、わたしを育てるために一人で頑張ってきて、やっと新しい幸せを掴んだんだね」

「父さんもそうさ。二人が結婚するって聞いて最初は反対だったけど、こんな幸せそうな顔されちゃ、反対なんて言ってられないよな」

「おにいちやんは、今でもわたしが……好き……なんだよね？」

「ああ、でも俺は雛子のおにいちやんだからな！」

無理に笑顔を作って見せる悠斗。傍目には仲むつまじい兄妹にしか見えないこの二人だが、やはりどうにも複雑な感情が入り乱れているようである。

明くる日、国際空港の出発ロビーに露木家の四人が揃っていた。

当分の間、家族四人が揃うことはない。そう思うと、何とも言えない寂しさを感じる悠斗だった。それは雛子も同じだったようで「最後の夜だから」といつて都子と一緒に寝たのだった。

「父さん、初夜だったのに残念だったね」

「ぶっ、ばかもん！ あれは最初からそうするつもりで部屋を取ってあったんだ。だから両方ともツインルームだっただろう？」

なるほど、と悠斗は納得した。そう言えば昨夜の悠大は妙に饒舌だったと悠斗は気づく。当分の間会えない息子との時間を大切にしかかったのかもしれない。そう考えると、自分ももっとたくさん話をしておくべきだったかもしれないと思う悠斗だった。

搭乗手続きが済み、悠大と都子は搭乗者待合室へと入っていった。もうあそこはある意味日本ではない。ほんの十数メートルしかはなれていないのに、歩いて行ける距離なのに、決定的に隔てられてしまっている。国際空港とはそういう場所だった。

最後に悠大と都子が大きく手を振る。悠斗と雛子も振り返す。やがて、両親の姿は他の乗客たちの群れに紛れて見えなくなっていく

た。

「雛子、ここは屋上の展望デッキから送迎が出来るから、そこから見送ろう」

「ん……。わかった。おにいちゃんがそう言うなら、そうする」

エレベーターとエスカレーターを何度か乗り換えて、送迎デッキに出る。両親の乗る飛行機はすぐに見つかった。まだ様々な車両が飛行機の周りで作業をしており、離陸までは結構な時間がかかりそうだ。

「出発時間、何時だっけ？」

「一七時五〇分だったと思う」

「そうか。あと三〇分くらいかな。飛行機の出発時間ってのは、駐機場を出る時間だから、滑走路までいって離陸するのはもっと後だ」

「うん……。でも、ちゃんと見送ろう、おにいちゃん」

「分かっている。最初からそのつもりだ」

父の全面的な信頼を勝ち取った、悠斗の『雛子は俺が護る』宣言からすでに二週間。もうすでに雛子は妹としての自覚も出来ていて、今までみたいに悠斗にべったりということもなくなってきた。悠斗としてはなんとも寂しい限りなのだが、これも兄としては仕方のない事だと半ば諦めていた。

もうすぐ六月になるうかという季節の夕刻、展望デッキには結構な数の見物客がいた。昼間は暑いくらいだったけれど、夕方になって気温も大分下がっている。風も爽やかで、これで時折風に乗って流れてくる飛行機の燃料の匂いが無ければ、なかなかのデートスポットと言えた。

やがて、両親を乗せた飛行機の機外作業が終わり、搭乗口から乗客が乗り込んでいくのが見えた。ボーディングブリッジが外され、飛行機がトローリングカーで押し下げられる。同時にエンジンを一基ずつ始動し、誘導路に出る頃には全部のエンジンが廻っていた。

誘導路を進む飛行機を見つめる雛子に、悠斗が不意に声をかけた。「雛子、ちょっとこっち向いて」

「なに？ おにいちゃんっ……」

振り向いた瞬間を狙ったキスだった。雛子は嫌がるそぶりも見せず、しばらくうつとりと悠斗に身を任せていた。悠斗は肩を離すのにやっと笑った。

「愛情表現してみました」

「兄妹でキスは変だよ」

「ああ、変だな。でも、雛子は嫌だったか？」

「そんなこと聞くなあ」

「嫌だったか？」

「嫌……じゃないよ」

「なら好きなときにすればいいんだ。俺は雛子を護ってやる。どんなことがあっても。この先ずっと」

展望デッキの手すりの上で、悠斗と雛子の手が触れあう。両親の乗る飛行機が離陸していくのを見送りながら、二人はしっかりと手を握りあっていた。

第一章 ― 恋人が妹！？ ― 4（後書き）

いかがでしたか？よろしければご意見ご感想などお寄せ下さい。

第二章 — 従妹、襲来 — 1 (前書き)

第二章の1をお送りします。
それではどうぞ！

翌日から、悠斗と雛子の二人だけの生活が始まった。悠斗は心に鍵をかけ、雛子と一線を引くように心がけていたし、雛子は悠斗をすっかり兄として見るようになっていた。ただし、その視点は若干歪んだものだったが。たとえば禁じられた兄妹の愛、とか。

今日も朝から悠斗がキッチンに立って朝食の支度だ。家事などは当番制にして、それぞれが交代でやることにした。朝食と夕食は必ず一緒にとる。これは両親がいたときからの不文律だ。

「あ、雛子、お醤油とって」

「ん……、……！！」

醤油差しを手渡そうとした瞬間、指先と指先がほんの僅か触れた。雛子は思わず手を引いて、醤油差しを落としてしまった。テーブルの上に醤油が小さな水たまりを作る。

「ご、ごめんなさい」

「気にしないでいいよ。このくらいならすぐ綺麗になるし」

につこりと微笑む悠斗の顔を見て、雛子は胸の鼓動が高まるのを感じていた。妹としての自覚は芽生えつつあるものの、やはりそこは血の繋がらない二人である。お互いを異性として意識してしまうのは無理のないことで、ごく健全なことと言えなくもない。

（だめだめ。おにいちゃんはおにいちゃんなんだから。他の男の人とは違うの！）

「雛子、どうした？ 少し顔が赤いぞ？ 熱でもあるのかな」

不意に悠斗が雛子の額に手を載せる。雛子の顔の赤さはどんどん増していく。

「熱はないみたいだな。でも、もし具合が悪かったらすぐ言っただぞ？ 季節の変わり目だし、体調も崩しやすいからな」

「う、うん……。わかったよ、おにいちゃん」

「そっぴや、雛子は今日はシャワー浴びないのか？」

「んー。浴びたいけど、今日寝坊しちゃったし……。昨夜はちゃんと風呂入ってるからいいかなって」

「そうか。んじゃ、俺もそろそろ登校の準備してくるよ」

「うん。わかった」

そうは言ったものの、毎朝シャワーを浴びる習慣がついてた雛子やはり何となくが不快だった。悠斗がほんの僅かな体臭に気づいてしまうかもしれない。そんなの、絶対困る！ さっとシャワーを浴びるだけならものの数分もあれば済むだろう。

（よし、やっぱりシャワー浴びてこよう！）

雛子は制服姿のまま浴室へと向かうのだった。

「んー、雛子がシャワー使わないんなら、今日は俺が使わせてもらうかな」

悠斗は制服に着替えようとして、ほんの少し寝汗の匂いがすることに気がついた。これを雛子に気づかれるのはちよっと困る気がする。何となくではあるのだが。悠斗はパジャマのまま制服と下着の替えを持って、浴室へと向かった。

「さて、制服はちゃんと畳んでこっちへ置いてっと。下着はさつき替えたばかりだから仕方ないとして、シャワーシャワー」

浴室の扉を開ける。タイルがひんやりとした感触を足の裏から背中、そして脳へと伝えていく。

「やっぱ朝のお風呂はタイル冷たいよね。まあ仕方ないか」

雛子浴室の扉を閉じた。その瞬間、脱衣場の扉が開かれる。

「シャワー、シャワー」

（お、おにいちゃん！？）

なんとということだろう。浴室の扉の向こうには兄がいる。それも、どうやらシャワーを浴びる気満々らしい。雛子の制服は皺にならないうちに脱衣かごとは反対側の棚の上に置いてある。

（わたし大ぴ——んち——！）

逃げ道などありはしない。あるのは小さな窓だけだが、全裸で脱出するほどの度胸は自分にはない。雛子は天に祈った。どうか兄が自分の存在に気づいてくれますようにと。だが、神は聞き入れてはくれなかった。浴室の反対側に追い詰められるようにして逃げて、精一杯身体を隠す。そこに全裸の兄が扉を開けて入ってきた。

「あ……」

「……………」

ハンドタオルで身体の前面だけを隠した雛子のあられもない姿を見た悠斗は、両の鼻の穴から大量の血を吹き出して、その場で卒倒した。

「おにいちゃん！ おにいちゃん！！ しっかりして！」

悠斗はもうろうつとする意識の中で、雛子のしっかり育った乳房を、ああ綺麗な形だな、などとのんきに評価していた。

何とか悠斗を浴室から救出した雛子は、幸せそうな顔で鼻血をどくどく出す悠斗の鼻の穴にティッシュを丸めて詰め込んでいた。もちろんシャワーはおあずけだ。それどころか、全裸の悠斗に下着を着けさせ、こうして膝枕をしながら介抱している。今日はもう遅刻は確定だ。

「う……。うーん……。はっ！　なんで全裸の雛子が風呂場にいるんだー！！ ……あれ？」

「気がついた？ おにいちゃん」

「さっきまで凄くいい夢を見ていた気がする……」

「おにいちゃんのえっち！！」

雛子はソファーに置いてあったクッションを採り上げると、ぼすぼすと悠斗の頭を連打した。そこで悠斗も気づく。自分は確かに脱衣場で全裸になったはずだ。それなのに、今は下着を（下だけだが）つけて、リビングの床で雛子の膝枕で寝そべっている。これらの事

実から導かれる答えは――

「うわぁっ！ 俺はもうお嬢にいけない！」

「それはこっちのセリフだよ、おにいちゃん。おにいちゃんの、その、あそこが固くなっちゃって、パンツ穿かせるの大変だったんだから！」

そんなところまで見られていては、ますますお嬢にいけないと思う悠斗であった。しかし、見られたのがまだ雛子だったからよかったのかもしれない。他の女に見せるくらいなら、雛子に全裸ダイブする方を悠斗は選ぶ。

「ご、ごめん……」

「悪気がなかったのはわかってるから……」

「じゃあ、許してくれるのか？」

「でも、でも、あれがあんなに大きく固くなるなんて……。保健の授業で習ってたけど、信じられない……」

「その辺は忘れてくださいッ!!」

「忘れられないよぉ……」

「お願いだから忘れてッ!!」

不毛な会話で時間が経つのをすっかり忘れている二人だったが、壁掛け時計が九時のメロディを流しはじめたところで我に返った。完全に大遅刻である。理由を聞かれてもこんなこと説明出来るわけもない。二人は顔を見合わせて呟いた。

「困った……」

「困ったね……」

妹（兄）と全裸で風呂場で遭遇しまして、兄の方が鼻血を大量に噴きました。これが遅刻の原因です……。変態と思われるだけだろう。

「いつそ、今日はサボるか」

「おにいちゃん、そうやってサボると癖になるよ？」

「だって雛子、お前だってちゃんと遅刻の理由説明出来るか？ 嘘についてもすぐばれるぞ？」

そう、雛子は嘘をつくとすぐに視線が泳いしまうのだ。だからこそ正直に素直に生きてこられたのかもしれないが。とりあえずは学校へ連絡しなければならぬ。この場合兄が病気で妹は看病に残るとした方がいいのだろう。

「じゃあ、わたしが学校に電話するね。電話なら目が泳いでもわからないし、ある意味これは嘘じゃないから！」

そういつて自分を納得させないと、小さな嘘でもつけない小心者の雛子であった。

「あ、もしもし。仁正学園ですか？ わたし一年C組の露木といいます。実は兄が急な病気で倒れまして……。はい、はい。両親もいないのでわたしが看病に残らないといけないんです。はい。担任の先生にお伝えいただけますか？ はい。よろしくお願いします」

携帯の通話ボタンを押して回線を切ると、雛子はふうつと大きく息をついた。

「もう、今日サボったのはおにいちゃんのせいだからねっ！」

「……雛子がそんな綺麗な身体してるからいけないんだ」

「——ッ！！ おにいちゃんのえっち！！」

そんな平和な露木家の日常の風景を、遠くから監視する目があった。一見すると狙撃用のライフルのようなビデオカメラと超高倍率のレンズ。耳には以前仕掛けておいた盗聴器からの音声を再生する為のイヤフォン。直線距離にして五〇〇メートルほど離れた高層マンションの屋上で、その少女は事の一部始終を目撃していた。

「いつの間にあんな女が……。おにいちゃん、待っててね。必ず助け出すから」

しかし、平日に学校をサボってしまうと、普通の生徒には大変退屈な一日が待っている。外に遊びに出るわけにもいかず、家の中で

趣味の合わない主婦向けのワイドショーを見るか、大して興味もないし意味もよくわからない国会中継をみるか、その程度の選択肢しかないのだ。

そして、悠斗と雛子も退屈していた。どのくらい退屈かというと、変装して街に繰り出すことを本気で考えはじめくらいには退屈していたのだ。ただ、それは悠斗の「補導されて不良のレッテルを貼られるぞ」の一言で却下されていたが。

「うー、退屈だよ……」

「仕方ないだろ、今日は一日こうして過ごすしかないんだから」

その時だった。悠斗は何か違和感を感じていた。何なのかははっきり分らない。だが『なにかがいる』ような気がしてならない。こんなことを雛子に言つと、オカルト関係が大の苦手の雛子のことである。裸足で家を出て逃げかねない。しかし、確かに何者かの気配がするのだ。

悠斗はまず室内で様子のおかしいところはないかを見まわした。大丈夫。特に変なところはない。この居間に限つてだが。では玄関はどうだ？

「あ、新聞取り忘れてた。ちょっと取ってくるな」

雛子に余計な心配をかけないために、悠斗はそう言つて席を立つた。雛子は総理大臣が野党の追及をのりくらりと躲し続ける国会中継に見入っている。これなら二階も見えてくれるだろう。

二階の自室と父母の寝室、そして雛子の部屋も確認する。怪しいものはなにもいない。だが、気配はより濃厚になっている。これは一体何がいるというのだ？ 悠斗は背筋に冷たい物が伝うのを感じていた。

「ん？ おにいちゃん、ずいぶん遅かったね」

「ああ、ちよつと自分の部屋に戻つてた」

そう言いつつソファアの雛子の隣に腰を下ろす。一瞬、殺気にも似た気配がその濃さを増す。なんなのだ、これは。ふと、悠斗は庭の植え込みの様子が前と少し違うような気がした。あそここの部分、

あんなに茂っていただろうか？ 疑いは確信になり、悠斗は居間の窓を開いて庭に出た。

「おい！ いるのは分かってるんだ！ 一体何者だ！」

しかし、その不自然な茂みは全く動くことはなかった。

「そこにいるのは分かっている！ 出てこないと警察を呼ぶぞ！

五つ数える。その間に立ち上げられ。一つ……二つ……三つ……四つ……五つ！」

カウントが五になると同時に、その不自然な茂みがごそりと動いた。そして、それは人の形を取って立ち上がった。まるで全身を植物で覆われたようなその姿は、映画に出てくるモンスターのようだった。だがそうではない。これは――

「ふん、ギリースーツか。よくできてはいるが、こんな至近距離じゃ流石にばれるぞ。どれ、正体を見せてもらおうか！」

悠斗の手でギリースーツを着た侵入者はみるみるその正体を露わにしていく。身長はどうみても雛子と変わらない程度。長い黒髪。ギリースーツの下には黒いゴスロリのドレス。そしてなによりその顔に、悠斗は嫌と言うほど見覚えがあった。

「ゆ……ゆずき 柚希……なのか？」

「……おにいちちゃん……おにいちちゃんっ！！」

ギリースーツの下から出てきた少女は、涙を目にためながら悠斗に抱きついてきた。その少女は露木柚希、悠斗の従妹である。叔父のところの娘で、小さい頃から悠斗を実の兄のように慕っていた。だが、中学に上がってから陰湿ないじめに遭い、不登校になっていたと悠斗は聞いていた。その柚希がなぜこの街に？

「柚希ね、柚希ね、とってもおにいちちゃんに逢いたかったの。だからコッソリ盗んだバイクで走り出して、隣町から長距離バスにのつてこの街に来たの。でね、お父さんの趣味のサバイバルゲーム用のギリースーツを着込んで、庭に陣取ってたの。そしたらね、あの女がおにいちちゃんとイチャイチャしてるじゃない！ これって一体どういうこと！？」 おにいちちゃんには柚希という心に決めた相手がい

たんじゃなかったの？　なんで他の女を家に入れてるの〜〜〜！
！」

もうメチャクチャである。泣き出した柚希をとりあえず部屋に入
れながら、悠斗は「これでご近所の評判は一気に下がるな」と予感
していた。事実、何事かと聞き耳を立てる奥様連中が多々いるので
ある。

柚希は部屋に入ってから全く泣き止む様子がない。とりあえず
と言うことで雛子が出てやってたお茶にも一切口をつけない。

「そんな女の入れたお茶なんて、穢らわしくて柚希飲めないわ」

「おにいちゃん、この子……だれ？」

「ああ、雛子は初めて会ったな。叔父さんの娘さんで、名前
は柚希。俺たちの従妹だ」

「俺『たち』の！？　それは一体どういう意味、おにいちゃん！？」

悠斗はこの二週間ほどの経過をかいつまんで柚希に説明してやつ
た。柚希の顔がだんだんと蒼くなっていく。

「つまり、この女は、おにいちゃんの戸籍上の『妹』なのね？」

「そういうことだ。だから柚希も仲良くしてやってく……」

「イヤよッ！！」

柚希は全身で嫌悪を示していた。何でこんな女と自分が仲良くし
なければならぬのか、そう訴えていた。

「おにいちゃんは、柚希のおにいちゃんでしょ？　柚希よりこんな
女を選ぶっていうの？」

「こんな女なんて言うなよ。雛子は俺の大事な……」

「大事な、なによ」

妹だと言い切ってしまうば柚希も納得するのだろう。だが、悠斗
には何故かそれが出来なかった。妹として接して来て、もう二週間
以上も経つのに。

「ふん、なーんだ。ちゃんと関係も言えないような間柄なんだ。そ
れなら柚希の敵じゃないわよね。『戸籍上の妹』さん、私は露木柚
希。ご覧の通り、おにいちゃんの大切な従妹よ！」

「柚希ちゃんですね？ わたし、おにいちゃんの『妹』の露木雛子です。よろしくね」

「なれ合うつもりは無いわ！ 柚希は必ずあなたの手からおにいちゃんを救い出してみせるんだから！」

悠斗は目眩を感じて、その場へたり込んでしまった。

第二章 ― 従妹、襲来 ― 1 (後書き)

いかがでしたか？ よろしければご意見・感想などお寄せ下さい。

第二章 — 従妹、襲来 — 2 (前書き)

第二章の2をお送りします。
それではどうぞ！

悠斗は柚希の家に連絡を入れた。電話に出た叔父は済まなさそうに柚希を頼むと繰り返すのみだった。

「いやね、悠斗君。柚希ったら昔っから君になついてたじゃないか。どうか頼むよ。しばらくの間、柚希をそっちに置いてやってくれな
いか」

「叔父さん！」

「とにかく、柚希はしばらく君に預けるから。君なら間違いも起こさないだろうし」

「叔父さんは僕をなんだと思ってるんですか！？ 年頃の男ですよ！？ 今うちに親がいない事は叔父さんだって知ってるでしょうに！」

叔父はそれでも引き下がらない。何とかして柚希の引きこもりを治したい一心なのだろう。

「頼むよ。柚希の生活費は当然こちらでもつから。昔みたいに遊んでやってくれ。それじゃあ、頼んだよ！」

「がちゃん。つー、つー、つー……」。

「なんて叔父さんだ……」

「ね？ 柚希の言った通りでしょ？ だから、おにいちゃんも安心して柚希を預かってくれていいの。もちろん、柚希にあんなことやこんなこともしていいのよ？ お父さんはダメだっていつてたけど、柚希が許しちゃう！」

悠斗は顔を真っ赤にして怒鳴った。

「なんだその『あんなことやこんなこと』ってのは！ 俺には柚希にそんなことをするつもりは一切ない！」

その言葉を聞くと、柚希は大きな瞳に涙をため、ぽろぽろとこぼしはじめた。慌てて柚希をなだめようとするが、柚希の涙は止まらない。しゃくり上げる声も大きくなり。またさっきと同じように大

声で泣き出してしまった。

「おにいちちゃんは柚希が可愛くないの！？ そんな女の方がいいって言うの！？ いいわよ、柚希、電車で飛び込んで死んじゃうから！ その方がおにいちちゃんもせいせいするでしょ！ 止めても無駄なんだからあつ！」

手脚をじたばたさせて、全く手がつけられない。悠斗は頭を抱えて、やるかたなしといった感じで首を振った。柚希は昔はもつとおとなしい女の子だったはずだ。最後に会ったのは柚希が小学六年の冬休みだから、二年半ほど前になる。この三年間で一体彼女に何が起きたのか。悠斗は口ではきついことをいいながらも、やはり幼い頃から良く知っているはずの柚希の変貌を心から心配していた。

なにしろ登場の仕方からおかしいのだ。ギリスーツというのは、戦場で狙撃兵が茂みなどに隠れるときに使う偽装服だ。植物そっくりで、遠目にはまったく本物の茂みと見分けがつかない。そんなものを叔父さんが持っていたのも驚きだが、それを使って庭に忍び込もうなんて考える柚希の思考回路もまた驚きだった。聞けば、家でも毎日パソコンに向かってなにやらブツブツいいながらキーボードを叩いていたらしい。

（不健全だ。まったくもって不健全だ。中三の女の子がそんなことでどうする。仕方ない、叔父さんのいうとおり、しばらくの間うちで預かるか）

それが柚希の張った巧妙な罠であるとも知らずに、悠斗は柚希を家で預かることを決めてしまっていた。

「わかった。柚希、お前はしばらくうちにいていい。引き籠もってばかりいるよりは何倍もましだろうからな。ただし！」

悠斗はそこで言葉を切ると、すっと大きく息を吸い込み、より大きな声ではつきりと柚希に告げた。

「万一雛子になにか変なことを仕掛けたら、即家に送り返すからそのつもりで！ いいね？」

「はい！ 柚希いい子だからそんなことしないもん！」

「どの口でほざいてやがりますか、この引きこもり娘は……」

「ん？ なにか言った、おにいちゃん？」

「あー、何でもない！ とにかくだ。今日は一日家で過ごせ。実は今日俺たちは学校を休んでいる」

柚希がそう言えば、といった表情で首をかしげる。

「今日って平日だね？　なんで学校休んでるの？」

「うつつ……。そ、それは……」

にやりと柚希が笑う。その瞳は「なんでもお見通しだ」と言わんばかりに輝いている。悠斗はその柚希の目を見て、何故か背筋に冷たい物が走ったような気がした。

「柚希知ってるもん。おにいちゃんとその女が朝から素っ裸で風呂から出てくるところ見てたから。うわぁ、いやらしい。とんでもない女よね。人のおにいちゃんを取るだけじゃなくて、色仕掛けまで仕掛けるなんて！　柚希信じられなーい！」

なぜ柚希がそんなことを知っている？　悠斗は正直焦っていた。一体どこから見ていたと言うのだろうか。朝カーテンを開けたときには植え込みに異常はなかった。塀のおかげでお隣さんなどからは居間の中はみえないし、お隣さんの二階の窓は雨戸が閉まったままだ。

と、悠斗の目に一つの建物が目に入った。直線距離で五〇〇メートルほどは離れているだろうか、ちよつとした高層マンションだ。この部屋を覗くには絶好のポジションである。しかし、まさか？　「スナイパー柚希ちゃんを舐めないで欲しいわ。狙った情報は即ゲツト。どんなに隠そうとしても、この柚希ちゃんの目からは逃れられない。それがたとえおにいちゃんのひとりえつむぐうつ……！」

これ以上喋らせては危険だ。雛子にも教育上よろしくない。そう判断した悠斗は、柚希の口を無理やり塞いでずるずると自分の部屋に引きずっていった。ひとり居間に残された雛子は、まるで嵐が去った後の被災者のような表情で呆然としていた。

「……なんか、凄い子だったなあ……」

自室にまで柚希を引きずり込んだ悠斗は、そこでやっとうと柚希の口を放してやった。柚希はといえば、涙目で何かを言いたがっている。「まあとにかく座れ」

柚希はベッドサイドにそつと腰掛けてそのまま横になろうとする。

悠斗は頭から湯気を出しそうな勢いで怒鳴った。

「そうじゃなくて！ 床に正座しなさい！」

「えー、柚希、正座つてきらい。足が短くなっちゃう」

「そんなことはないから、とにかく正座！」

ブツブツと文句をいいながらも、一応悠斗の言うことに従う柚希だった。これでとりあえずお説教モードに入る事が出来る。悠斗はようやくほつとした。だが、相手は三年前の素直な柚希ではない。

この三年間で歪みきった柚希である。

「いいか、柚希。朝のあれはな、事故だ。そう、不幸な事故なんだ。だいたいなんだ？ あれを見ていたということは、あそこのマンシヨンの上からでも見ない限り無理じゃないか！ 朝に庭の植え込みには異常はなかったからな！ なんでそんな非常識なことを」

「ちつつちつ。おにいちゃん、自分の常識だけが世間の常識だと思っちゃダメよ。柚希には柚希の常識があるの。柚希はそれに従って行動しているだけ。誰にも恥じることはないわ」

「世間一般の常識を『常識』っていうんだよ！ 柚希がいつてるのは『自分ルール』ってやつであって、常識じゃない！」

「じゃあ、その世間一般の常識っていうのを柚希に教えて。か・ら・だ・で（はーと）」

正座していた足を崩し、黒のゴスロリドレスの裾から、白い太腿を悠斗に見せつける。黒のスカートと白い肌のコントラストが眩しい。大体、この柚希という少女は黙って座っていればとんでもない美少女なのだ。すらりと伸びた手脚。スレンダーな体つき、小ぶり

な顔に精緻の極みを尽くしたような目鼻立ち。それがわざとスカートの裾をめぐりあげて悠斗を誘惑しようとしている。

「だから！　そういうのをやめなさいって言ってるの！　誰に習ったんだそんなこと！」

「え？　ネットのえっちなサイトだよ？」

「ああいうところは子供は行っちゃダメでしょ！」

頭痛のする頭を抱えながら、悠斗はさっきの決断は早計過ぎたんじゃないかと思いはじめていた。悠斗のなかの柚希のイメージは、可愛らしくて、素直で、大人しくて、とても頭のいい少女だった。だが、目の前の柚希はどうだ？　引きこもりが過ぎるところも人格が歪んでしまうのだろうか。

「とりあえずだ。当分の間うちで預かるというのはいいい。叔父さんにも頼まれちゃったしな。でもな、柚希。いつかは家に帰らなきゃならないんだぞ？　それはちゃんと分かってるだろうな？」

「うん！　柚希ちゃんと分かってるよ！　その時はおにいちゃんも一緒にお父さんとお母さんにあいさつに来てね」

「全然分かってないじゃないか！　俺は、柚希をそういう対象に見てない！　そりゃ柚希は可愛い従妹だけど、それとこれとは話が別だ！」

「うつつ……、後から抱きすくめて部屋に引きずり込んだくせに……」

「それは柚希がろくでもないこと言うからだろ！　いいか？　とにかく柚希は雛子に手を出すな！　あいつは俺の、俺の……」

「『俺の』……なに？」

「……っ！　な、何でもいいだろ！　とにかく柚希は雛子にちょっかい出すな。いいな！」

悠斗が扉を開けて部屋を出ようとすると、外では雛子が壁に耳をつけて中の様子を窺っていた。慌てて居住まいを正すが、何をしていたのかは一目瞭然である。

「何してんの、雛子？」

「え……、んー……敵情視察？」

「なんだそりゃ。とりあえず居間に戻ろう。そろそろ昼だからな。何か軽く食べるものでも用意するよ」

「え？ いいよいいよ。おにいちゃん朝作ってくれたじゃない」

「これは柚希の出番ね！」

二人の間に柚希が割り込んで仁王立ちしていた。右手はぐつと拳を握って、目には炎を燃やしている。大昔のスボ根アニメみたいだ。「出番って、柚希、料理なんて出来るのか？」

「カップ麺にお湯を注ぐことは得意よ？」

「そんなんじゃない！ ちゃんとした料理が出来るのかって聞いているんだ！」

「失礼ね。柚希引き籠もってたから、昼はいつも自分で作ってたわよ。チャーハンぐらいならすぐ作れるわ」

チャーハンなら自分にも作れるという言葉をぐつと飲み込んで、悠斗は目の前の超絶美少女である従妹を見下ろした。身長差がかなりあるので、柚希はあごを心持ち上に上げて、上目遣いに悠斗を見上げてくる。その目には自信が満ちあふれていた。これならまあ任せてもいいか。悠斗はそう判断した。

「じゃあ、昼は柚希に作ってもらおう。俺たちは居間でテレビでも見て待つてるから」

「はいはい！ 柚希ちゃん特製のチャーハンを待っててね」

柚希のその軽いノリの返事に、何となく嫌な予感のする悠斗であった。

予想に反して柚希の料理の手際はとてもよかった。いつも昼を自分で作ってるという言葉に嘘はないようだ。悠斗はこれなら任せて大丈夫だろう、とキッチンから居間のソファに戻ってきた。

「どうだった、おにいちゃん？」

「うん。手際はかなりいい。作りなれてるって感じだったな」

「そっか。わたしも負けてられないなあ」

両の拳を胸の前でぐっと握る雛子。そんな仕草もとても可愛く見えて、悠斗の頬は緩みっぱなしだ。そんな二人を尻目に、柚希はある企みを実行に移そうとしていた。

腰につけたポーチから小さな小瓶を取り出すと、皿に盛る前の一杯分のチャーハンにこれでもかと振りかける。

「ん？　なんだ、この匂い？」

「え？　なんのことかしら。柚希には普通のチャーハンの匂いしかないけど？」

「うーん、まあ、食べ物の匂いだからそんなに気にする事ないか」

柚希は密かにガッツポーズをしていた。柚希の持っていた小瓶の正体は、間もなく明らかになる。三杯分のチャーハンを作り終え、柚希はダイニングテーブルに皿を運んだ。

「はい！　柚希ちゃん特製のチャーハンの出来上がりですよー！」

柚希の作ったチャーハンは、見た目にはとても美味しそうである。これと言った特徴もないのだが、ごく普通に作られた家で作るチャーハンだ。だが、悠斗はとても、とても嫌な予感を抱えていた。そして、その予感はおそらくは正しい。

「柚希、お前のチャーハンと雛子のチャーハン、取り替えてくれないか？」

「えっ！　……な、なんで？」

「特に理由はない。なんだ？　同じものなのに取り替えられないのか？」

顔にびっしりと脂汗を浮かべる柚希。心なしか全身が震えているようにも見える。これはビンゴだ。悠斗はそう確信した。これは絶対にになにか仕掛けがあるに違いない。悠斗は追い打ちをかける。

「雛子の方が少しだけ量が多いんだ。雛子はちよつと小食でさ。その量だとちよつと多すぎると思うんだよな。だから、取り替えてくれないか」

悠斗の真剣なまなざしが柚希の瞳を射貫く。今やその震えは端から見ていてもはつきりと分かるほどで、テーブルに置かれたタンブラーに注がれた麦茶の表面がさざ波を立てているほどだ。

「どうなんだ？ 取り替えられない理由でもあるのか？」

「わ、わかったわよ！ 取り替えればいいんでしょ！ はい！」

柚希は乱暴に皿を雛子の方につきだしてきた。雛子はそつと自分の皿を柚希の方へ差しだす。自分の方へ廻ってきた皿を見て、だらだらと汗を流す柚希に、悠斗は満面の笑みで言った。

「さあ、露木家の食事は家族揃ってが基本だ。では、いただきます」「いただきます」

「い、いただきます……ます」

悠斗と雛子の二人はごく普通に食べ始めた。味もごく普通。当たり前のチャーハンの味だ。だが、作った本人の柚希は一向に手をつけようとしない。

「どうした？ 柚希、さつきから全然食べてないじゃないか」

「お、おほほほほ！ そんなことはないわ！ ほら、この通り！」

スプーンの先に米粒をほんのちよつと載せて、柚希は口に運んだ。次の瞬間、柚希の前にあつたタンブラーの中の麦茶は空になっていた。急いで継ぎ足す柚希に向かって、悠斗の容赦のない声が飛ぶ。

「そんなちびちび食べてたらいつまで経っても食べ終わらないぞ？ もっとこう、がばつと食べるよ。柚希は昔からよく食べる子だったじゃないか」

「うつつ……。わ、わかりました！ 柚希、逝きますー！」

なんだかセリフの漢字が不吉なのは仕様なので気にしないで欲しい。ともかく、柚希はスプーン一杯のチャーハンを掬って、それを自分の口の前まで運ぶと、震える手で口の中に放り込んだ。

見る間に柚希の顔が真っ赤になっていく。そう、まるで『唐辛子』でも丸かじりしたかのように。

「やっぱり何か仕込んでたか……。柚希、怒らないから仕込んだものを出しなさい」

やつとの思いでチャーハンを飲み込み、ごくごくと麦茶を流し込んでいた柚希だったが、悠斗の言葉に身を固くした。怒らないから出さない、と言われて正直に出したらきつと怒られるに違いないのだ。だが、悠斗はじつと柚希の瞳を見つめ続けている。嘘は絶対許さないという、確固たる信念がそこにはあった。

「ばれてしまつては仕方ないですね。これです……」

ことん、という音と共にテーブルの上に置かれたのは、一部の辛い物好きの間では有名な『死のソース』だった。それが半分ほどなくなっている。

「これ、どれだけかけたんだ？」

「一気に半分ほど……」

悠斗は呆れ果てたと言う様子でため息をついた。まあ、策士策に溺れるというところなのだが、自分の作った『死のチャーハン』の前に涙目になっている柚希をこれ以上強く叱る気にもなれない悠斗だった。

「ふう……。とりあえず柚希はこれ食べてろ。俺は自分でなんか作るから。流石に『死のチャーハン』は捨てざるを得ないだろうからな」

二口ほど食べた自分のチャーハンを柚希に差し出した悠斗は、『死のチャーハン』の皿を持ってキッチンに向かった。生ゴミの中にそれを捨てるとき、思わず心の中で「お百姓さんごめんなさい」などと呟いてしまう。ご飯はまだチャーハン一杯分ほどは残っている。「じゃあ、格の違いってヤツを見せてやるか！」

悠斗は中華鍋を取り出すと、腕まくりをしてエプロンを着けるのだった。

第二章 ― 従妹、襲来 ― 2 (後書き)

いかがでしたか？ よろしければご意見・感想などお寄せ下さい。

第二章 — 従妹、襲来 — 3 (前書き)

第二章の3をお送りします。
それではどうぞお！

『死のチャーハン』事件以来、柚希の態度は目に見えて大人しくなった。悠斗もようやく息をつく暇ができ、雛子もまた同じだった。午後になって学校の担任教師から悠斗と雛子それぞれに連絡があったが、雛子がなんとか誤魔化して事なきを得た。本当にやったことなんて言おうものなら、停学とか退学とか言う前に、教師たちは呆れ果てて開いた口が塞がらないだろう。

そして時刻は夕暮れ。下校時刻もすぎ、ようやく外に出ても怪しまれない時間になった。悠斗は冷蔵庫の中身をチェックする。食材が大分乏しくなってきた。これは買い物に行かなければならないだろう。

「というわけで、俺と雛子は近所のスーパーまでちよつと買い物に行ってくる。柚希はその間テレビでもみてゆつくりしてくれ」

「はい。おにいちゃん、今日の夕飯は誰が作るの？」

「今日の当番は雛子だよ」

それを聞くと、柚希は露骨に嫌そうな顔をしてみせた。まるで「そんな女の作った料理なんて食べるのはご免だわ」とでも言いたげだ。いや、実際そう思っているのだろう。

悠斗と雛子が買い物に行く支度をしている間、柚希は大人しく夕方方のニュース番組をテレビで見っていた。悠斗もこれなら大丈夫だろうと思ったのだろう、出かける前に柚希に一言声をかけた。

「んじゃ、柚希、留守番よろしくな」

「はい。柚希におまかせあれ、おにいちゃん！」

ドアの閉じる音と鍵をかける音を確認した柚希は、口の端を釣り上げてにたあつと笑った。いま、この家の中には柚希一人しかいない。こんなチャンス逃すほど、柚希はお人好しではなかった。庭に起きつぱなしになっていた軍用ショルダーバッグを部屋に持ち込むと、柚希はそこから様々な電子機器を取り出した。小型のカメ

ラ、トランスミッター、赤外線センサー、振動センサー、その他諸々……。

「さて、まずは風呂周りから攻めましょうか……。フッフ……。おにいちゃん、待っててね。必ずあの女の魔の手から救い出してあげるから」

両手に電子機器を山のように持った柚希は、早速行動を開始した。まずは脱衣場である。物陰にかくれるように、かつ被写体の姿を見逃さぬように、細心の注意を払って隠しカメラを仕掛ける。それにトランスミッターを取り付け、手元にある液晶モニタで画像を確認する。角度も絶妙、これなら被写体の裸身を余すことなく撮影出来る。

続いてマイクだ。これも物陰に隠れるように設置する。コンセントのタップの形をしており、実際にそういう使い方も出来るし、一〇ボルトのコンセントから電源を取るため、電池を用意する必要もない。

浴室内も同様だ。だが、浴室の中は物陰が少ない上に湯気でレンズが曇る。そこで、柚希はレンズに特殊コートを施したカメラを用意していた。それを浴室の上の方にある窓の枠に仕掛ける。マイクは反対側の枠だ。手早く作業を終えると、手元の液晶画面とレシーバーでカメラとマイクの動作状態を確認する。どちらも良好。問題なし。

続いて居間だ。こちらには振動感知センサーと赤外線センサーを用意。やはり物陰に隠して設置する。カメラは照明器具の枠に見えにくいように配置。マイクは二年半前の冬休みにもしる半分で設置したものがまだ生きていた。

一階はこれでよし。続いて二階に手をつける。

二階の構造は、柚希の頭に入っていなかった。前に遊びに来たのは二年半前。それもたったの二泊しかしていない。だが、さっき引きずり込まれたのは間違いなく悠斗の部屋だろう。ならばまずそこから攻めるべきだ。柚希は隠しカメラとマイクを手し、悠斗の部屋

の扉を開けた。

「ああ、おにいちゃんの匂いがする……」

変態的な自分の欲求に素直な柚希は、しばしその甘美な香りに心を奪われていたが、はっと我に返ると先ほどと同様の作業を繰り返した。しかし、小学六年の冬休みに父親に無理を言って遊びに来た時、居間に冗談半分に仕掛けておいた盗聴器がまだ生きていると、さすがの柚希も思わなかった。もうとつくに寿命を迎えているだろうと考えていたのだ。だが、そのおかげで『あの女』と悠斗との桃色遊技を確認することが出来たのだ。

「頑張ってくれたね、盗聴器さん」

悠斗の部屋の次は、そう『あの女』の部屋だ。だが、どの部屋だろう。確かこの部屋は客間に使っていたはずだ。ということは、この部屋をあてがわれている可能性は高い。それに、この部屋には内側から鍵がかかるようになっていて、柚希はドアのノブを捻って鍵がかかっていることを確認した。間違いない、ここだ。

「こんなチョロい鍵なんて、三〇秒もあれば……ほら、解錠！」

中は予想したとおりの女の子の部屋だった。柚希は内心ほくそ笑みながら、てきぱきと盗聴、盗撮グッズを仕掛けていく。そして終了。開始から一五分も経っていない。恐るべき手際の良さだった。

「フフフ……。これも全てはおにいちゃんをあの女の魔の手から救い出すためのよ。柚希にはその権利があるの。おにいちゃん、待っててね」

「ただいまー。柚希、ちゃんと留守番してたか？」

買い物から帰った悠斗が家の中に声をかける。すぐに柚希の元気な声が返ってきた。

「うん。ちゃんとお留守番してたわよ、おにいちゃん。柚希を褒めて褒めて？」

「よし、えらいぞー」

「えへへへー。おにいちやんに褒められちゃった。柚希、しあわせっ！」

背後では雛子が面白くなさそうな顔で二人の様子をみている。何となくではなるが、疎外感を感じる雛子であった。

（そりゃ、この子は昔からおにいちやんと仲がよかったんだし、当たり前なんだけど……なんか、イヤだ）

玄関でサンダルを脱いだ雛子は、ふくれっ面のままキッチンへと向かった。今日は柚希も来ているからちよつと贅沢にすき焼きにしよう。悠斗はそう言った。だが、なんであんな子を歓迎しなきゃいけないんだろう。雛子にはそれが納得いかなかった。

「さて、今日は柚希を歓迎してすき焼きだ！ 肉も結構いいのを買ってきたぞ？」

「歓迎料理がすき焼きって、昭和のセンスだよ、おにいちやん……」

「美味ければそれでいいじゃないか」

「まあ、そうだけど……『あの女』にどれだけ美味しいすき焼きが作れるか、柚希、疑問だわ」

また『あの女』呼ばわりだ。いつまでこんな風に我慢していなければならぬのだろう。雛子の心の中には黒い雲がわき上がっていた。悠斗の従妹で、自分にとっても、戸籍上は従妹になる柚希。悠斗は優しくて大人しくていい子だったと言っけれど、今の柚希を見ると雛子にはとても信じられなかった。

夕食の間も、雛子のその気持ちは収まらなかった。それどころか、ますます黒い雲の量は増えていき、やがて嵐が吹き荒れるようになった。怒りの対象は柚希だけでなく、悠斗にも向かうようになっていった。

「んじゃあ、悪いけど先に風呂入らせてもらうな」

「ん……。わかった。おさきにどうぞ、おにいちやん」

「柚希は次にはいるー！」

雛子は柚希と一緒にいるのが正直苦痛だった。だから、この家で

唯一ひとりきりになれる場所、自分の部屋へと向かった。階段を上がる間も、雛子は憂鬱だった。これではまるで自分が柚希から逃げているようではないか。いや、実際そうなのだ、と雛子は気づいた。あの一つ年下の『従妹』は、自分と悠斗との間にはない信頼関係や、深い理解で結びついている。自分にはそこに割り込む余地はない。

自分の部屋の前まできて、雛子はショートパンツのポケットに入れたあったキーホルダーを取り出した。この部屋は家の中で唯一鍵がかけられる。雛子と悠斗が日本に残る事を許された理由は、この部屋の存在もまた大きいのだ。雛子は鍵を鍵穴に押し込んで回す。「あれ？ 鍵、閉め忘れてたかな……」

部屋に一步入る。別段変わった様子はない。気にしすぎだ。単に自分が部屋を出るときに鍵をかけ忘れただけの話。ただそれだけの話だ。

部屋の隅に置いてあるシングルベッドに腰を下ろし、そのまま上体だけ横になる。蛍光灯の光が眩しい。何だか視界が歪んで見える。雛子はそれが自分の涙だと言うことに気づいた。

（ああ、わたし、あの子に嫉妬してるんだ……）

「ふう。今日はなんか学校サボったわりには妙に疲れる一日だったな」

浴槽にたっぷりのお湯を張り、肩まで湯に浸かった悠斗が呟く。無理もない。可愛かった従妹が、いや、今でも十分美少女なのだがそれは置いておいて、あの素直だった柚希が、二年半でまるで別人に変貌してしまっていたのだ。気疲れするのも無理はない。

「さて、シャンプーするかね」

悠斗は浸かっていた浴槽から出ると、壁面についたカランのところにまで歩いた。歩くといってもほんの二歩ほどだが。リンスインシャンプーのボトルの頭を数回ブッシュして、手のひらにシャンプー

をとる。頭から熱いシャワーを浴びて髪と頭皮を濡らし、悠斗は髪を洗い始めた。

と、その時、かちやりと浴室の扉が開く音がした。悠斗はシャンプー中で目を開ける事が出来ない。だれだ？ 誰だといつても、今この家に居るのは悠斗以外には雛子と柚希しかない。そして、そのどちらが入ってきたとしても、それは悠斗にとって非常にまずい事態だった。

「フフフ……おにいちちゃん、柚希がお背中お流しに来ましたわ」

悠斗は目を開けようとするが、シャンプーが目に入って開けられない。逃げようにも逃げられない絶体絶命の状態だった。

「フフフ……。おにいちちゃん。目を開けたくても開けられないのね？ 柚希がちゃんと身体を洗ってあげますから安心してね？」

悠斗の耳はボディソープのポンプを数回プッシュする音と、それを何かに塗りたくる艶めかしい音を捉えていた。

（これは……まさかつー！）

「おにいちちゃんの身体は、柚希の身体でキレイキレイしてあげますからね」

ぬるりとした感触が背中に触れる。あの柚希が、身体を使って自分の身体を洗っている！ これってまるで……。悠斗の理性は崩壊寸前だった。背中には小ぶりだが柔らかな双丘の感触。胸から腹部にかけては細く華奢だけど、それでもやはり柔らかな腕と手の指の感触。こんな責め苦に耐えられる男がいたら、悠斗はそいつの顔を是非見たいと思った。

悠斗の下半身が熱く硬くなってくる。これ以上はダメだ！ そう思った瞬間、柚希の指が悠斗のそこを撫でていた。

「っ——！！」

「おにいちちゃん……。こんなに固く、熱くなって……。気持ちいいんですね？ 柚希嬉しい！」

悠斗はカランのノブを思いきり捻って、熱いシャワーを全開で浴びた。もちろん後にいた柚希も巻き添えだ。

「きゃっ！ お、おにいちちゃん、いったい何を？」

「それはこっちのセリフだ！ なんで柚希が入ってくるんだ！」

「だって、さつき『柚希は次にはいります』って宣言したもん」

「それはそう言う意味じゃないだろ！」

「それより、おにいちちゃん……。その逞しいものを隠さないでいいの？」

悠斗は股間を柚希に突きつけるようにして叫んでいたことに気づいた。シャワーで泡を無理やり洗い流して、風呂場を脱出する。

「うん、もう……。おにいちちゃんの恥ずかしがり屋さん。柚希に見られるのなんて初めてじゃないのに」

「ただ。また女の子に見られてしまった。俺は本当にお嬢にいけない！」

濡れた身体のまま二階の自室に駆け込むと、悠斗はベッドの上で悶絶していた。今日は厄日だろうか。それとも自分は何か悪いことでもしたのだろうか。これはその罰だともいうのだろうか。

「このままじゃダメだ。俺がもつとしっかりしないと、煩惱に流されてしまう！ 雛子とならそれもまたありなんだが……。いやいや、何をいってるんだ俺は！ 雛子は妹なんだぞ！ 父さんだって信用してくれたから日本に残らせてくれたんだ」

悠斗はとりあえず自分の分身に落ち着くように言い聞かせつつ、自分にも理性的であれと言い聞かせるのだった。

その夜、柚希は悠大が使っていた部屋を寝室としてあてがわれた。露木家で預かる間は、この部屋を自分の部屋として使っていていいと悠斗に言われたのだ。もちろん、国際電話で悠大に許可をもらってのことである。

「父さんの本とか結構あるから、勝手に触らないでね。あと、布団

は押し入れの下の段のが来客用のだから、そっちを使つて」

「はい。ホントはおにいちゃんと一緒に寝たかったのになあ。柚希寂しい」

「ななな、なにをいつてるんだ柚希は！ そんなの小学生までだ！」

「ちっ」

「なんか言つたか？」

「ん〜ん？ 柚希何も言つてないよ？」

「ならよし。明日からは俺たちは学校だけど、とりあえずあんまし近所をうろつかないように。補導されたりしたら面倒だからね」

「はい！」

「じゃあ、俺はもう寝るから。柚希も早く寝ろよ？」

悠斗は部屋の扉に手をかける。振り返ると畳の床にぺたりと座り込んだ柚希が手を振っている。

「おやすみ、柚希」

「おやすみなさい、おにいちゃん」

柚希は悠斗が部屋に入り、寝入るまで隠しカメラで監視し続けた。小型のノートパソコンに悠斗の部屋と、雛子の部屋の両方の映像が映し出されている。画像は極めて鮮明。音声も明瞭に聞き取れる。悠斗は朝が早いせいか、布団に入ってすぐに寝息をたてはじめた。対して雛子はまだ着替えてもおらず、机でなにか書き物をしているようだ。

「丁度いいわ。あの女に柚希とおにいちゃんのらぶらぶ泡プレイを見せつけるチャンスね」

映像はすでに都合のいいようにカット、編集されている。音声もだ。これを見せつけられたら、雛子はどんなに驚くだろう。柚希はその歪んだ喜びに身を震わせていた。

ノートパソコンの二人の部屋の映像を閉じ、柚希はそつと部屋の扉を開く。悠斗が起き出してくる気配はない。

雛子の部屋の前で、柚希はすつと息を吸い込み、ふうつと吐き出

した。そして軽くドアをノックする。中から雛子の「どうぞ」という声が聞こえる。なんだ、鍵がかかる部屋なのに、その鍵をかけてないじゃないか。

（これはおにいちゃんがいつでも夜這いに来られるように、っていう配慮に違いないわ！）

嫉妬の炎に身を焦がしながら、柚希は扉を開き、雛子の部屋に入った。

「こんばんは。戸籍上の『妹』さん」

「こんばんは。引きこもりの『従妹』さん。何かご用？」

「ええ、あなたにちよつと見て欲しいものがあるの」

「見てほしいもの？」

柚希はノートパソコンを広げて、動画を再生した。都合のいいように編集した、悠斗と柚希のあられもない姿が画面の上で動き回る。雛子の顔は蒼白だった。信じられない、信じたくない。でも、こんなにはつきりした証拠がある。これでは……。

「柚希ちゃん。ちよつとこれ貸してね」

「どうぞどうぞ」

柚希は雛子に恭しくパソコンを差し出した。それをひったくるように受け取ると、雛子はまっすぐ悠斗の部屋に向かう。悠斗の部屋には鍵はない。雛子は扉を乱暴に開けて踏み込んだ。

「おにいちゃん！　ちよつと起きて！」

完全に寝入っていた悠斗は、何かとあたふたしながらも目を覚ました。その目の前には、これまでに見たことのない怒りの形相を湛えた雛子が仁王立ちしている。

「おにいちゃん……これは、どういうことっ……！」

雛子がノートパソコンを突きつけると、悠斗のあたまから血がさつと下がった。いつの間にこんな動画を？　いや、問題はそっちじゃない。完全に雛子に誤解されている事の方が悠斗にとっては大問題だ。

「わたし、おにいちゃんにとっては邪魔者だったんだね」

「ひ、雛子。誤解だ！　これは柚希のヤツが！」

「聞きたくない！　おにいちやんなんで、大ッ嫌い！」

そう叫ぶと、雛子は階段を駆け下り、サンダルに乱暴に足を突っ込むと、夜更けの街へと走り去っていった。

第二章 ― 従妹、襲来 ― 3 (後書き)

いかがでしたか？ よろしければご意見・感想などお寄せ下さい。

第二章 — 従妹、襲来 — 4 (前書き)

第二章の4をお送りします。
それではどうぞ！

行くあてなんてどこにもなかった。ただ、家に居たくなかった。悠斗と柚希のいる、あの家に。雛子は家を飛び出してから財布も何も持ってきていなかったことを思い出していた。まったく、そっかしいにも程がある。でも、あの映像を見て冷静でいられる程、自分は人間が出来ていないと雛子は思った。

五月末の夜の空気は、昼間の熱気を少し残したねっとりとした粘りのあるもので、それがなんとも雛子には不快だった。

「これから……どうしよう」

ポケットを探ると、五百円玉が一枚出てきた。これで深夜営業の喫茶店にでも入るか？ それともファーストフード店で朝まで粘るか。でも、その後は？ 朝になったら、自分は一体どうすればいいのか分からない。

足は自然と明るい方へ明るい方へと進んでいく。それにつれて、人の数も増えていく。終電も間際のこの時間でも、酔客は数多く街を徘徊している。自分はその酔っぱらいたちよりよほど惨めだ。雛子は涙をこらえるのに必死だった。

やがて、彼女は自分が繁華街より一本路地裏に入り込んでいることに気づいた。前には柄の悪そうな若い男たちが数人たむろしている。普段の彼女なら、脱兎のごとく逃げ出す状況のはずだった。だが、雛子はそちらへと足を向けた。

「彼女、一人？ よかったらオレたちと遊ばない？」

「あ、この子泣いてるよ。こんな可愛い子泣かすなんてどんな悪人だ？」

「ねえねえ。この先にさ、オレのよく行く店があるんだ。そこで一杯どう？」

普段は口をきくのも怖いと感じるタイプの男たちが、雛子を取り囲んでいる。だが、不思議なことに、その時の雛子にはその男たち

が怖いとはこれっぽっちも感じられなかったのだ。

「ん……、いいよ。いっしょに行く」

「ヒューッ！今日はツイてるぜ！こんな可愛い子とお近づきになれるんだから！」

「店って、どこ？」

「こつちだよ。ついて来な」

ああ、自分はなんか道を踏み外してるんだなと雛子は感じる。だが、それでもいい。信じていた悠斗が柚希とあんな事をしていたのだから。もう何がどうなっても構わない。今はこの男たちに身を任せよう。そんな諦めが、雛子の心を支配していた。

「雛子……。雛子ーっ！！」

家を飛び出していった雛子を追って、悠斗もまた街へ出ていた。嫌な予感が止まらない。このままでは何か取り返しのないことになってしまう。そんな考えが悠斗の頭の中に渦巻いている。走って、走って、走り回って、雛子が立ち寄りそうところをしらみつぶしに訪ねる。だが、そのどこにも雛子は居なかった。

「くそっ、あんな動画さえなければっ！」

あれを撮ったのは間違いなく柚希だ。確信を持てる。でも、三年前の柚希はパソコンの帕の字も分からないような機械音痴だったはずなのだ。それがこの三年間で、あんな事が出来るまでになっている。

「とにかく、雛子を捜し出さなきゃ。この街だって夜はヤバイ奴らが結構いるんだ」

悠斗は疲れた足に鞭を打ち、再び夜の街を走り出した。

その悠斗を冷めた目で見つめるひとりの少女がいた。黒髪にゴスロリのドレス。スレンダーな体つき。誰あろう柚希だ。

「ふーん、おにいちゃんはあるの女のためにそんなに必死になっちゃうんだ。柚希、もっと意地悪したくなっちゃったなあ」

その時、柚希のスカートのポケットに入っていた携帯電話が着信

音を奏でた。片手で操作し、通話ボタンを押す。

「柚希よ。首尾はどう？ うん……うん。そう、好きにしちゃって。柚希ちゃんが許しちゃう。え？ ご褒美？ FXでちゃんと稼いでるから心配しなくていいわよ。じゃ、お願いね」

柚希は片手で再び通話ボタンを押して、回線を切る。その白い相貌には、酷薄な笑みが浮かんでいた。

「さあ、『妹』さんの大ピンチよ？ おにちゃんは果たして間に合うかしら？」

柚希は咽をくくつと鳴らすと、我慢出来ないといった様子で笑いはじめた。その笑い声は、夜の街に遠く響いていった。

「さて、お嬢さん。ここらでお楽しみタイムといこうかと思うんですがね」

先頭を歩いていた男がニヤニヤと笑いながら雛子に顔を近づけてくる。酒とタバコのヤニの匂いが鼻をつく。思わず顔をしかめた雛子に、男は容赦ない平手打ちを食らわせた。よろめいて、路地に倒れ込む。すえた匂いのする路地裏の、その薄汚い路面に、雛子は力なく横たわっていた。

「『ボス』からは好きなようにしていいってよ。お前ら、こういう乳臭いタイプ好みだろ？ 剥いちまえ」

その言葉の意味を理解すると、ようやく雛子に恐怖感らしいものが沸き上がってきた。剥くというのは、要するに……服をはぎ取れということだろう。その先は、おきまりのコースだ。

「……イヤ……いやっ！」

「お？ なんだ、抵抗すんの？」

「そんな気力残ってたんだ。オレ、すっかり腑抜けになつてると思ってた」

ぎやははははという下衆な笑い声が裏路地に響き渡る。男たち

の手が、雛子の服にかかる。

「面倒だから破いちまおうぜ」

「いや、さすがにオレはそこまではしたくないぞ？」

「いい子ちゃんぶりやがって。お前だってこれからオレと穴兄弟になるんだぜ？」

「それもそうだな、んじゃ、遠慮なく破らせてもらうか」

雛子は路地の地面を後じさりながら、必死に自分の身体を隠そうとする。だが、ここは裏路地。身体を隠すものなど何も無い。その時、雛子の耳に自分を呼ぶ義兄の声が聞こえたような気がした。こんな路地裏で、そんなはずはない。見つかるはずなんかない。そう思っただけでも、雛子はその僅かな望みにすがりついた。

「おにいちゃん……、おにいちゃん——ん！！」

「ぎゃははっ、おにいちゃん、だって！ この子ブラコンだぜ！」

「残念だけど、お前さんのおにいちゃんとやらは来やしないよ。こんな路地裏でみつかるわけガッ！！」

一人の男が、突然の背後からの一撃で打ち倒される。男はその場にくずおれた。

雛子は信じられない思いだった。目の前に、悠斗がいる。どれだけ走ったのだろう、全身汗まみれで、肩で息をして。両膝に手をついて、ゼエゼエとあえぎながらも、その双眸には怒りの炎が燃えていた。

「お前ら……俺の大事な雛子に何してやがる……」

悠斗の押し殺した声が男たちを一瞬怯ませる。だが、多勢に無勢だ。一人倒したとはいえ、相手は四人、こちらは悠斗ひとり。だが、悠斗には守るべき約束があった。父と交わした大切な約束。どんなことがあっても、雛子を護ってみせるという、男の約束だ。だから、人数なんて関係ない。こちらが命を落とそうが、雛子さえ無事に家に帰せば、それで約束は果たされたことになる。

「コイツ、なんかヤバイ薬でもキメてるんじゃないの？」

「あー、ジャンキーはヤベエな」

「うるせえ！！俺は正気だし、薬なんかキメてねえ！　てめえら、タダで済むと思うなよ？」

一人の男が懐からナイフを取り出して鮮やかな手つきでそれを開く。バタフライナイフというヤツだ。悠斗もその存在くらいは知っている。

「おもしろい、おもしろいよ、お前。だからちよつとだけ相手してやるよ」

「雛子！」

「え……え？」

「俺の後に下がれ！」

「ん……。わ、わかった……」

路地にへたり込んでいた雛子がふらりと立ち上がり、悠斗の後に隠れる。悠斗は履いていたスニーカーの靴先で、地面にざつとライオンを引いた。

「ここから先には、誰一人通さねえ！」

男たちはその言葉に色めき立った。

「舐めやがって！」

「ぶつ潰してやる！」

だが、男たちには気づいていない事実があった。それは、この路地があまりに狭く、同時に打ちかかれるのはせいぜいが二人まで。

ちゃんと動こうとすれば一人ずつしか前に出られないのだ。そして、悠斗は『素人』ではなかった。仁正学園では、授業で必ず武道を履修し、卒業までには全員が初段をとるまでに腕を上げるのだ。

まず二人同時にかかってきた男が次々と打ち倒される。確実に急所を突いた一撃に、男たちはたまらず悶絶した。次に飛び込んで来た男は、手に鎖を巻き付けていた。だが、悠斗はそれを余裕を持って躲しきる。次の瞬間、男は宙を舞っていた。受け身の取れない角度での投げ技。とても危険な技だ。だが、男の頭は先に倒れていた二人の男たちの上に落ちた。それでも男は脳震盪を起こして気を失

った。

最後に残ったのは、バタフライナイフの男だった。下手にナイフを振り回さず、切っ先を確実に悠斗に向けてくる。しばしのにらみ合いの後、男が悠斗の顔面めがけて突きを繰り出した。悠斗はギリギリのところで躲す。薄皮一枚がナイフの刃で斬られ、つつつと赤い血が頬を伝う。

「驚いた。これを躲されるとはな。だがな、ボウズ。ナイフにはこんな使い方もあるんだよ！」

男は突然ナイフを悠斗の腹をめがけて投げつけた。後には雛子がいる。避けることはできない！　だが、悠斗の怒りは集中力を極限まで高めていた。彼は飛んで来たナイフを上げた膝と下げた肘で挟んで受け止めたのだ。

「う、嘘だろ……。そんな馬鹿な……」

「まだやるのか」

「ひっ！」

「まだやるのかと聞いている！」

悠斗の一言に気圧された男は、仲間を見捨てて路地の反対方向へと走り出した。

「忘れ物だ！」

男の足下にバタフライナイフが転がってくる。男はそれを畳んで懷に隠すと、路地の角を曲がって走り去っていった。風に乗ってパトカーのサイレンの音が聞こえてくる。もしかしたら通報されたのかもしれない。

「長居は無用だ。雛子、走れるか？」

「う……うん。大丈夫だよ、おにいちゃん」

だが、走り出した途端に雛子は転んでしまった。見れば足首が少し腫れている。どうやらさつき軽い捻挫をしていたようだ。悠斗は黙ってしゃがみ込んだ。おぶされ、という意味だろう。

「ほら、早く」

「ん……」

雛子はしっかりと悠斗の背中におぶされると、耳元で呟いた。

「おにいちゃん」

「ん？」

「怖かったよお……」

「もう大丈夫だ。家に帰ろうな」

雛子は堰を切ったように泣き出した。胸に回された腕にぎゅつと力がこもる。ふっくらとした胸が背中に当たっているけれど、不思議と煩惱は発動しない。悠斗はある種の充実感を感じていた。自分は雛子を護れた。その充実感を。

「で？ 柚希は『あの女』を好きにしているよっていったよね？
それがなに？ 全員伸されてこの様なわけ？」

深夜、人気のない廃工場。ゴスロリドレスに黒髪ロングの美少女が、数人の男を前にしてふんぞり返っていた。少女は靴の先で跪いた男のあごを持ち上げると、靴の裏で頬をぐりぐりと踏みにじる。
「あれほど『任せてください。チョロいっすよ！』なんていつてたのに、何その体たらくは。そろいも揃って無能ばかり」

少女――露木柚希――はこの男たちを金で雇い、雛子を襲わせたのだ。要するに、自作自演というやつである。柚希はまだ毒づき足りないと言った風に男の顔に向かって唾を吐きかけた。べちゃりと音がして、少し粘りけのある唾液が男の頬を伝う。男は屈辱に耐え続けていたが、我慢もこれまでだった。

「なあ、あんた。あんたは何か勘違いしてないか？ オレたちはあなたの払う金と、少々の楽しみで雇われてやってるだけなんだぜ？」
「お金なら払ったじゃない。それともあれじゃ足りないかも？」

男は口の端をぐいっと釣り上げて凶悪な笑みを浮かべた。まるで肉食獣が羊の群れを見つけた時のような表情だった。

「ああ、足りないね。金じゃなくて、お楽しみの方がな！」

男たちはそれまで『ボス』と崇めていた柚希を『お楽しみ』の対象に格下げした。男たちの雰囲気は豹変したことに、柚希も当然気づいていた。だが、時はすでに遅すぎた。

飢えた狼どもが、華奢な肢体を求めて我先にと殺到する。手脚を無理やり押さえつけられ、動きを封じられる。ここに至ってやっと柚希の防衛本能が目覚ました。怖い。怖い。怖い。こんなイヤだ！

「いやあっ！ 柚希、こんなのいやあっ！」

「へっへっへ。さっきの子は可愛かったけどちよつとばかり乳臭い感じだったからな。お前さんみたいなべっぴんさんなら、俺たちも大喜びだ！」

こんなはずじゃなかった。男たちなんて、所詮は金で雇う使い走りに過ぎなかった。その男たちが、今自分に向かって牙を剥いている。欲望をむき出しにして、押さえつけてくる。

「いやっ、やめてえっ！！」

黒いゴスロリのドレスが破られ、下着が露わになる。リーダー格の男がショーツに手をかける。

「へっへっへ。ではご開帳！」

「いやあっ！ 助けてっ、おにいちゃん！！！」

「おやあ、ボスもブラコンですかあ？ おにいちゃんが助けに来てくれるといいですねえっ！？」

リーダー格の男は、ブランコのように振られてきたクレインのチエーンの直撃を背中に食らってもんどり打った。他の男たちも柚希から手を放し、周囲を警戒する。

「ごふうっ！」

また一人、チエーンの餌食になる。

残る男は三人。

「へげえっ！」

また一人がチエーンの直撃を受けて地面に転がる。残るは二人。その二人の男の頭には、さっきイヤと言うほどぶちのめされた相手

の顔が浮かんでいた。

「天が呼ぶ地が呼ぶ従妹が呼ぶ。悪を倒せと俺を呼ぶ……」

「ま、まさか、そんなことは……」

「そうだ。そのまさかだ！ 『おにいちゃん』参上！」

「おにいちゃん……おにいちゃん！！」

残る二人の男は顔を見合わせると、コクリと頷き、脱兎のごとくかけだしていた。その背中を容赦のないクレーンの一撃が襲う。男たちは縛れるようにして倒れ、ぴくぴくと痙攣していた。

「柚希、大丈夫か？」

「あ、ああ、うわああああああああん！ 怖かったよ、おにいちゃん！！」

安心して張り詰めていた緊張の糸が切れたのか、柚希は声を上げて泣いた。悠斗の後にはいつの間にかノートパソコンを持った雛子が寄り添うように経っていた。柚希はそれを見て、なぜ自分の位置が悠斗に分かったのかを知った。

「ぐすつ、おにいちゃん、柚希の携帯をGPSで追跡したでしょう」

「ああ、お前のお気に入りのかータイらしいからな。いつでも持つてるだろ？ これならお前がどこにしよう、すぐに場所が分かる」
「ぐすつ、柚希に隠れてそんなことしてるなんて、おにいちゃんずるい」

「金に任せて雛子を襲わせた柚希がそれを言うか？」

「うつつ……。そ、それは」

「冗談でした、じゃ済まないぞ。雛子、お前から言うことはないか？」

雛子は苦笑いを浮かべながら、悠斗から風呂場であったことの真相を聞いたこと。襲われたのは事実だけど、悠斗が助けに来てくれたから無事ですんだこと、そして自分は柚希を許そうと思っていることを伝えた。

「ほんとうに、それでいいの？」

「うん、いいよ。だって……」

「おにいちゃんは『わたしたちの』おにいちゃんだって分かったから」

「うん……でも、柚希、おにいちゃんは渡さないからね」

「望むところよ。わたしだって絶対におにいちゃんは渡さないから」！

第二章 — 従妹、襲来 — 4 (後書き)

いかがでしたか？ 少しでも楽しんで頂けたとしたら書いたものとしてはこれ以上ない幸せです。もしよろしければご意見ご感想などお寄せください。

幕間劇その1 —— 柚希とおにいちちゃんのラブラブ日記 —— (前書き)

幕間劇というほどでもないのですが、ストーリーにちょっと絡んでくるのでよろしければどうぞ！

幕間劇その1 — 柚希とおにいちゃんのラブラブ日記 —

○月○日

おにいちゃんがあそびにきてくれた。久しぶりにいっしょにあそんでくれた。とってもうれしかった。つかれておひるねしたときはおにいちゃんがうでまくらをしてくれた。ゆずき、とってもうれしかったよ、おにいちゃん。

○月○日

きょうもおにいちゃんがうちにいる。きのうはおとまりだった。ゆずきといっしょのおへやで、よるおそくまでいっぱいおはなしした。きょうはちよっとおねぼうしちゃったけど、おにいちゃんが「わるいのはおれだ」ってかばってくれた。ありがとう、おにいちゃん。

○月○日

きょうはおにいちゃんがいえにかえっちゃう日だった。えきまでおくりに行っただけど、ゆずきさびしくてないちゃった。そしたら、おにいちゃんがおでこにキスしてくれた。「なかないで。またくるから」って。でも、つきにあえるのはきつと来年だ。ゆずき、それまでがまんできないよ。おにいちゃんがほんとうにゆずきのおにいちゃんだったらしいのに。

○月○日

おにいちゃんが遊びにきてくれた。一年ぶりだった。少しせがびていた。ゆずきは小さいままなのに、おにいちゃんだけずるい。そうついたら「ゆずきもちやんと大きくなってるよ」っていつてく

れた。やっぱりゆずきはおにいちゃんが大好きだ。

○月○日

おにいちゃんがおつきなクワガタをつかまえてきた。ゆずきは虫がこわいので、ないてにげまわったら、なんでなくんだよって追いかけてきた。きょうのおにいちゃんはちよつときらい。だって、ゆずきが虫きらいなのはしってるはずだもん。でもね。ほんとうはゆずき、おにいちゃんがだいすき。ほかのおともだちとはちがう「だいすき」なの。

○月○日

きょうはおにいちゃんがいえにかえる日でした。えきまで送ったら、やっぱりさびしくてゆずきはないちゃいました。そしたら、おにいちゃんがほっぺにキスをしてくれて、「またかならずくるから」ってやくそくしてくれました。ほかのひとがみてるまえでキスされるのは、とってもはずかしかったけど、でもとってもうれしかったです。ゆずきはおにいちゃんがだいすきです。

○月○日

今日、おにいちゃんがうちに来た。本当に久しぶり。ずっと大事にしてた写真より、もっと大人っぽくなっててすてきだった。柚希はおにいちゃんと一緒にお風呂に入れるのを楽しみにしてたのに、おにいちゃんがいやがった。なんでって聞くと、男の子と女の子が一緒にお風呂に入るのはおかしいって言った。ゆずきは楽しみにしてたのにな。

中学に入ってから、おにいちゃんはなかなか遊びに来てくれなくなった。もしかしたら、柚希のこときらいなのかな。でも柚希はおにいちゃんがだいすき。クラスの男子なんて子供にしか見えない。

おにいちゃんは柚希にとって特別な人。

○月○日

今日はおにいちゃんが勉強をみてくれた。でも、柚希がどんな問題を解いていたら、「これじゃあ、俺がみてやる必要ないよなあ」って言うてた。もしかして、嫌われちゃったかな。でも、そのあとおやつと一緒に食べたときは、にこにこしてるいつものおにいちゃんだった。柚希の考えすぎだったかもしれない。

やっぱり柚希はおにいちゃんが大好き。クラスの誰に告白されても断るくらい、おにいちゃんが大好き。夜もいまは別々の部屋で寝かされるようになった。これが大人に近づいていくことなのかな。だとしたら、柚希は大人になんかならなくていい。なれなくていいから、おにいちゃんといっしょに寝たい。また、小さいときみたいに腕まくらしてくれるかな。

○月○日

今日、おにいちゃんは都会に帰ってしまった。駅までいつものように送っていったけど、いつもみたいにキスはしてくれなくなった。おにいちゃんになんで？　って聞いてみたら「キスは特別な相手とするんだ」って言われた。シヨックだった。柚希はおにいちゃんの特別な人じゃなかったんだ。

涙がボロボロ出てきて止まらなかった。そしたら、おにいちゃんにはキスの代わりに頭を撫でてくれた。電車がくるまでずっと。「柚希の髪の毛はきれいだな」ってほめてくれた。キスはしてくれなかったけど、やっぱり柚希はおにいちゃんが大好き。きっといつか、おにいちゃんの特別な人になって、いっぱいキスしてもらえるようになるんだ。

○月○日

今日、おにいちゃんが街からやってきた。すっかり大人っぽくなっていてまるで別人みたいだった。迎えに行った柚希に気づいて手を振ってくれた時は、なんだか胸がドキドキした。「柚希も大きくなったな」って言われて、ちよつと嬉しかった。だって、柚希だって来年は中学生だ。いつまでもこどもじゃない。女の子の……アレも始まつちやったし。

今はなんでおにいちゃんがお風呂と一緒に入れないっていったのがよく分かる。柚希だつていまおにいちゃんに裸をみられるのは恥ずかしい。でも、おにいちゃんになら見られてもいいかな、とも思う。それに、保健の授業でもやってた。大人になつたら、男の人と女の人と一緒になつて子供を作るんだつて。柚希の相手はおにいちゃんしか考えられない。それ以外の人に裸を見られるなんて絶対にいや。やつぱり柚希はおにいちゃんが大好きなんだ。

○月○日

今日はおにいちゃんといっしょに海に行った。水着を見られるのが何となく恥ずかしい。クラスのほかの女の子は、柚希より胸が大きかったりするから。きつと中学生だともっと大きいんだろうなと思う。そんな女の子を見なれているおにいちゃんには、柚希の胸はぺったんこに見えるに違いない。でも、おにいちゃんは「柚希、水着似合うな。手脚が長いからよけいにきれいに見える」って言うてくれた！ 柚希のことをきれいだつて言うてくれた！ 柚希は嬉しくて嬉しくて涙がでそうだったけど、海に飛び込んでなんとかごまかした。

おにいちゃんがきれいって言うてくれるなら、他の誰かがブスっていても全然気にならない。海で遊んでるとき、おにいちゃんに「柚希の夢はなに？」って聞かれた。柚希は「おにいちゃんのお嫁さんになること」って答えた。おにいちゃんはちよつと困つたような変な顔をしていた。柚希じゃダメなの、おにいちゃん？

○月○日

今日は海辺で花火大会があった。おにいちゃんはお父さんの浴衣を借りて、柚希はお気に入りの金魚の浴衣を着て、一緒に出店をまわったり花火を見たりした。今年はおにいちゃんももう少しうちにいられるらしい。また一緒に海に行きたいし、山にも行きたい。柚希が虫ぎらいを克服したことを教えてあげたいし、こんな大きな花火じゃなくて、手で持ってやる花火も一緒にしたい。井戸で冷やしたスイカと一緒に食べたり、魚釣りをしたりもしたい。

でも、一緒にいられる時間は限られてる。昔はおにいちゃんが本当のおにいちゃんだったらしいのについて思ってたけど、今はちよつと違う。柚希はおにいちゃんのお嫁さんになりたい。そしたらずつと一緒にいられるし、一緒にいるのが当たり前になる。でもおにいちゃんはどう思ってるんだろう。柚希なんか敵わないくらいすてきな人を好きになったりしてないよね？

○月○日

今日は近所のおじさんの案内で海釣りに出た。おにいちゃんは釣りは初めてだったみたいで、餌を針につけるのに四苦八苦してた。柚希がすんなり餌をつけてみせたら「お前、よくそんな気持ち悪いの触れるな」ってびっくりしてた。道具は全部借り物だけど、おにいちゃんは何と初めてでタイを釣り上げた。これには船頭のおじさんもびっくりしてた。なんだか柚希は鼻が高かった。柚希のおにいちゃんは実はすごいんだからって自慢したかった。

釣りが終わったら、おじさんが釣り上げた魚をその場でさばいておさしみにしてくれた。これもおにいちゃんには初体験だったみたいで、目をきらきらさせながらおじさんがおさしみをつくるのを見ていた。都会ではおさしみはスーパーで買うものらしい。そんなの本当のおさしみじゃないよと柚希がいたら、おにいちゃんは「そうかもしれない」って少しさびしそうな顔をした。柚希はいつで

もおにいちゃんに笑っていてほしい。柚希がそばにいただけじゃ、だめなのかな、おにいちゃん。

○月○日

おにいちゃんがうちに長期滞在している理由が分かった。伯父さんに無理を言つて、夏休みの間なるべく柚希と一緒にいたいと言ってくれたらしい。柚希は涙が出そうなくらいうれしかった。でも、その本当の理由を聞いたとき、柚希はしばらくおにいちゃんとお別れしなければならんだと知った。おにいちゃんはこれから受験勉強とかで忙しくなる。だから、この町にもなかなか来ることが出来なくなる。そしたら、柚希とも会えなくなる。

だから、あの厳しい伯父さんを説得してまでうちに来てくれたんだ。柚希がこの町にいるから、こんなに遠くにいるから、おにいちゃんは無理をした。ごめんなさい、おにいちゃん。中学校に上がったら、こんどは柚希が街まで会いに行くからね。

○月○日

おにいちゃんは毎日必ず勉強をしている。誰に言われなくても、必ずだ。おにいちゃんが行きたい高校は、とてもレベルが高いそう。で、今から準備してないととても合格出来ないらしい。そんなおにいちゃんを柚希はすごいと思う。だって、同じクラスの男子なんて遊ぶことしか考えてないもの。いつもカードゲームやゲーム機の話ばかりしてる。

でもおにいちゃんはちがう。自分の目標を決めて、自分で頑張ってる。柚希は応援することしかできないけど、どうか神様、おにいちゃんを入りたい学校に入れてあげてください。もしこの願いが叶ったら、柚希はなんでもします。どうか、おにいちゃんの入りたい学校に入れてあげてください。

○月○日

今日はとうとうおにいちやんが街へ帰っていった。いつもと同じように柚希は見送りに行った。でも、これで今までの何倍も会えない時間が増えてしまうと思うと、柚希はどうしても涙をこらえられなかった。ぼろぼろ涙をこぼして泣いていたら、おにいちやんがそっと肩を抱いてくれた。そして、「柚希はいつうちに来てもいいんだから、泣くな」って言うてくれた。柚希は来年中学に上がったなら、柚希から会いに行くっておにいちやんと約束した。

会えない時間が増えたなら、会いに行ける方が行けばいい。柚希はそう思う。今まではおにいちやんがそうしてくれていたんだ。電車がくるまで、おにいちやんは柚希の肩を抱いていてくれた。夏で、暑いはずなんだけど、おにいちやんの体温はなぜか気持ちよくてふしぎだった。中学に入ったら、きつとおにいちやんに会いに行こう。そして、すこし大人になった柚希をおにいちやんに見てもらうんだ！

○月○日

今日はお父さんに無理をいって、おにいちやんの家に遊びに来た。クリスマスプレゼントに、柚希の手編みのマフラーをあげた。おにいちやんは「柚希がこんな事できるようになってたとは思わなかった」って驚いてた。

そうだよ、おにいちやん。柚希は来年から中学生。一步大人になるの。だから、そのマフラーを巻くときは、柚希のことを想い出してね。おにいちやんはちょっと目が不揃いなそのマフラーを、それでも嬉しそうに受け取ってくれた。とっても嬉しかった。

夜中、みんなが寝静まった後、持ってきた電源タップ型の盗聴器を仕掛けてみた。ネット通販で買ったんだけど、本当に電源タップにしか見えない。使うあてなんてないんだけど、他に使う場所もないし、ここに仕掛けちゃおう。見つからないか、なんだかドキドキする。柚希はなんだか悪い子になっちゃったみたい。

○月○日

今日、ある女子生徒から言いがかりをつけられた。柚希がその子の好きな先輩を誘惑してるというのだ。柚希はそんなことしたことはないし、第一、柚希にはおにちゃんがいる。他の男の子なんて全然気にならない。なのにその子は「大野先輩を返して」と繰り返し柚希に言ってくる。どうして？ 柚希はなにも悪いことしてないよ？

○月○日

今日、体育館裏に何人かの女子生徒に呼び出された。全然心当たりのないことで文句を言われた。柚希が「ちょっと可愛いのを鼻にかけてる」なんて言われた。そんなこと、一度もいったことないし、自分がとりわけ可愛いなんて思っただけなのに。みんなの見てる前で土下座して謝れと言われた。謝る理由なんてないから断った。そして、みんなに引っぱられたり蹴られたりした。バケツに入った雨水をかけられたりもした。

○月○日

今日、昨日のことを担任の先生に相談した。そしたら、学級会で問題にしてくれたんだけど、柚希の言うことは全然信じてくれないのに、昨日柚希を呼び出した生徒たちの言うことは何でもかんでも信用していた。結局、クラスにいじめはありません、ということになった。その日の放課後、下駄箱に柚希の靴はなかった。探し回ったけど、どこにもなかった。

○月○日

今日から学校に行かないとお父さんに言ったら叩かれた。「首根っこ引つ張つても学校へ行かせる」といって、柚希を家の外に放り出した。柚希は学校であったことを全部話した。でも、お父さん

は信じてくれなかった。「転校させてほしい」といつても取り合ってくれなかった。ああ、お父さんは柚希の味方じゃないんだって思った。こんな家に生まれたのが柚希の不幸なのかもしれない。お父さんは柚希を守ってくれると思うってたのに。

○月○日

今日も家に居る。あんな奴らのいる学校なんか行かなくても、家でも勉強は出来る。自分が不細工なのを棚に上げて「あいつは男に媚びを売ってちやほやされてる」なんていうバカ女なんて死んでしまえばいい。頭も顔もろくな出来じゃないんだから、その方が世のため人のためというものだ。学校からの連絡がうざつたい。本当はただ単に自分の担任の生徒が不登校だと体裁が悪いから学校に出てこいと言いたいだけなのが丸見えだ。そんな学校なんて行く価値なんてない。柚希は自分で勉強できる。

○月○日

FXのコツが分かってきた。上手くやれば少ない元手でもあつというまに大金持ちだ。ネットでの仲間も増えた。仲には盗聴器とかの専門知識を教えてくれる人もいる。柚希が女の子だって知ったら急に馴れ馴れしくなったから切ったけど。お父さんが学校へ行けとうるさい。もう中学の教科書なんてとくに終わってる。柚希は学校なんか行かない。こうして家に居れば、少なくともいじめられることはないから。

○月○日

伯父さんが再婚して、アメリカに海外赴任したらしい。お父さんがそう言ってた。おにいちゃんは？ と聞くと、学校のために日本に残っているという。これはきつと神様が柚希にくれたチャンスに違いない。ネットで隣町から出ている長距離バスの時間と運賃を調べる。大丈夫、そのくらいのお金はいつでも払えるくらいにはFX

で稼ぐことが出来た。隣町まではそこらに止まってるバイクでも盗んで走っていけばすぐだ。

家にこもってもうすぐ二年になるけど、ようやくおにいちゃんに会いにいける。おにいちゃん、待っててね。柚希は少しでも大人になったから、きつとおにいちゃんの特別になれるはずだから。家を出るのは今日の夜。お父さんたちが寝静まってから。このチャンス逃したら、きっと柚希は一生後悔する。だから、おにいちゃんのところに行くの。

幕間劇その1——柚希とおにいちんのラブラブ日記——（後書き）

いかがでしたか？　もしよろしければご意見ご感想などお寄せ下さい。

第三章 — 義妹と従妹 — 1 (前書き)

第三章の1をお送りします。
それではどうぞ！

雛子と柚希を危機から救い出し、悠斗はますます二人から慕われる事となった。甘え方も半端ではなく、二人して悠斗を取り合っていることも日常茶飯事だ。今も柚希が雛子にずるいずるいを連発している。学校では二人きりになれるだろうと駄々をこねているのだ。「なあ、柚希。俺と雛子は学年が違っんだぞ？　一緒にいるのは学校の行き帰りぐらいなもので、ほとんどの時間は別々に過ごしてるんだから」

「それでも、同じ学園の制服を着て、一緒に登校して、やっぱひなたんずるいー！　柚希も一緒に登校したいー！」

あの一件以来、柚希は雛子のことを『ひなたん』と、雛子は柚希のことを『ゆずちゃん』と呼ぶようになっていた。まあ、多少仲がよくなった程度であって、悠斗を巡る争奪戦は終わったわけではないのは前述の通りだ。

「ゆずちゃんも学校行けばきつとたくさんお友達できるよ？」

「そうだぞ、柚希。お前はただでさえ可愛いんだから、まず男子が放っておかないな」

悠斗のその言葉に、柚希は凍り付いた。それまで笑顔だった顔からは表情がすっぱりと抜け落ち、まるで中身のない人形のような雰囲気放っている。悠斗と雛子も敏感にそれを察していて、一体何が柚希をそんな風にしてしまったのかと思案を巡らせていた。

「男の子なんて……嫌い。それに媚びを売る女の子はもっと嫌い。クラスの奴らなんか、みんな死んじゃえばいいのに。柚希だけがつまはじきにされて……柚希、何も悪いことしてなかったのに、大野先輩を誘惑したとか、男に媚びを売ってちやほやされてるとか……。そんなの、全部自分たちのことじゃない。なんで、なんで柚希がそんなこといわれなきゃいけないの？」

言葉はだんだんと途切れ途切れになり、鼻を吸る音も混じってく

る。ああ、柚希が不登校になった理由が、少しだけ分かった。悠斗はそう思った。きつと、柚希の容姿を妬んだ女子生徒に陰湿ないじめを受けたのだろう。よくある話だが、まさかそれが自分の身内に降りかかっているとは。

「柚希、無理に学校にいけとは言わないよ。苦しいときにはうちに逃げてきてもいい。でも、ここはお前の本当の家じゃない。それはお前自身がいちばん良く分かってるはずだ」

「そんなの……柚希だって分かっているもん。でも、学校に行ったら、また同じ事の繰り返しだもん。お父さんに転校したいって言っても、全然取り合ってくれないし、だから柚希は学校に行かないの！」

きつと柚希はいま自分の言葉に自分で傷ついている。身を切るような思いで自分がなぜ学校へ行かないかを告白している。それが悠斗と雛子にはよく分かった。だが、逃げているばかりでは解決しないのもまた事実だ。

「ゆずちゃん、よかつたら、うちの学校行ってみる？」

「ちよつと、雛子、何を……」

「おにいちゃんはちよつと黙ってて。ね、ゆずちゃん。学校ってね、そんなに悪いことばかりあるところじゃないんだよ？ わたしはおにいちゃんと出会えたし、他にも友達がいっぱい出来たし、楽しいことは自分でさがすところなの」

「しかしなあ。柚希は中学生だぞ？ どうやって学校に潜り込ませる気だよ」

「それにはわたしに秘策がありまーす」

「んー……なんか不安になるけど、とりあえず聞いてみようか」

「かほるちゃんに頼むんだよ」

「かほるちゃん……って、樟葉先生か！ なるほど、あの人なら事情を話せば話を通してくれるかもしれないな」

かほるちゃんこと樟葉かほる教諭は、仁正学園の中でもトップクラスの変わり種教師だった。変則的なことでも、事情次第では上に話を通してくれる。これを生徒たちは尊敬を込めて『かほるちゃん

マジック』と呼んでいた。

「そうだな……雛子、お前、かほるちゃんのクラスだったよな？」

「うん。だから言いだしたんだよ。どう？ 見なおした、おにいちゃん？」

「うむ。えらいぞー。なでなでしてあげよう」

「わーい！」

柚希は自分そっちのけでトントン拍子に話がまとまっていくのをただ呆然と見守っていたが「学校かぁ……」と呟くと、少しだけ頬を緩めていた。悠斗と雛子はそれを見て、きつとこの企みは成功するだろうと確信していた。

「そうと決まれば、制服は雛子の予備があるよな？ 身長も似たようなもんだし、大丈夫だろ。あとは、かほるちゃんに連絡しないと……」

……

「ふふん、おにいちゃん。実はわたしはかほるちゃんのケータイの番号知ってるんですよ」

「なに？ 本当か！ そりゃ話が早い。すぐに連絡だ！」

結果から言うと、かほるちゃんマジックの伝説は本当だった。

『不登校の中学三年生に、学校の楽しさを教えたい』という少々無理やりな理由ではあったが、無事校長の許可も下りて、三日間だけだが柚希は雛子のクラスに編入することが出来たのだ。なんでも、『仁正学園のPRにもなりますよ』という不純なものも、許可された理由の一つだそうだ。

そして初登校の日。雛子は自分の部屋に柚希を引きずり込んで、制服を着せている。当然男の悠斗は廊下に待たされるわけで、待たされる立場としては退屈なことこの上ない。

「おまたせ、おにいちゃん！ ほら、ゆずちゃん、恥ずかしがってないで前に出ない！」

「お、おにいちちゃん……柚希、変じゃない……？」

悠斗はぼかーんと口を開けて目の前の少女を見つめていた。いや、柚希なのは悠斗にも分かってる。だが、その魅力が仁正学園の制服のおかげで何割かアップしている。それだけの話なのだ。

「ふふつ。おにいちちゃん、目を丸くしてるよ？ よかったね、ゆずちゃん。おにいちちゃんのハートを鷲掴みだよ？」

「て、敵に塩を送るような真似をして、あとで後悔してもしらないよ？ ひなたん」

「……化けるもんだなあ」

悠斗は本気で柚希に見とれていた。言葉がしばらく出ないほどだったのだ。これは今日の一年C組はきつと大混乱に陥ることだろう。悠斗はそう確信していた。こんな美少女、それこそ一生に何度見られるか分からないのだから。

「あーっ！ それ、すつごく失礼な言い方だよ、おにいちちゃん！」

「いいもん。柚希は制服なしだと、どうせ魅力ないもん」

「そんなことないよ！ きつと今日学校行ったらみんなから大注目だよ！」

「そうかなあ……ひなたんが言うなら信じることにするけど」

悠斗は腕時計で時間を確認すると、雛子と柚希に声をかけた。

「そろそろ行かないと遅刻だぞ。登校初日から遅刻はイヤだろ？」

さ、行こう！」

三人揃って靴を履けるほど玄関は広くないので、順番に革靴に足を入れる。雛子は通学鞆を持っているが、柚希は手ぶらである。これはあくまでも学校見学ということで、授業を受けに行くわけではないからだ。

最後に悠斗が靴を履いて、玄関の扉を開けた。五月末の朝の爽やかな風が、三人の髪を撫でていく。いよいよ初めての、三人揃っての登校だ。柚希はしばらく下を向いて何事かを呟いていたが、やがて決意を固めたのか、顔をあげて歩き出した。その双眸には強い光が滲み、この三日間で何かをつかみ取ろうとする者の意志が感じら

れた。

「バス、使うか？」

「おにいちゃんはずぐサボリたがるからなあ。だめだよ、歩いて行かなきゃ」

「バスもあるの、ひなたん？」

「うん。駅前から学校直通のスクールバスが出てるよ。でも有料なの。それに、歩いてても大して時間変わらないし」

「それじゃあ、歩かなきゃね！ おにいちゃんもひなたんを見習わないと」

女性陣からの突っ込みをまともに食らった悠斗は、口をつぐむしかなかった。そういえば、柚希はとても賢い子だったと悠斗は想い出す。難解な算数の文章題を、さもパズルでも解くかのようにあっさりと解いてしまう姿には驚かされっぱなしだった。

道はやがて住宅街の細い道から、路線バスの通る大通りに出る。

道なりに進んでいくと、仁正学園の建つ丘が見えてくる。山一つが中高一貫校の巨大なキャンパスなのだ。バス道路から緩くて長い上り坂にさしかかると、道の両脇には桜の並木が続いている。

「ここな、春になると一斉に花が開いて、そりやすげえ綺麗なんだぜ」

「へー……、これ、全部ソメイヨシノ？」

「多分そうだよ。ヤマザクラとかは見たことない。あ、でも学園の上の方にはヤマザクラの木があるよね、おにいちゃん」

「そっぴやそうだな。あれはあれで綺麗だ」

「あ、校門が見えてきたよ、ゆずちゃん」

「え？ あのおっきな門がそうなの！？」

柚希が驚くのも無理はない。とても背の高い柱に、クラシカルな作りの鉄の門扉が組み合わされた仁正学園の校門は、実際以上に大きく荘厳に見える。そして、中等部の生徒も高等部の生徒も、みなこの門をくぐって学校へ入っていくのだ。

「さ、ゆずちゃん。第一歩だよ」

「柚希、さあ、勇気を出して！」

柚希は口を一字に結んで目を固く閉ざしていたが、目を開き、顔をあげると、飛び越えるようにして校門をくぐっていた。悠斗と雛子が拍手で迎える。柚希は顔を赤くしてふくれてみせた。

「も、もう。ただ校門をくぐっただけじゃない！ 拍手なんてしなくていいよ！ おにちゃんも、ひなたさんも！」

悠斗と雛子は一学年違う。当然、教室も別々になるわけで、雛子と柚希は旧校舎へ、悠斗は二年生の教室のある新校舎へと向かった。悠斗は内心気が気ではなかった。果たして柚希は雛子のクラスで受け入れられるのか。陰湿ないじめにあったりしないか。学校なんてどこも同じだなんて絶望したりしないだろうか。

だが、賽は投げられた。もうあとはなるようにしかない。この三日間で、柚希が何かに気づき、何かを手に入れられるかどうかは、他でもない本人次第なのだ。周りはそれを手伝うだけ。当然、悠斗もその一人であって、この場では脇役にすぎないのだ。主役はあくまでも柚希なのである。

「とは言ってもなあ……、本当に大丈夫かな、柚希」

「お？ 悠斗、どうした。なんか心配事か？」

級友の北浜一哉がまだ生徒の来ていない前の席を占領して声をかけてきた。銀縁眼鏡のこの男子生徒は、悠斗の親友を自負して憚らない。悠斗はふうつと溜息をつく、一哉にことのあらましを聞かせた。

「なるほど……不登校か。難しい問題だな」

「そうなんだよ。もしこの三日間で『学校は嫌なところじゃない』と思ったとしても、もしかしたらもとの学校へ戻ったら今までの繰り返しかもしれない……。ホント、頭が痛いよ」

「でもな、悠斗。本当に三日間この学園に通って、学校のいい所を

見つけれたら、もしかしたらその子……えーと、柚希ちゃんだっけか？ その子は自分で自分を変えることが出来るかもしれないぞ？」

「本当にそう思うか？」

「ちゃんと『見つけれたら』な」

「見つけるって、具体的には何を？」

「そうだな。陳腐なセリフだが、自分が何をしたいのか、何になりたいのか。要するに夢だな」

「お前、言ってて恥ずかしくないか？」

「なんで？ 陳腐ではあるが、恥ずべきセリフだとは思わないぞ？」

「……お前はそう言うヤツだったよな。しかし、夢かぁ。小学校の頃に聞いた夢は……。ダメだ。これは言えない」

「なんだよ、勿体ぶるな。言えよ、ほら！」

「まあなんだ、女の子によくあるアレだよ。お嫁さんってやつ」

「なるほど、その相手がお前なんだな？」

「読心術かつ！？」

「ほんと、分かりやすいな、お前は。雛子ちゃんのことだってそうだし、柚希ちゃんのことだってそうだ。優しいのは確かに美德ではあるが、度が過ぎると相手にとって残酷だぞ？」

悠斗はそんなことは分かっていると反論したかった。したかったが出来なかった。なぜなら、雛子を妹として大切に護ることを誓いながらも、心の奥底ではやはり女の子として愛してる自分に気づいてしまうからだ。

柚希だってそうだ。三年間会わないうちに、あんなに綺麗になつてるとは思いもしなかった。なにやら怪しげな技術を色々とマスターしているのが気になるころではあるが。

「今ごろは一年C組は大騒ぎだろうなあ。柚希のヤツ、外見はホントアイドル顔負けだから」

「そんなに可愛いのか？」

「まあ、従兄の俺が言うのもなんだけどな。可愛いよ。可愛いって

いうより、綺麗だな」

「中三にしてそれだけの美貌か。俺も是非お近づきになりたいもんだ」

「お前には絶対に紹介してやらん！」

一哉は悠斗の首に手を回して、ぐいぐいと引っ張ってくる。悠斗としては男とこんなに至近距離で触れあうのはご免被りたいところだが、まあ友人のすることだと半ば諦めモードである。だがやっぱりやめて欲しい悠斗であった。何しろ息が苦しい。

「まあ、冗談は程々にして、その子の覚悟次第だな。かほるちゃんの伝を使っただろうけど、お前ら結構な無茶をしてるんだぞ？だから、絶対に無駄にさせるな。これはお前の親友としての忠告だ」

ちようどその時、一哉が占領していた席の生徒がやってきた。軽くあいさつを交わして席を譲る一哉。そろそろ予鈴がなる時間である。悠斗はやはり気が気ではなかった。どんなに親友が「その子次第だ」と言ってくれても、やはり何か自分に来ることがないかを探してしまう。

結局、悠斗は柚希の『おにいちゃん』なのだと、嫌というほど自覚させられた朝だった。

第三章 — 義妹と従妹 — 1 (後書き)

いかがでしたか？ よろしければご意見ご感想などお寄せ下さい。

第三章 — 義妹と従妹 — 2 (前書き)

今日は二回の更新です。

第三章の2をお送りします。 それではどうぞ！

そのころ、一年C組の教室では、どうにも居心地の悪そうな柚希が樟葉先生から皆に紹介されていた。樟葉かほる。通称『かほるちゃん』。ゆるくパーマのかかった髪以外は、どう見ても中学生か小学校高学年にしか見えない外見と、幼い服装センス。それが一年C組の担任にして、『かほるちゃんマジック』の使い手である。

「はい。ちゅうもく。今日から三日間、みなさんのクラスメイトになります、露木柚希さんです！ はい、拍手〜」

その瞬間、割れんばかりの拍手と歓声が一年C組の教室に響き渡った。居心地悪そうにしていた柚希は、そのあまりの迫力に思わずびくりと身体を硬くしてしまうほどだった。固かった柚希の表情が、だんだんと解れていく。

「はい、露木さんがびっくりするぐらいのいい拍手でしたね〜。続いて、露木さんに自己紹介をしていただきます。みなさん、ちゅうもく〜」

「え……、あ、あの……」

「大丈夫ですよ。正直に自分の事を話してください。みんな受け止めてくれますよ」

樟葉先生が柚希の耳元で小さく囁く。だが、柚希は不安だった。自分の事を正直に話す。それがどれほど恐ろしい事か。いじめにあつて、不登校になった。それだけの話だが、話してしまえばもしかしたらみんなの自分を見る目が変わってしまうかもしれない。それは、怖い。

一年C組の生徒全員が、柚希の言葉を待つてじつと見つめている。陰口を叩くものも、ひそひそ話をする者もない。もしかしたら、これなら自分の話をして受け入れてもらえるのかもしれない。柚希は固く閉じていた瞳を開くと。きつと顔を上げた。

「あ、あのっ、露木柚希です。露木雛子さんとは、戸籍上では従姉

妹ということになります。二年生の露木悠斗も柚希の従兄です。柚希は……中学校でいじめに遭って……学校に行けなくなりました。正直、学校は怖いです。あの……こんな柚希ですが、皆さん、どうかよろしく願いますっ！」

途切れ途切れにそこまでいうと、柚希は思いきり頭を下げた。自分の一番いいたくないことを言ってしまった。これでもしかしたら、ここでもいじめの対象になってしまいかもしれない。そう思うと自然に涙が滲んでくる。怖さで膝が震えてくる。

だが、柚希を待っていたのは、再びの大拍手だった。きょとんとした顔で教室中中を見まわす柚希に向かって、全ての生徒が大きな拍手を送っていた。その中には笑顔の雛子もいた。隣では担任の樟葉先生も拍手をしている。

（ああ、柚希、ここにいてもいいのかもしれない……）

柚希は拍手の渦の中で、自分の表情がだんだんと笑顔になっていくのを感じていた。自分はここで三日間を過ごす。その間に、もしかしたら大事な何かを見つけ出すことが出来るのかもしれない。そう思うと、柚希はたった三日の高校生活を、思いきり楽しもうと改めて思うのだった。

「はい、露木さんの自己紹介でした。このクラスには露木さんとおなじようなことで悩んだことがある人も多いかと思います。みなさん、露木さんが困っていたらなんでも手伝ってあげてくださいね」

『は——い！』

「それじゃあ、露木さんは席に着いてください。空いてる席は、ごめんなさい、教室の後しか空いてないの」

「大丈夫です。柚希、目はいいですから」

「じゃあ、そこで決まりですね。はい、ではみなさん！ しつかり勉強に励むように！ 朝のホームルームは以上で終わりです」
クラス委員が号令をかける。

「起立！ 礼！ 着席！」

一旦着席したあと、何人かの生徒が早速柚希の席を取り囲む。

「露木さんって、雛子の従妹なんだって？」

「え、あ、……はい」

「そっか。困ったことがあったらなんでも言って！ 力になるから！ 私、南原智恵。みんなはちいちゃんって呼ぶわ。よろしくね！」

「しっかし可愛いよなあ。是非お近づきになりたい」

「あー、なんかやらしー」

「露木さん、こんなヤツは放っておいていいからね」

「ちょ！ それはないだろ！」

自分の周りで繰り広げられる会話に、柚希は驚きながらも大きな安心感を感じていた。ここの生徒は自分が行っていた中学校の生徒たちとは違う。なぜ違うのかはよく分からない。でも、言葉の端々に現れる気遣いや優しさは、中学のクラスメイトたちからは感じられない種類のものだった。

「もう、ゆずちゃんがびっくりしてるでしょ？ みんなもう少し気を遣ってあげて」

雛子が腰に手を当てて皆に注意する。集まっていたみんなも「そうだな」「ちよつと浮かれすぎた」と反省の言葉を口にする。でも、それで距離が開く感じはしない。柚希にとってはとても不思議な光景だった。

「ひなたん。柚希、困ってなんかないよ？ みんな……優しいし」

「ゆずちゃんがそう言うならいいんだけど……、男子連中は確実にいやらしい目で見てるわね。気をつけてね、ゆずちゃん」

柚希は苦笑いを浮かべながら頷いてみせた。確かに自分の容姿だけを目当てに近づこうとしてくる生徒もいるかもしれない。でも、さっきの男子生徒からはそんな感じは受けなかった。柚希には不思議でならなかった。たった一つ歳が違うだけで、こんなにも余裕が出来るものなのだろうか。

「とにかく、仁正学園一年C組によっこそ！ わたしたちはみんなゆずちゃんを歓迎するよ！」

柚希は学校見学という扱いだったので、授業はただ聞いているだけだった。だが、隣の席の生徒が教科書をみせてくれたので、いまこのクラスがどの辺りの勉強をしているのかは知る事が出来た。

引き籠もっている間も、柚希は自分で勉強を続けていたので、実は中学レベルの勉強はすっかり終わってしまっていて、今は自主的に高校レベルの勉強をしている。その柚希にとって、高校一年の初めのカリキュラムは、さほど難しいものではなかった。

（でも、仁正学園ってやっぱり授業のレベルは高いなあ。毎年有名大学にたくさん合格者を出すだけはあるわ）

仁正学園は中高一貫の進学校である。高等部から受験で入ってくる生徒もそうだが、中等部からエスカレーターで上がってくる生徒たちの学力も相当に高い。卒業生の進学先は有名国公立大学や私学が中心で、進学率はほぼ一〇〇パーセントだ。

今は英語の時間で、長文の読解をやっている。普段からネットで英語のサイトを毎日のように読んでいる柚希にとって、高校レベルの英語を読むことは容易いことだった。

「えーと、それじゃあ、この部分を和訳出来る者！ 誰かいないか？」

教師の声にぱらぱらと手が上がる。柚希は思い切って手を上げた。「お？ 君は確か……学校見学の中学生だね？ この問題が分かるのかな？」

「はい！」

「頼もしいな。じゃあ、和訳してください」

「はいっ！」彼は今や Yankees の四番打者になりました。彼の次の夢は、彼が時折言うように、ワールドシリーズで毎年優勝することです。そして彼の最後のゴールは何でしょう？彼は野球で繋がっている二つの国の間の大使として活動したいと言っています」で

す」

「はい、正解。中学生なのによく読めたね。自分で勉強してるのかな？」

「はい……。あの、柚希は引き籠もってたから、自分で……」

「うん、学校に行けなくてもちゃんと勉強してるあたりは本当にえらいぞ。ほら、お前ら！ 一つ年下の中学生がこんな完璧な答えを出したんだ。お前らもしっかり勉強しないと、すぐ追い抜かれるぞ！」

教師の言葉に教室中が笑いに包まれる。こんなことも以前通っていた中学では有り得ない事だった。教師はただ淡々と授業を進め、生徒はそれぞれ勝手なことをしている。おしゃべりに興じる者、別の教科の勉強をしてる者、マンガを読んでいる者、コンビニで買ってきたお握りを食べるもの……。

だが、仁正学園のこの雰囲気はどうだろう。同じ『学校』とはとても思えない空気が、この教室を、この学園を支配している。柚希は心底驚いていた。これが本当に学校なのだろうか？ いや、もしかしたらこれが本当の学校というもののなのかもしれない。

和訳を終えて着席すると、隣の席の男子生徒が親指を立てて「よくやった！」と合図してくれていた。柚希も同じようにそれに応える。

「さて、じゃあ次に進むぞ。次の段落を音読してもらおう！ 出席番号一四番はだれだー？」

「はい！」

「じゃあ、次の段落までを音読。他の者も自分が読んできると思っているように」

授業は滞りなく、しかし時にユーモアを交えて進んでいく。面白いように内容が頭に入ってくる。これが、本当の授業というもののだろう。柚希はこれを知らない自分の本来のクラスメイトたちを気の毒に思っていた。もっとも、そんなことを言ったところであるクラスメイトたちが変わるとはとても思えなかったのだが。

やがて、四時間目の終了のチャイムがスピーカーから鳴り響き、生徒たちは昼休みモードに入ってしまった。柚希の机の周りは相変わらず人だかりだ。それも男子ばかりではなく、女子生徒も同じくらの割合で混じっていた。

「ね、露木さん。お昼はお弁当？」

南原智恵と名乗った、髪をポニーテールに結い、眼鏡をかけたそばかす顔の女子生徒が、柚希に尋ねる。

「い、いえ……、柚希、学食があるって聞いていたので、そっちに行こうかと」

「そっかー。雛子も学食だよな？」

「ん……。そうだよ。ちいちゃん。ゆずちゃんも学食行こうか」

「は、はい！」

「俺たちも一緒に行つていいかな？」

「ゆずちゃんに変なことしないでって約束するならね」

その時、教室の外から雛子も柚希も良く知った男の声が聞こえてきた。

「おい、雛子、柚希！ 今から学食行くけど、一緒に行くか？」

「あ、おにいちゃん。ゆずちゃん、どうする？」

「うーん……。みなさんのお誘いも嬉しいから……今日は皆さんと！」

「そっか。じゃあ、ちよつとおにいちゃんにそれでいいか聞いてくるね！」

雛子は教室の後の扉の外に立っていた悠斗に事情を説明した。柚希はそれをちよつと心配げにみている。やがて、悠斗が頷くのが柚希にもはっきりと見えた。雛子がぱたぱたと小走りに戻ってくる。

「おにいちゃん、みんな一緒にOKだって！ よかったね、ゆずちゃん！」

結局、悠斗は一年生十数人をぞろぞろ連れて学食へ向かうことになってしまった。本当は露木家の面々だけで静かに昼食をとるつもりだったのに、である。だが、柚希のたつての希望だ。これを無下に断るわけには行かないだろう。悠斗は柚希がちょっとだけ変わりつつあるのを敏感に感じ取っていた。

学食は新館の一階にある。かなり広いが、全校生徒を収容するほどには広くはない。そこで、生徒の半分くらいは弁当を家から持ってきたり、通学途中でコンビニ弁当を買ったりして昼食を確保していた。

「しかし、この人数で行って座れるもんかね」

「だいじょうぶだよ、おにちゃん。生徒の半分はお弁当持参なんだから」

「雛子は気楽でいいよなあ」

「あ、あのー。お兄さん？ 本当に私たちについて来ちゃってよかったんでしょうか……」

一人の女子生徒が悠斗に申し訳なさそうに問いかける。

「構わないよ。それにこれは、柚希が望んだことなんだ。だったら叶えてやるのが筋つてもものだろ？」

「は、はあ。お兄さん、結構こころ広いんですね」

「おい、悠斗。お前、こころが広いなんて言われたの、生まれて初めてじゃないか？」

一哉がニヤニヤ笑いながら混ぜ返す。悠斗は仏頂面を作りながら、その自称親友の言葉を聞き流していた。やがて廊下の向こうに学食の入り口が見えてくる。どうやらさほど混雑はしていないようだった。

「お、ラッキー。これなら楽に座れるな。とりあえず席を先に取るうぜ」

一哉が手近に空いていた席に着く。一年生たちはそれぞれ持ってきていた荷物やハンカチなどを机や椅子に置いて席を確保していた。「じゃあ、順番に食券買いに行くか。俺はあとでいいよ。悠斗は雛

子ちゃんと柚希ちゃんを案内してやれ」

「ああ、んじゃ、そうさせてもらうよ。柚希、ここは食券制なんだ。食べたいメニューが決まったら食券を買って、そのカウンターに出す。するとあら不思議！ あつという間に昼飯の登場、ってわけだ」

「おにいちゃん、それ全然不思議でもないし面白くないから。柚希だって食券の買い方くらい知ってるもん」

ぷうつとふくれっ面を作ってみせる柚希に、悠斗は思わず苦笑いしてしまった。ふくれっ面をしていても、全然可愛さに影響がないのだ。むしろこれはこれで萌えるというものだった。

「んで、女の子だったらＢランチあたりがお勧めかな。Ａランチはちよつとポリュームがありすぎて多分もてあますと思う」

「ふんふん。三五〇円かぁ。お財布にも優しいのね、学食って」

「まあ、学校がかなりの部分持つてくれてるようなもんだからな。さて、俺はＡランチつと」

悠斗は五〇〇円玉を券売機に放り込むと、Ａランチのボタンを押した。軽い唸りをたてて、機会が食券を吐き出す。

「ゆずちゃんはＢランチ？ それじゃあ、わたしもそうしようかな」
柚希も五百円玉を券売機に投入すると、Ｂランチと書かれたボタンに手を伸ばした。細い指先が透明なプラスチックのボタンを押し下げる。また券売機が小さなうなり声を上げて食券を吐き出した。

「同じもの食べるんだつたら同時に二枚買えば良かったのに」

「あ、そうだった！ そんな機能もあつたんだよね。わたしすっかり忘れてたよ」

雛子はきつちり三五〇円を券売機に入れると、Ｂランチのボタンに指を伸ばした。だが――

「あ、売り切れだぁ」

「え……、柚希が最後だったの？ ……これ、ひなたんにあげる」

「いいよぉ。わたしは別の食べるから！ 玉子丼も美味しいんだよ？ ぼちつと」

雛子は玉子丼のボタンを押した。五〇円玉がおつりとして戻ってくる。柚希はそれを済まなさそうに見つめていた。そんな柚希に、悠斗が真面目ぶった言葉をかける。

「柚希、学食はな、戦場なんだ」

「え？　せ、戦場？」

「そう、戦場だ。先を争って人気メニューを奪い合う、血で血を洗う情け無用の戦場だ。だから、遠慮なんかしてたら飯が食えなくなる」

「そっだよ、ゆずちゃん。だから、遠慮なんかすることないの。自分がついてたつてだけで、他の人に遠慮なんかいらないんだよ」

柚希は手の中の食券を見つめて小さく「学食は戦場」と呟いた。次の瞬間には、柚希の表情は晴れ晴れとしたものになり、右手に勝ち取った食券を掲げ、定食のカウンターの行列へと突進していくのだった。

第三章 — 義妹と従妹 — 2 (後書き)

いかがでしたか？ もしよろしければご意見ご感想などお寄せ下さい。

第三章 — 義妹と従妹 — 3 (前書き)

第三章の3をお送りします。
それではどうぞ！

午後の授業も終わりに近づき、そろそろ放課後のことを考えてソワソワする生徒が出始める頃、柚希は校庭のトラック近くにおいてあるベンチに一人座っていた。本日最後の授業は体育。それも持久走だ。体操服までは用意していなかった柚希は、それでも誰かに借りてでも走ると言い張ったが、体育教師の「今日はしっかり見学して行きなさい」という一言で渋々引き下がった。

「ほらー、もつと元気出せー！ 気合いが足りないぞ気合いが！」

「うへえ、気合いだけで校庭何周も出来るかつての」

「柚希たん、見てるだけでちと羨ましいかも」

「バカ、あの子は一緒に走りたいんだよ。見ただろ、さつき先生に食ってかかったの」

確かにしょんぼりと座っている柚希は、一緒に走りたかったというオーラを全身から発していた。

「こんなことなら体操服も借りておくんだっただなあ。でもひなたん、柚希より胸おつきいから……うつつ。多分胸元が寂しいことに……」

制服のブラウスも若干胸元に余裕がある。雛子の方はというと、胸のボタンが千切れかねないほど元気いっぱいに育っている。なんという残酷な現実。天は柚希に二物を与えなかったというわけだ。

「でも、この制服、よく見るといい作りしてるんだなあ。デザインも可愛いし。ブレザーだけど、ちよつと変わった形だし。こんな制服を着て、毎日学校に来られたら、柚希もかわれるかなあ」

「それは君次第だな。制服は所詮人間の外側を飾るだけのものにすぎない。問題なのは、それを着る事で内面まで変われるかどうかだ」
持久走の監視をしながら柚希の雑談に付き合っていた体育教師が、そのよく日に焼けた顔を柚希に向けながら言った。

「君は中学でいじめに遭ったと聞いている。でも、それは果たして相手ばかりが悪かったのかな？ たぶん、君には答えが分かっている

るだろうから敢えて言いはいしない。でも、その辺りを考えるだけでも、君は自分自身を変えることが出来る。私はそう思うよ。」

ああ、この先生も自分と会って一日しか経ってないのに、こんなに深いところまで自分を見抜いている。大人なんてみんな自分のことしか考えてないとかばかり思っていた。あの中学の先生たち、そして、自分がいじめられているのを見て見ぬふりした自分の両親……。まあ、君があと二日で一体何を掴めるかは、私には正直分からない。でも、三日間の経験っていうのは、案外大きなものだと思おうよ。おっと、そろそろ時間だな。おい！ ラスト一周だ！ ダツシユダツシユ！」

「柚希もまだよく分からないんです。でも、なんか今日一日でボンヤリとだけど、その『掴まなきゃいけないもの』が見えてきたような気がします」

「そうか。それはいいことだな。さーて、ビリは罰としてもう一周させるぞー！」

『ええ~~~~っ!?!』

息も絶え絶えだった生徒たちが、疲れ切った足にむち打って再び加速しはじめる。柚希はそれを見て根性という言葉の意味を少しだけ別の意味で考えるようになっていた。

「ひい~~~~……、つかれた~~~~……。ゆずちゃん、退屈じゃなかった？」

「うん。先生が話し相手になってくれてたし、大丈夫だったよ」

「先生だけずるいよなあ。柚希ちゃんとあんなに馴れ馴れしくさあ」

「そうだそうだ。職権乱用だぞー！」

男子生徒たちからブーイングが浴びせられると、体育教師はこめかみに血管を浮かせながら鬼の形相で言った。

「今文句を言った奴ら！ 放課後体育教室にこい！ 誰だかは分かっているからな！ 逃げたら……分かってるだろうな？」

男子生徒たちが震え上がる。体育教官室への呼び出しというのは、いつてみれば軍隊で新兵が鬼軍曹に呼び出されるようなものだ。だ

が、その男子生徒たちの様子をみて、柚希は思わず吹き出していた。
「あー、柚希たん笑ってる！ ホント怖いんだって、体育教官室って！」

「そうだぞ、普通に職員室に呼ばれるのとはわけが違っただから！」
「でも、せっかく柚希が退屈しないように気を配ってくださった先生にブーイングしたのはみなさんです！ 頑張ってきてくださいね！」

『そんなぁ……』

体育教師はニヤニヤと笑いながら生徒たちのやりとりを見ていたが、最後の一言を口にして授業を締めくくった。

「よし！ 今日の授業はこれで終わり！ すぐ教室に戻れ！」

「柚希のヤツ、ちゃんとクラスに溶け込めてるかなあ」

頬杖をつきながら悠斗が呟く。耳ざとく聞きつけた一哉が、悠斗の肩に手を回し、何でも分かっていますよというようにうんうんと頷いてみせた。

「そうだよな。『おにいちゃん』としては放っておけないよなあ。わかる、わかるぞ、その気持ち。だから……」

「『俺に柚希を紹介しろ』ってのはナシな」

「なんで言いたいことが分かったんだ？」

「そんなのは自分の胸に聞け」

肩に回していた手を解くと、一哉は少し真剣な口調になって悠斗に問いかけた。

「悠斗は柚希ちゃんが信用できないのか？」

「でん！」

「なぜそんなにきつぱりと！」

「説明は……ちょっと出来ない。家族の問題でな。ちょっとあいつは常軌を逸してる部分があるんだ。だから、信じたいけど信用はで

きん！」

一哉は深く溜息をつく、親友に向かって言った。

「それを柚希ちゃんが聞いたら、あの子泣くぞ？」

「その前にこっちが泣きたいよ……」

「ほんと、何があつたんだ？」

「まあ、そのうち話せるようになったら話すさ」

一哉はまた前の席の生徒がいないことをいいことに席を占領し、悠斗と顔をつきあわせ、真剣な面持ちで口を開いた。

「んで、だ。お前としては柚希ちゃんと雛子ちゃん。どっちを選ぶつもりなんだ？」

「な、なにを突然……」

「お前は今、自分を偽ってるように俺には見える。ふたりのよき『おにいちゃん』でなければならぬ、と。でも、本当にそれでいいのか？」

図星だった。悠斗は雛子に惹かれると同時に、何だかんだ言いつつも柚希を放つてはおけないのだ。だが、それは果たして男と女の間に感情なのだろうか？ 悠斗にはそれが分からなかった。

「そんなこと……いきなり言われても……」

「あの二人はその答えをきつと待つてゐるぞ？ いつまでも待たせてると、他の誰かにさらわれちまうぞ？」

「他のヤツに……？ まさかお前……」

一哉は両の手のひらを悠斗に向けて『違う違う』と合図した。表情からも一哉がそんなことを考えていないことは一目瞭然だ。

「俺はそんなつもりはない。もしもそんな気があるなら、俺はきちりお前に話をつけるさ。そうじゃなくて、雛子ちゃんは実は入学以来けっこうな人気者だし、柚希ちゃんはあの外見だ。一発でコロリと惚れる奴がいても全く不思議じゃない。もし、そう言う奴らが『おにいさん、雛子さんをください』とか『柚希さんをください』とか言い出したとき、お前は平気でいられるのか？ ってことだ」「おれはあいつらの父さんか……」

「親じゃなくてもだ。お前、そういうこと今まで考えてなかっただろ」

またも凶星をつかれた悠斗は、髪をがしと掻きむしり、両手で自分の机を思いきり叩いた。その音は教室中に響き渡り、帰りのホームルームが始まるのを待っていた生徒たちも何事かと悠斗たちの方をいぶかしげにみつめる。

自分の行動がはからずも他の生徒たちの注目をひいてしまったことに気づいた悠斗は、じろりと周囲を見まわした。興味本位で悠斗たちを見ていた生徒たちは、首をすくめて目を逸らす。

自分たちからとりあえず周囲の視線が外れたことを確認した悠斗は、小声で一哉に囁いた。

「俺だって、俺だって雛子と堂々と彼氏彼女の間柄になりたかったさ。でもな、それより先に家族になっちまったんだよ。柚希だってそうさ。あいつとは血の繋がった親戚だ。いつてみりや、あいつも俺の妹みたいなもんなんだ。あいつが俺に昔からなついてくれてたのは嬉しかったさ。でもな、家族にそう言う感情をもっちゃいけないのが世間の常識ってやつだろ？それに俺は誓ったんだ。兄として雛子を何からも護り抜くって」

悠斗の複雑な気持ちを少しは察したのか、一哉はそれ以上にも言おうとはしなかった。悠斗は自問していた。もし、雛子や柚希が誰かと付き合いたいと言ったとき、自分はそれを笑って許せるだろうかと。

（そんなこと、出来るわけがないじゃないか）

相手が誰だろうと、そんなこと認められるわけがない。雛子も柚希も、悠斗にとっては特別な存在なのだ。でも、だからこそ、もしそうなったときに自分の答えがきっちり出せるように、常に考えてえおかねばならない。

担任の教師が教室の前の扉からひょっこり顔を出す。ようやくホームルームの時間だ。悠斗にとっては一人で考え事の出来る数少ない時間のひとつだった。担任の話を上の空で聞き流しながら、悠斗

は自分がいったいどうすべきなのかを考え続けた。

ホームルームが終わった後も、柚希と一緒に下校しようとか、どこかに遊びに行こうとか引つ張りだだった。それを「ゆずちゃん」はまっすぐ家に帰ります！」の一言で収めてしまったのが雛子である。ふわふわした印象に似合わず、なんとなく『従姉』としての自覚も芽生えつつあるようだ。

そして悠斗たちとの待ち合わせの場所である校門で、雛子と柚希はもう三〇分も待っていた。

「おそいね、おにいちゃん。何かあったのかな」

「ん……。携帯にもメール来てないし……。ゆずちゃんの方は？」
「柚希の方にも来てないよ」

「まさか、体育教官室に呼ばれてるとか！」

「うー……。そんなに怖いのか？ 体育教官室って」

「男子の話によるとそういうことになってるね」

その時、雛子も柚希も聞き覚えのある声が背後から投げかけられた。

「あれ、雛子ちゃん、それに柚希ちゃんも。どうしたの？ こんな所で」

「あ、北浜さん……。おにいちゃんと待ち合わせなんですけど、まだ来なくて……」

「……」

一哉は黙ったまま深刻そうな顔をしている。もしか、悠斗になにかあったのでは？ 雛子と柚希のところに暗雲が立ちこめる。

「悠斗のヤツ、他のクラスのちよつとタチの悪い生徒に呼び出されてたんだ。そんなに険悪な雰囲気じゃないから放っておいたんだけど……。もしかしたらこりゃヤバイかもしれないな」

「ヤバイって……。おにいちゃんが？ どういうことですか、北浜さ

ん！」

一哉は話すのをしばらくためらったあと、ホームルームの前に悠斗とした会話の内容を二人に伝えた。

「もしかしたら、その時が来たのかもしれないな」

「その時って……、おにいちやんが柚希たちを誰かに渡すかどうか決める時って事ですか!？」

「そうだ。二人とも、よく聞いてくれ。悠斗は君たち二人を特別な相手だと思ってる。でも、それ以前に家族として大事に思ってるんだ。いわば、この二つの感情の板挟みになってる。その悠斗が、いま多分その自分の心と戦ってるんだ。どんな結果が待っていたとしても、悠斗を責めないでやってくれ。これは、あいつの親友としての俺からの頼みだ」

そう言うのと、一哉は二人に深く頭を垂れた。上級生に突然そんなことをされた二人は、慌てて顔を上げるように言う。だが、一哉は頭を下げたまま動こうとしない。

「北浜さん、わかりました。わかりましたから頭を上げてください」

雛子が静かな声で一哉にささやきかける。それはまるで、年齢差が逆転したような光景だった。雛子は続けた。

「おにいちやんがわたしたちを選ぶかどうかは、それはおにいちやんが決めることです。それに、家族として大事にされてるっていうだけでも、わたしはとっても幸せなんです。たぶん、ゆずちゃんもそうだよな?」

突然話を振られた柚希は二人の顔を交互に見ると、口をきゅつと閉じてコクリと頷いた。

「柚希はおにいちやんが大好きだけど、でも、おにいちやんを束縛する権利は柚希たちにはないよね。この前のことでよく分かった」

「ゆずちゃんは、ちよつと道を間違っちゃったけど、それは単におにいちやんが好きだから、だよな?」

「うん……。柚希はね、やっぱりおにいちやんが大好き。でも、家族として大事にしてくれてるおにいちやんのことも大好きなの」

「じゃあ、ゆずちゃんとわたしは同じだね。北浜さん。わたしたち、ちよつとおにいちちゃんを探してきます」

「探すつて……この広い学園を二人で？」

「ええ。あ、一緒に来るつていうのはダメです。これは露木家の問題ですから」

先に釘を刺された一哉は、ただただ肩をすくめるしかなかった。

「分かったよ。家族の問題に首を突っ込むなつて言われりゃ、そりゃ引っ込むしかないよな」

「ご理解感謝します。さ、行こう、ゆずちゃん」

「う、うん。じゃあ、ごめんなさい、き、北浜さん……」

先を歩く雛子に、柚希は小走りに駆け寄つた。あんな風に啖呵を切つて本当に大丈夫なのかと言いたげに、柚希は雛子を見つめる。

「わたしね、おにいちちゃんのいる場所、だいたい見当がついてるんだ」

「え？ そうなの？ どうして、ひなたん!？」

「こういう時にはね、人目につかないところでお話をするものでしよう？ わたしとおにいちちゃんが初めてちゃんと話をした場所。多分、あそこにおにいちちゃんはいるはず」

「どうして分かるの？ 人目につかないところだったら、こんなに広い学園なんだもん、他にもあるでしょ？」

「大事な話をするところ、だからかな……」

そう呟くと、雛子はふと自分の唇に指を軽く当てた。それが何を意味するのか、柚希にも何となく察せられるのだった。

「こんな裏の方にはいつていくの？ ひなたん、本当に人目につかないよ？」

「うん。だから大事な話にはもつてこいでしょ？」

体育館の脇の狭い通路を歩いて行くと、男の叫び声と、繰り返しかが行われている。自然に早くなる歩み。あと少し、あと少しだ。あの角を曲がれば――

「クソッ！　こんだけ殴らせてもらったら少しは気が晴れた！　分かったよ、お前の従妹のことは諦める！　まったく、なんてヤツだ……。あつ」

角を曲がる寸前、その角の向こうから髪を金色に染めた男子生徒が飛びだしてきた。危うく雛子と正面衝突するところだ。男子生徒はばつの悪そうな表情をみせると、そのまま雛子たちがいまきた道を逆方向へずんずん歩いて行ってしまった。

「ふん、この程度耐えきれないでなにが『おにいちゃん』……だ……」

『おにいちゃん！』

雛子と柚希は同時に駆けだしていた。体育館の壁に力なく寄りかかる悠斗。その顔は殴られて腫れ上がっていた。顔だけではない。おそらくは制服の下も同様だろう。

「おにいちゃん、何でこんな……」

「ん……雛子か。ごめんな、ちょっと遅刻しちゃったな」

「そんなことはいいから！　ゆずちゃん、おにいちゃんを保健室に運ぶの手伝って！」

「柚希、悪い虫はおにいちゃんがきつちり払いのけておいたからな。明日も安心して学校にくるんだぞ」

「わかった、わかったから喋らないで。柚希のせいで、おにいちゃんが、おにいちゃんが……」

「それは違うぞ、柚希。これは俺が選んだことだ。思いきり殴らせてやるから柚希を諦めろって言ってやったら、本当に殴られた。だから倒れてやるわけにはいかなかったんだ。おれは柚希のおにいちゃんだからな。家族は全力で護るもんだ」

両脇を雛子と柚希に抱えられながら、二週間前に雛子と最初の誓いをした大事な場所を歩みさる。悠斗はこの大事な場所で、こんどは家族を護るという誓いを果たしたのだった。

第三章 — 義妹と従妹 — 3 (後書き)

いかがでしたか？ もしよろしければご意見ご感想などお寄せ下さい。

第三章 — 義妹と従妹 — 4 (前書き)

第三章の4をお送りします。
それではどうぞ！

あつという間の三日間が過ぎた。あの体育館裏での事件のあと、保健室に運び込まれた悠斗は、単なる打ち身だと言われて湿布をぺたぺた貼られて家に帰されて、お咎めも何もなかった。それも悠斗が「これは家族の問題ですから。学校には一切迷惑をかけません」と強引に言い張ったからだ。保健の先生も最後には折れて「先生方には内緒にしとくから」ということで一件落着である。

柚希といえば、英語以外にも数学や国語などの教科も高校レベルの授業について行けることが発覚して、「いつそのまま本当に編入しちゃえば？」などと冗談交じりに言われていた。柚希は勉強が嫌いで学校に行けなくなっただのではない。ただ、陰湿ないじめに耐えきれなかっただけなのだ。

そして、その陰湿ないじめに対抗する力を、この三日間でつかみ取れたかもしれない。柚希はそう思っていた。それは一年C組の生徒たちの優しさと、それを指導している先生たち、特に担任の樟葉先生のおかげだと。

三日目のホームルームが終わったあと、教室をあとにしようとする樟葉先生を捕まえて、柚希はこう宣言した。

「柚希、樟葉先生みたいな先生になりたいです！ いきなりそんな風になれるなんて思ってたんですけど、いつか必ず！」

唐突な柚希の宣言に樟葉先生はいつも糸みたいに細い目を、どنگりみたいにくくして驚いていた。だが、すぐにいつもの柔和な笑顔に戻ると、柚希に向かって先生として最後になるかもしれない言葉くれた。

「ありがとう、露木さん。私みたいに、っていうのはあまりお勧めできませんけど、先生になるっていう目標が出来たなら、それに向かつて何をしなきゃならないかは決まってきますね。まずは学校へ戻ることに。そして、いじめなんか跳ね返すくらいに強くなるこ

と。そして、もしよかったら来年この学園にいらっしやい。みんなきつと歓迎してくれます」

「はい……。柚希も同じ事考えてました。来年必ず、柚希は仁正学園の生徒になります！」

「よろしい。それじゃあ、気をつけて帰ってね。来年会えることを待ってます」

「樟葉先生……。ありがとうございました！」

深々と頭を下げた柚希の肩に軽く触れたあと、樟葉先生はきびすを返し、廊下を職員室の方へと歩いていった。足音が少しずつ小さくなり、やがてそれは他の生徒たちの足音と紛れて聞こえなくなってしまう。足音が聞こえなくなるまで、柚希は頭を下げ続けていた。この三日間の感謝を込めて、深く。

「ご挨拶はすんだ、ゆずちゃん？」

「ひなたん……。見てたの？」

「うん。悪いかなどは思ったけど、声かけられなくて」

「別に構わないよ。見られて恥ずかしいものじゃないもん」

「ゆずちゃん、見つけたんだね、大切なこと」

「うん。柚希ね、絶対に樟葉先生みたいな先生になるの。そして、いつかこの仁正学園で教えるんだ」

「もしかしたら、樟葉先生の同僚になれるかもしれないね」

「そうね。柚希が先生になるまで、やめないでいて欲しいな」

樟葉先生が姿を消した廊下を見つめ続けながら、柚希は呟いた。そして祈るのだった。結婚しても、仕事は辞めないで、仁正学園にいてくださいと。自分勝手な願い事だと言うことは柚希も重々承知だ。

だが、今の柚希を支えているのはその願い。もちろん、教師として仁正学園に来られる保証もなければ、それまで樟葉先生が現役で教師をしている保証もない。でも、その未来を想像するだけで、柚希は心躍るのだった。

「さ、ゆずちゃん。おにいちちゃんが待ってるよ。校門にいこう！」

「うん！　いこう、ひなたん！」

いつの間にかすっかり従姉妹らしくなった二人の姿がそこにあった。もちろん、内心では「おにいちゃん譲らない」と二人とも思っているのだが、それとこれとはまた別のお話だ。

昇降口で上履きから革靴に履き替える。柚希は上履きを持ってきた手提げ袋にしまった。もう今年、この学園に生徒として来ることはない。だから、上履きももう必要ない。

自分の下駄箱にしていた「露木（柚）」の名札を外す。その瞬間になって、柚希はもうこの学園とはお別れなのだということを今更ながら実感した。涙が止めどもなくあふれ出してくる。こらえても、こらえても。

「ゆずちゃん、はい、ハンカチ」

「ぐすつ、ひなたん……ありがとう……」

でも、お別れなのはきつと一年間もない。自分は必ず生徒としてこの学園に戻ってくる。きっと、中学の先生たちは不登校だったことを理由に「そんなレベルの高い学校は無理だ」と言うに違いないだが、自分はずからこの学園に戻ってくるんだ。だから、いまはしばしのお別れ。三日間のクラスメイトたちにも、しばしのお別れ。一年後には、必ず後輩として再会するのだから。

今日の夕食の当番は雛子だった。雛子が当番の時は、決まって柚希も手伝うことになっている。あの『死のチャーハン』事件以来、柚希は一人で料理をさせてもらえないのだ。まあ当然といえば当然かもしれない。また同じ事をされては、食べさせられる方としてはたまったものではないのだから。

献立は「出来るまで内緒」とのこと、悠斗は教えてもらえなかった。だが、何をしているのか、食材は何を使っているのか、匂いはどうかなど、色々な要素から献立の予想はつく。悠斗は今日の献

立を『鶏の唐揚げ』と予想していた。

しばらくすると、キッチンから油で何かを揚げる音が聞こえはじめた。

（予想通り。となると、どんな味が気になるな）

露木家の本家は北海道にある。北海道にはザンギと呼ばれる独特の鶏の唐揚げがあり、各家庭ごとにそれぞれの味付けがあるのだ。さて、今回はどんな唐揚げになるのか。露木家式にザンギなのか、それとも旧姓櫻井家風の唐揚げなのか。

「ま、とりあえず気楽に待たせてもらうか！」

ソファーにふんぞり返り、テレビのニュース番組を見る。よく意味も分らないが、総理大臣がのりくらりと野党の追及をかわしてる姿が何度も映し出され、政権の支持率が右肩下がりで落ち続けているとがなり立てている。この国はアメリカとの戦争に負けてから、驚異的な経済成長をして世界第二位の経済大国になったそうだが、今の体たらくではとても悠斗には信じられなかった。

テレビにも飽きて別の番組に変えようとしたその瞬間、家の電話が鳴った。こちらに電話をしてくるとなると、両親か、それとも親戚か、そのくらいしか悠斗には心当たりがない。番号通知に表示されている番号は見覚えのない数字が並んでいた。間違い電話だろうか、一瞬取るのをためらう。その一瞬のうちに、電話が自動的に留守電モードに切り替わった。

「もしもしっ！ 悠斗君！ 柚希！ いないのっ！？」

それは紛れもなく叔母の声だった。慌て方が尋常ではない。悠斗は慌てて受話器を取った。

「おばさん、俺です。悠斗です。どうしたんですか？」

「あの人が、あの人が！」

「あの人が？ もしかして、叔父さん！？」

「そう、あの人が、さっき急に倒れて……。今病院の電話を借りて電話してるの。携帯も持ってでなかったから。柚希はいるの？」

「今、飯の支度してます。呼びますか？」

「うつつ……。お、おねがいつ」

「柚希！ 大変だ！ 叔父さんが倒れた！」

柚希はその悠斗の言葉に一瞬身体を硬くしたが、無視するように料理を続けた。悠斗は受話器を電話機の横に置き、キッチンへと小走りに向かう。

「聞こえてるだろ、柚希！ お前の父さんが倒れたんだぞ！」

「……………」

「柚希！」

「……知らない」

「知らないって、お前……………」

悠斗には柚希の身体が心なしに震えているように見えた。だが、その背中からは絶対的な拒絶のオーラが立ち上っていた。

「あんなヤツ、さつさと居なくなっちゃえばいいのよ。柚希が一番助けて欲しかったときになにもしてくれなくて、そのくせ学校行かなくなったら妙にちやほやして、学校に行かそうとして……。あんなヤツ、父親じゃない」

「柚希……………」

悠斗は思いだしていた。柚希がなぜ不登校になったのか。そして、不登校になる前に、父親に救いの手を差し伸べて欲しかったということ。だが、父親は転校させてくれという柚希の願いを全く取り合わなかったという。考えてみれば当たり前のことともいえるが、執拗ないじめに遭っている当人にしてみれば、父親は自分を護ってくれる最後の防波堤のようなものだったのだろう。

だが、その父は自分を守ってはくれなかった。その事実だけが柚希を今も苦しめている。しかし、このままでいいはずがない。悠斗は身を切る思いで決断した。

「柚希……………」

肩を掴み、強引に自分の方を向かせる。涙に濡れた瞳が悠斗を射貫く。しかし決意は変わらない。悠斗は、右の手のひらで、柚希の頬を打った。

パシンという乾いた音。打たれた頬を抑えて俯く柚希。もしかしたら何もかもが壊れてしまいかもしれない危険な賭だった。

「柚希……、俺には本当の母さんの記憶がほとんどないのは知ってるよな？ 両親が揃ってるっていうことは、それだけでもけっこうな幸せだと俺は思うんだ。出来れば俺だって本当の母さんに逢いたい。でも、それは叶わない。なぜなら……母さんはこの世の人じゃないからだ」

柚希の身体がびくつと震える。打たれた痛みからではない涙が、大きな瞳を潤ませていく。

「なあ、柚希、もしかしたら、もしかしたらだぞ？ お前は二度とお前の父さんと話が出来なくなるかもしれないんだ。お前は本当にそんなことを望んでいるのか？」

「……わけないじゃない」

「えっ？」

「そんなわけないじゃない！ お父さんはお父さんだよ！ でも柚希を助けてくれなかったのも本当なの！ 柚希だってどうしていいかわからないんだよ！ おにいちゃん、柚希はどうしたらいいの！？」

しがみついてくる柚希を咎めることなく、悠斗は受け止めた。長い黒髪をゆつくりと優しく撫でる。自分の胸で泣く柚希に悠斗は静かに囁きかけた。

「俺は、俺と同じ寂しさをお前に味わって欲しくないんだ。だから、まずは電話に出ろ。それからのはあとで考えよう」

柚希はコクリと頷くと、悠斗の胸を離れてふらふらとした足取りで電話機の方へと歩いていった。電話機の横に置きっぱなしになっていた受話器を取る。きつと会話は筒抜けだったに違いない。柚希は震える声で母に呼びかけた。

「もしもし……おかあさん。うん、柚希だよ……」

柚希の父は脳内出血を起こしたが、一命を取り留めた。搬送が速かったことと、専門医が偶然夜勤の担当だったために命拾いしたのだ。ただし、しばらくは容態が急変する可能性もあり、医者としても「保証は出来ない」というのが精一杯らしい。

人の命なんてものは、いつどこで失われるかわからない。昨日まで元気だった人が今日になって突然いなくなる。そんなことも珍しくはない。

柚希は電話口で母親をなだめ、慰め、自分も家に帰ると言った。

あれほどまでに嫌悪していたはずの父の危篤。やはり心の中では納得のいかない部分も多いのだろう。電話を終えてからの柚希は、夕食の間も押し黙ったままだった。

いつものように順番に風呂に入り、それぞれの部屋に戻る。悠斗も宿題を片付ける為に机に向かっていた。ようやく半分片付いたあたりで、扉が控えめにノックされる音が悠斗の耳に届いた。

「どうぞ」

「おにいちゃん、邪魔だったかな……」

「いや、ちょうど休憩しようとしてたところだから。ま、座れ。それで、用は何だ、柚希？」

「うん……あのね、柚希ね、明日の朝の電車で家に帰ろうと思う」

「そうか」

「それだけ？」

「今は仕方ないだろうからな。とにかく、早く帰ってお母さんを安心させてやれ」

「うん……」

沈黙が二人の間に落ちる。次に何を言っているのか、それが互いに分からない。下手に言葉にしまったら、取り返しのつかないことになってしまうのではないかという恐怖。それを打ち破ったのは、柚希の方だった。

「ね、おにいちゃん。柚希ね、樟葉先生と約束したの。来年必ず、

生徒として仁正学園に戻ってきました。そして、樟葉先生みたいな先生になりますって……。だから、もし仁正学園に受かったら、その時はまた、このうちにおいてくれるかな」

「当たり前だろ。柚希は俺の大事な従妹だ。露木家の一員なんだ。お前はいつここに来てもいい。でも、本当の家は――」

「分かってる。柚希には本当に帰る家があるんだもん。だから、帰らないとね」

柚希は目に涙を浮かべながらもとても綺麗な笑みを浮かべていた。

翌朝早く、悠斗は目覚まし時計の音で目覚めた。何でこんなに早い時間に時計が鳴るのか。ボンヤリとした意識の中で悠斗は自問自答する。

「そうだ。柚希を見送りに行かないといけないんだった」

それを想い出すと、急に脳みそが覚醒する。二階の洗面所で顔を洗い、歯を磨き、自室に戻り手早く制服に着替える。柚希の乗る電車は始発電車だ。肝心の柚希はどうしているのかと部屋の扉をノックする。だが返事がない。悠斗は一声かけてから開き戸を少し開いた。すでに布団は上げられ、柚希の私物をまとめた軍用のごついシヨルダーバッグが部屋の真ん中に鎮座している。

「もう起きてるのか。ううつ、と、トイレ！」

二階にも洗面所があるなら、二階にもトイレを作っておけばいいものを、と悠斗は心中で呟く。トイレは浴室の隣にある。まずはスツキリして、それから柚希を探そう。悠斗はそう決めた。階段を急ぎ足で下り、脱衣場の扉をがらりと開く。トイレは目の前だ。だが、悠斗の目の前にあったのは、一糸まとわぬ柚希の白い肢体だった。

「……………」

「……………」

気まずい沈黙が二人を支配する。だんだんと紅潮していく柚希の

顔。これはまずいと悠斗が逃げ出す前に、絹を裂くような柚希の叫びが家中に響いた。

「いやあああああああああああつ！！ おにいちゃんの変態！！」

「いや、ちよつとまで、柚希、身体を隠せつ！ 俺はただトイレに……くはっ！」

すっ飛んできた替えのボディソープのボトルをもろに顔面で受けて、悠斗は悶絶した。なにしろ体育館裏で殴られた傷もまだ癒えていないのである。その間も柚希の物理的な攻撃は続き、様々な物かとんでくる。悠斗は顔面をかばいながら何とかトイレに逃げ込んだ。「ゆずちゃん！ どうしたの！？」

「シャワー浴びようとして服を脱いでたら、おにいちゃんがいきなり……」

「ちよつと、おにいちゃん！ どういうこと！？」

「俺はただトイレに行きたかっただけなんだ——っ！！」

なんとか柚希と雛子の誤解も解けて、トイレという牢獄から開放された悠斗を待っていたのは、時間との競争だった。

「だから……誤解だって……いったのにっ！」

「そんなこと……言われたって……見られた事には……かわりないもん！」

「どうでもいいけど……はやくしないと……間に合わないよっ！」

悠斗が後を振り向くと、ちよつと空車のタクシーが走ってくるどころだった。手をブンブンふってタクシーを止める。

「はやく乗れっ！ 駅前まで、超特急で！」

「はいよっ！」

タクシーがタイヤを軋ませて走り出す。カーブもタイヤを鳴らしながら凄いスピードで駆け抜ける。フロントガラスの前の風景が横に流れる。まるでレースか何かのようだ。後席に収まった三人は繰り返し襲いかかってくるGで、左右に揺さぶられっぱなしだった。

「ほい、到着！ 間に合ったかい？」

「ははは……、よ、余裕で……」

料金を支払い、タクシーを降りると、運転手は右手をシユタッとあげて挨拶すると、颯爽と走り去っていった。

「神風タクシーってのは昭和の伝説じゃなかったんだな……」

「わたし、トラウマになりそう……」

「うつつ、柚希は車酔いしかけたよお」

時計を見れば、始発電車がくるまでまだ一〇分ほどある。悠斗たちはとりあえず切符売り場で柚希が切符を買ってくるのをベンチで待っていた。

「ね、おにいちゃん」

「ん？ なんだ？」

「ゆずちゃんの裸、見たんでしょ？ どうだった？」

「ななな、何を言い出すんだお前は！」

「わたしのと比べて……どうだった？」

「そんなの……比べられないよ」

雛子はがっかりしたと全身で表現しつつ、大きくため息をついた。
「カッコイイおにいちゃんばっかり最近みてたからかなあ。こんなヘタレのおにいちゃんはわたしイヤだよ」

そこに緑の窓口で切符を買ってきた柚希が口を挟んだ。

「ヘタレなのもおにいちゃんだから、柚希は好きだよ」

「お前ね、大体お前があんな時間にシャワーなんて浴びようとしてなければだな——」

「あ、おにいちゃん、あれなんだろう？」

柚希は不意に斜め下を指さした。つられて少し膝を曲げて下を向いた悠斗の唇に、柚希の花びらのような湿った脣が重なられた。

「ちょ、ゆずちゃん……！」

「柚希！」

「えへへへっ。今回の件はこれで勘弁してあげるよ、おにいちゃん！」

柚希はくるりときびすを返すと改札へ向かう。改札を通って、一度振り向き、大きく手を振ると、柚希はそのままホームへの階段を下りていった。

「台風は去ったか……」

「おにいちゃん、わたし、さっきの答えまだ聞いてないよ」

「だから、俺になんて言わせたいんだお前は！」

第三章 — 義妹と従妹 — 4 (後書き)

い。いかがでしたか？ もしよろしければご意見ご感想などお寄せ下さ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6259y/>

お義兄ちゃんと呼ばないでっ！

2011年11月27日19時53分発行